

新編紫文

一名通俗源氏物語

卷七

紅雲御鈴柏
梅隱法虫木
白幻夕横
官霧務笛



新編紫史卷七

松風閣主人譯

第三十五帖 柏木

此帖は源氏
四十八歳の
春より秋に
至る

柏木中納言
病臥懊惱

柏木中納言は、かくばかり病惱み渡り給ふこと、尙平癒らで、年
も返りぬ、父致仕大臣、母北方君思し歎く様を、中納言は見奉
るに、強ひて懸け離れなむと思ふ命は、かひなく生き残り、また
父母に先つ不孝の罪、重かるべきことを思ふ心は、心としても、
然りとて、また強ちに此世に離れ難く、惜み留めまほしき身にも
あらず、幼稚かりし程より、思ふ心、人とは特別にて、何事を
も、人には今一段勝らむと、公私の事に觸れて、攝政にまで
もならむと、斜ならず思ひ上りしがど、その心叶ひ難かりけり

○柏木

野山にも○
孟津抄にい
つくにか世
をばいとほ
む心こそ野
にも山にも
いとふべら
なれまたい
つまでか野
べに心のあ
くがれむ云
々とあり
誰も千年の
○六帖に小
町の歌かく
も世に心に

と、女三宮を取放したるを始めとして、一二の節毎に、身を思
ひ落してし以來、凡ての世の中、不用じく思ひ成りて、後世の
行法に、本意深く心澄みにしを、兩親達の、御遺憾を思ひて、野
山にもあくがれむ道の、重き羈絆なるべく覺えしかば、右様左
様に紛らはしつゝ、過ぐしつるを、女三宮の心に任かせぬこと、
六條院に知られ居ることなど、思ひ集むれば、終に尙世に立ち
振舞ふべくも覺えぬ物思の、一方ならず身に添ひにたるは、我
より外に、誰かは辛き、我心づから持損ひつるにこそあるめれ、
と思ふに、恨むべき人もなし、神佛をも、怨言たむ方なきは、こ
れ皆然るべき前世の因果にこそあらめ、誰も千年の松ならぬ世
は、終に留まるべきにもあらぬを、今我身、この世を捨てなば、
彼の宮にも、我故にと、少しは打忍ばれぬべき程にて、等閑

物のかなは
ぬか誰も千
年の松なら
なくにとあ
り
ひとつ思に
○細流抄に
夏虫の身を
いたづらに
なすことも
ひとつ思に
よりてなり
けりとあり

柏木密消
息女三宮

の哀情をも懸け給ふことあらむこそ、ひとつ思に燃えぬる功能
にはせめ、強て生き長らへなば、自然あるまじき名をも立ち、我
も宮も、安からぬ亂出て来るやうもあらむ、それよりは、こゝ
に身を棄てなば、無禮と心置き給へらむ院の邊にも、然りとも
と思し免してむかし、萬の事、終焉の結局には、皆消滅ぬべき
業なり、また院に對しても、この外には、別様の過失なければ、
年來物の折節毎に、纏はし馴らひ給ひにし方の愛愍も、さすが
に出て來なむ、など、徒然に思ひ續くるも、打返しと味氣なし、
年経ても顯はれざる事もあるに、何どかく間もなく露はし成し
つる身ならむ、と、搔き暮らし思ひ亂れて、枕も泛きぬばかり、人
遣ならず涙を流し添へつゝ、少許病氣の隙間ありとて、看護の
人々立ち去り給へる間に、女三宮の御方へ、御文奉り給ふ、

(柏文) 今は此世も、限りに成りにて候ふ有様は、自然聞召すやうも候はむを、吾が病症の、如何なりぬるとなりとても、御耳留めさせ給はぬも、道理なれど、いと憂くも候ふかな、と書き續くるにも、瘦せ細りたる手の、いたく慄けば、思ふ事も、皆書き中止て、

今はとて○
終焉の火葬
の烟も君ゆ
ゑに結ばれ
て此世に残
らむとなり

(柏歌) 今はとて、燃えむ烟も、結ばれ、絶えぬおもひの、尙や残らむ、愛憐となりとも、一言言はせよ、それをもて、やがて心長閑めて、人遣ならぬ、妄執に惑はむ途の、光にも爲候はむ、
と申し給ふ、小侍従が許にも、懲りずまに、哀なる事どもを、言ひ越せ給へり、さて、
(柏) 自分も、今一度言ふべきことぞある、

と言へれば、小侍従は、前にも言ひし如く、中納言の乳母の女にて、童女の時より、然る便には、中納言の方へ参り通ひつゝ、見奉り馴れたる人なれば、中納言の、女三宮に想ひ懸け給ふ、負ふけなき心こそ、うたて覺えけれ、今は限りと聞くは、いと悲しくて、泣くく女三宮に、

(小) 中納言殿も、今は限りのやうにおはすめれば、この御返事をなりとも爲させ給へ、誠にこれを終結にもこそ爲候へ、と申せば、宮は、

(三) 我も、この惱に、今日か明日かの心地して、物心細ければ、大方の世の哀ばかりは、思ひ知らるれど、中納言の事については、院にも聞召されつることにて、いと心憂きこと、思ひ懲りにしかば、いみじくぞ慎ましき、

小侍從密使
柏木中納言

とて、更に御返事書き給はず、この宮の御性質の、強く固やかなるにはあらねど、耻しげなる院の御氣色の、折々微めかし恨み申し給ふが、いと恐しく詫びしきなるべし、されど小侍從は、御硯など取まかなひて、頻に御返事を責め申せば、宮はしぶしぶながら書き給ふを、小侍從取りて、忍びて宵の紛れに、中納言の方に参りぬ、父大臣は、賢き行法僧、葛城山より請じ出たるを、待受け給ひて、加持参らせむと爲給ふ、御修法、讀經なども、いと仰山しく騒ぎたり、人の申すまゝに、様々聖だつ驗者などの、專世にも聞えず、深き山に籠りたるなどを、中納言の弟の君達を遣しつゝ、尋ね召すに、氣憎く氣に喰はぬ山伏どもなども、いと多く参る、さて中納言の病惱ひ給ふ様の、何處となく、物を心細く思ひて、時々しくくとばかり泣き給ふ、

致仕大臣召
行僧・加三持
中納言病

陰陽師なども、多くは女の靈とばかりトひ申しければ、然る女の靈など、出ることもある、と、思せど、更に物怪の顯はれ出て來るもなきに、父大臣も、思ぼし煩らひて、かゝる山の隈々をも尋ねて、驗者ども召し給ふなりけり、この葛城の聖も、丈高やかに、眼つき恐しくて、荒らかに仰山しく、陀羅尼經讀むを、中納言は、心に、いで憎や、罪業の深き身にやあらむ、陀羅尼の聲高きは、いと氣怖しくて、いよく死ねべくこそ覺ゆれ、とて、やをら滑り出て、彼の小侍從と語らひ給ふ、父大臣も、然やうとも知り給はず、中納言は、打休眠みたる人、人して申させ給へば、大臣、然やうに思ひて、忍びやかにこの聖と物語し給ふ、年更け給へれど、尙花やぎたるところ着きて、物笑ひし給ふ大臣の、かゝる山出の驗者どもと、對ひ居て、こ

中納言密語
小侍従

の嫡子の病惱ひ始め給ひし有様、何ともなく打屈撓みつゝ、重症り給へることなど、語らひて、眞にこの物怪顯はるべく念じ給へ、など、委細に申し給ふも、いと哀なり、中納言は、これを聽きて、小侍従に、

(柏) 彼れ聞き給へ、父は何の罪とも思し寄らぬに、驗者ども召して、トひ寄りけむ、女の靈こそをかしけれ、眞に彼宮の、然る御執の、此身に添ひたるならば、いと嬉しく、かく世を厭はしき身も、引き返し尊くこそなりぬべけれ、それにつけても、負ふけなき心ありて、然るまじき過失を引出て、他人の御浮名をも立て、我身をも顧みぬ類、昔の世にも、なきにしもあらざりける、

と思ひ直すに、尙氣容煩惱はしく、彼の院の御心に、かゝる咎

魂の○河海抄に戀ひわびてよなよな感ふ我魂はなかく身にも返らざりけり
結び留め云々○伊勢物語に思ひあまり出てにし魂のあるならむ夜深く見えばたま結びせよとあり

を知られ奉りて、世に長らへむことも、いと目眩く覺ゆるは、實に道理なる、院の御光なるべし、

(又) 深き過失もなきに、彼の試樂の時に、院と目をば見合せ奉りし夕の程より、やがて搔き亂り、惑ひ始めにし魂の、身にも返らずなりにしを、彼の六條院の内、女三宮の邊に、あぐがれ歩かば、結び留め給へよ、

など、いと弱げに、蟬の壳のやうなる様して、泣きみ笑ひみ語らひ給ふ、小侍従は、宮も、物をばかり、耻しく慎ましく思したる様を語るに、中納言は、心に、さて宮の打濕り面瘦せ給へらむ御様の、面影にばかり見奉る心地して、思ひ遣られ給へば、實にあくがる、魂や、彼の宮の内に往き通ふらむ、など、思して、いとゞしき心地にも、亂るれば、

柏木中納言
密見ニ女三
宮返書一

(柏) 今更に、彼の宮の御事よ、心に懸けても申さじ、現世はかく果敢なくて過ぎぬるを、我が一念、宮の長き世の羈絆にもこそならぬ、と思ふぞ、いと御氣の毒なる、心苦しき彼の御懷妊の御事を、平産にとりとも、いかで聞き置いては終りなむ、見し夢を、心一つに思ひ合せて、また語る人もなきが、いみじう悒鬱くもあるかな、
など、色々と取集め、思ひ染み給へる様の深きを、小侍従は、女三宮の爲、且は罪業重く、いとうたて恐しく思へど、哀情もまたえ忍ばずして、自分もいみじく泣く、中納言は、紙燭召して、宮の御返事見給へば、御手跡も、尙いと幼稚げに、面白き程に書き給ひて、

(三文) 御病氣、心苦しう聞きながら、いかでか此方よりは、御

立ち添ひて
云々○我も
憂きからに
君が終焉の
烟に立ち添
ひて後れず
消えなむと
なり

行へなき云
々○吾身火
葬の烟と消
え去りても

見舞も申さるべき、唯推量り思ふばかりに候ふ、御文に、殘らむとあるは、立ち添ひて、消えやしなまし、憂きことを、おもひ亂るゝ、烟くらべに、我も後るべきかは、
とばかりあるを、中納言は、愛憐に辱しと思ひ給ふ、かくて中納言は、

(柏) いてや、この烟ばかりこそは、此世の思出ならぬ、果敢なくもありけるかな、
と、いと泣き勝り給ひて、御返事、臥しながら、打休息みつ、書き給ふ、言の葉の繼續もなく、奇怪しき鳥の跡のやうにて、

(柏歌) 行へなき、空の烟と、なりぬとも、思ふあたりを、立ち離れじ、烟とならむ夕は、別きて詠めさせ給へ、我身

亡からむ後は、咎めさせ給はむ人目をも、今は心安く思し成りて、かひなき哀愍をなりとも、絶えず懸けさせ給へ、など、書き亂りて、心地の苦しき勝りければ、小侍従に、
 (柏) よし、甚く夜更けぬ先に歸り参りて、かく我が命も、限りの様になむ、とも申し傳へ給へ、長居し給ひては、今更に、人怪しと思ひ合せむを、吾が後世まで思ふこそ困しけれ、如何なる前世の宿因にて、いとかる及ばぬ事にも、心に染みけむ、
 と、泣くく、元の所へ膝行り出で給ひぬれば、小侍従は、心に、例は中納言は、我をば何時までも、無期に迎へ居るて、女三宮の事については、漫言をまで言はせまほしく爲給ふを、今宵は、言寡にて、早くも歸りね、と、言ふは、全く御病重き故か

と思ふが、いと哀なるに、得も出て遣らず、さて中納言の御病體を、乳母小侍従は語りて、いみじく泣き惑ふ、況して父大臣などの、思したる氣色ぞ、いみじきや、
 (致) 昨日今日、少しは良しかりつるを、何とか、いとかく弱げには見え給ふ、
 と、大臣なども、泣き騒ぎ給ふ、中納言は、
 (柏) かるも、何か候はむ、尙この世に命留まり候ふまじきなるめり、
 と申し給ひて、自分も泣き給ふ、
 女三宮は、この暮方より、俄に惱ましく爲給ひけるを、御産の御氣色と、見奉り知りたる女房達、騒ぎ満ちて、院にも申したりければ、院は、驚きて渡り給へり、院は御心の中には、あな

御子誕生○
この御子後
に薫中將と
いふ

口惜しや、中納言の胤の、思ひ難る方なくて、純粹の我が兒に見奉らましかば、いと珍らしく、嬉しからまし、と思せど、人には氣色漏らさじと思せば、疎略にせずして、驗者など召し、御修法は何時となく不斷にせらるれば、僧どもの中に、驗ある限り、皆参りて、加持参り騒ぐ、宮は終夜悩み明かさせ給ひて、日差し上る間に、御子誕生れ給ひぬ、院は男子と聞き給ふに、その男子の、かく忍びたる事の、生憎に著き、中納言の顔つきにて、差出で給へらむこそ、困しかるべけれ、女子にてあればこそ、何となく紛れ、且は數多の人の見ぬものなれば、心安けれと思すに、またかく心苦しき疑念、雜りたるにつけては、男子の方、却て心安し、そは男子は、等閑に爲成しても善けれど、女子は、疎略に扱かひ難ければ、とも、思ひ返し給ふ、それにつけ

若君産養

ても、怪しや、吾が世と共に、長く恐しと思ひつる、彼の薄雲、女院との、物の紛れに、冷泉院の生れ給ひし事の應報なるめり、現世にて、かく思ひ懸けぬ事にて、應報を見つれば、後世の罪も、却て少しは輕みなむや、と思す、他人はまた事情を知らぬことなれば、心特別なる御腹にて、然も末に誕生おはしたる御寵愛、いみじかりなむ、と思ひ營み奉仕る、御産室の儀式、嚴重しく仰山し、紫、上を始めとして、御方々、様々に爲出て給ふ、御産養、世の常の折敷、衝重、高杯などの心はえも、別段に心々の競争しさ見えつゝぞ、執り行ひける、五日の夜は、秋好、中宮の御方より、子持、宮女三の御前の物、女房の中にも、品々に思ひ宛てたる分際々々、公事に嚴重しく爲させ給へり、御粥、屯食、五十具、所々の饗、六條、院の下部、院の廳の召次所、何か

の隅々まで、嚴重しく爲させ給へり、中宮職は、中宮大夫より始めて、冷泉院の殿上人まで、皆参れり、七夜の産養は、禁裡より爲給ひて、それも公事様なり、致仕大臣など、産養の事、心特別に奉仕り給ふべきに、此頃は、嫡子中納言の大病にて、何事も思されずして、大方の御見舞ばかりぞありける、親王公卿達など、數多御慶祝に参り給ふ、大方の氣色も、世になきまで傳き申し給へど、院の御心の中に、心苦しと思すことありて、甚くも持て難し申し給はず、御樂遊などはなかりけり、女三宮は、細弱なる御様に、いと氣味悪く、また馴らはぬ初産の、恐しく思されけるに、御湯なども食召さず、中納言との關係の、身の憂きこと、かくあるにつけても、思し入るれば、さばれ、此序にも死なばやと思す、院は、いと能く人目を飾りて、實子の

やうに待遇し思せど、また何となく心悪しげに思しなどして、取別きても見奉り給はずなどあれば、宮の老女などは、(老女) いでや、院の疎略にもおはしますかな、珍らしく誕生で給へる御有様の、これほど忌々しきまで美しくおはしますを、と慈愛しみ申せば、宮は片耳に聞き給ひて、御心の中に、院は、さやうにばかりこそ、思し隔つることも勝らめ、と恨めしく、我身辛くて、尼にもならばやの御心着きぬ、院は夜なども、女三宮の御方には、御寝らず、晝方などぞ、差覗き給ふ、(源) 世間の果敢なきことを見るまゝに、行末短く、物心細くて、行法がちに成りにて候へば、かゝる間の、亂がはしき心地するにより、え参り來ぬを、いかゞ御心地は、爽快に思し

成りにたりや、心苦しうこそあれ、

とて、御几帳の傍より、差覗き給へり、宮は御頭擡げ給ひて、

(三) 猶え生きたるまじき心地ぞし候ふを、かゝる産事にて、死にたらば、罪業重かるなり、尼になりて、もしその功德にてや、生きも留ると、試み、またかくて亡くなるとも、罪業滅ふことも、あらむと思ひ候ふ、

と、平常の御氣容よりは、いと大人びて申し給ふを、院は、

(源) いたうたて、忌々しき御事なり、何どてかさやうにまで、え生きも留まるまじきとは思す、かゝる産事は、さやうにはかりこそ恐しかるなれど、さて必存命へぬ業にはあらず、と申し給ふ、さて御心の中には、眞にさも尼にもならむと、思し寄りて言はゞ、さやうにもして見奉らむは、哀なりなむかし、

かくて此儘に、且見つゝも、事に觸れて、我より心置かれむは、氣の毒に、さりとして、また此儘にては、憂き事打交りぬべきを、我ながらえ思ひ直すまじく、自然、疎略に人の見咎むることもあらむが、いと氣の毒に、かくて山院などの、聞召さむことも、院は事情を知り給はねば、凡て我が解怠にばかりこそはならめ、御病惱に託けて、さやうに尼にもや成し奉りてまし、など、思し寄れど、またいと可惜しく、哀愍にのみ思されて、行末長き御髪の生ひ先を、然ばかり窶さむも、さすがに心苦しければ、(源) 猶御心強く思し成れよ、御病も怪しうはおはせじ、限りと見えし紫上も、今は平癒なる例近ければ、さはいへ、さすがに頼みある世にぞ候ふ、
など申し給ひて、院は、宮に、御湯など進らせ給ふ、宮は御顔

容も、いと甚く蒼み瘦せて、淺ましく果敢なげにて、打臥し給へる御様、大様に美しげなれば、院は、御心に、いみじき過失ありとも、心弱く免しつべき御様かな、と、見奉り給ふ、朱雀院は、女三宮の、珍しき御初産の事、安産なりと聞召して、愛憐にゆかしく思ほすに、かく御産後に悩み給ふ由のみ、御聞えあれば、如何にもものし給ふべきにかあらむ、と、御山の御修行も、亂れて思しけり、女三宮は、それほど弱り給へるに、物をも食召さで、日頃經給へば、いと頼もしげなくなり給ひて、年頃見奉らざりし時よりも、父院の、いと戀しく覺え給ふを、

(三) 此儘にて、復も見奉らずなりぬるにやあらむ、とて、甚く泣き給ふ、院は、宮の、かく申し給ふ様を、然るべき人して、朱雀院の御方へ傳へ奏せさせ給ひければ、父院は、

朱雀院行幸六條院

この道の闇
○後撰集に
人の親の心
は闇にあら
れども子を
思ふ道に惑
ひぬるかな
とあり

いと堪へ難く、悲しと思して、世の例有るまじき事とは思しながら、世に隠れて、御山を出でさせ給ひて、六條院へ臨幸し給ふ、豫てより御消息もなくて、俄にかく渡りおはしましたれば、主人の院、驚き畏まり申し給ふ、山院は、

(朱) 一旦山に籠りては、世間を顧盼すまじく思ひ候ひしがど、尙惑ひ覺め難きものは、この道の闇にぞ候ひければ、修行も解怠して、もし子供後れ、親先つ途の、道理のまゝならで別れなば、やがてこの妄執や、互に残らむと、味氣なさに、現世の譏謗をも知らで、かくはものし候ふ、

と申し給ふ、法皇の御容にて、艶めかしく懐かしき様に、打忍び寢れ給ひて、端正しき法服ならず、墨染の御姿、かくもあらまほしく、清らなるも、院源は羨ましく見奉り給ひて、例の通

り、まづ涙落し給ふ、

(源) 煩惱ひ給ふ宮の御様、異なる御病惱にも候はず、唯月頃弱り給へる御有様に、はかくしう物なども食らぬ積りにや、かくものし給ふにこそ候へ、

など申し給ふ、また、

(又) 傍痛き御座所なれども、彼方へ、

とて、宮の御几帳の御前に、御禱参りて、法皇をば入れ奉り給ふ、さて女三宮をば、女房ども、とかく修飾ひ申しして、床の下に降り奉る、法皇は、御几帳少し推遣らせ給ひて、

(采) 夜居の加持の僧などの心地すれど、また驗着くばかりの行法にもあらねば、傍痛けれど、唯覺束なく思ひ給はむ我が姿を、そのまゝ見給ふべきなり、

朱雀院親
訪女三宮

とて、御目推拭はせ給ふ、宮もいと弱げに泣き給ひて、

(三) 生くべくも覺え候はぬを、かくおはしましたる序に、尼に成させ給ひてよ、

と申し給ふ、法皇、

(采) 然る御本意あらば、いと尊きことなるを、さはいへ、何も此度に限らぬ命の程にて、行末遠き若き間のもの、尼になるは、却て後々、事の亂あり、世の人に誹謗らるゝやう、ありぬべきことにぞある、尙遠慮りぬべき事にこそあれ、

など宣はせて、六條院に、

(采) かくぞ宮の出家をば、進み言ふを、今はいよく限りの様ならば、片時の間にても、功德はありぬべければ、その補助あるべき様にて、尼にもなさむとぞ思ひ候ふが、いかに、

と宣へば、院は、

(源) 日頃も、宮はかくぞ言へど、邪氣などの、宮の心誑かし
て、かゝる方に進むるやうも候ふなるを、とて、某は聞きも
入れ候はぬなり、

と申し給ふ、法皇は、

(采) 物怪の教にても、それに負けぬとて、悪しかるべきこと
ならばこそ遠慮らめ、病氣に弱りにたるものゝ、今は限りと
て、かく望み申すことを、聞き過ぐさむは、後の悔氣の毒よ、
と宣ふ、さて法皇の御心の中には、この女三宮は、限りなく後
安く、六條院に譲り置きしを、院の快く請け取り給ひて、さて
さやうにも院の志深からず、吾が思ふやうにはあらぬ御氣色を、
事に觸れつゝ、年來聞召し、思し集めけること、顔色に出して

恨み申し給ふべきことにもあらねば、且は宮の、院に寵愛もせ
られ給はぬことゝ、世の人の思ひ言はむ所も、口惜しく思し渡
るに、かゝる折に出家せさせて、院に持て離らせなむも、世を
恨みたる氣色ならで、何かは人笑にもならむ、夫婦の間ならぬ、
出家の後の、大方の後見には、院は、さすがに猶頼まれぬべき
御掟なるを、唯預け置き奉りし効能には思ひ成して、憎げに院
を恨み背く様にはあらず、出家せさせて、嘗て分配の御處分に、
廣く面白き宮三條宮、先帝より賜はり給へるを修飾ひて、住ませ奉
らむ、我が世に在る間は、たとひ出家の方にてても、不安心から
ず聞き置き、また彼の六條院も、さはいふとも、いと疎略には、
よもや思ひ放ち給はじ、その上にて、院の御心の末をも、見果
てむ、など、思ほし取りて、六條院に、

(朱) さらば、かく我がものしたる序に、宮に、戒受け給はむ
 ことをなりとも聞いて、結縁にせむかし、
 と宣はず、院は、中納言の事をば、憂しと思す方も忘れて、こ
 は如何なるべきことぞ、と、悲しく口惜しければ、え堪へ給はず、
 内に入りて、女三宮に、

(源) 何とかく、幾世しも候ふまじき我身を振り捨て、其方
 はかく思しなりにけるぞ、猶暫時心を鎮めて、御湯参り、物
 などを食召せ、出家は尊きことなりとも、御身弱うては、行
 法も爲給ひてむや、且は御身を養生ひ給ひてこそ、ともかく
 も爲給へ、

と申し給へど、女三宮は、頭振りて、院のいと辛くも言ふと思
 したり、院は御心に、宮は我の無情くて、此身を恨めしと思す

幾世しも○
 古今集に幾
 世しもあり
 し我身をな
 そまかく云
 云とあり

こともありけるにやあらむ、と、見奉り給ふに、いと氣の毒に哀
 なり、かくて院は、とかく宮の出家を、申し止め思し休らふ間
 に、夜明方になりぬ、法皇は御山へ歸り入らむに、道の間も、晝
 は不都合かるべし、と、急がせ給ひて、御祈禱に伺候ふ僧の中に、
 尊き限り、御簾の内に召入れて、宮の御髪落させ給ふ、いと盛
 りに清らなる御髪を殺ぎ捨て、戒受け給ふ作法、悲しく口惜
 しければ、院はえ忍びあへ給はず、いみじく泣き給ふ、法皇も
 また、この宮は、元より皇女達の中に、取別き御愛子にて、尊
 く人よりも勝れて見奉らむと思して、この六條院を後見にさへ
 成し給ひしを、今は出家せさせて、此世にかひなきやうに成し
 奉るも、飽かず悲しければ、打萎たれ給ひて、宮に、
 (朱) かく出家しても、せめて同じくは無事に、念珠をも務め

給へ、

と申し置き給ひて、明け終てぬ内に、急ぎ還幸させ給ひぬ、女三ノ宮は、尙一層弱く消え入るやうに爲給ひて、はかなくしくも御還幸をば、え見奉らず、物なども申し給はず、六條ノ院も、

(源) 夢のやうに、思ひ亂るゝ心惑に、かく昔覺えたる行幸の、畏入りたる御禮をも、え御覽せられぬ亂がはしきは、別段に御山へ参り候ふて、申し上げむ、

など申し給ふ、御送りに、人々参らせ給ふ、法皇は、院に、

(采) 我曩に出家の折、世の中の、今日か明日かに覺え候ひし程に、また知る人もなくて、この宮の漂蕩はむことの、哀に去り難く覺え候ひしかば、君の御本意にはあらざりけめど、かく後見を申し付けて、年頃は心安く思ひ候ひつるを、もしも

この宮、此度幸に生き留まり候はゞ、尼姿に變りては、人繁き住居は、相應なかるべきを、然るべき山里などに、懸け離れたらむ有様も、たとひ出家したりとも、またさすがに心細かるべくやあらむ、宜き様に従ひ計らひ給ひて、猶思し放つまじくぞ爲させ給へ、

と申し給へば、院は、

(源) 更にかくまで仰せらるゝぞ、却て耻かしく思ひ候はるゝ、宮の御出家に、亂り心地、とかく亂れ候ふて、何事もえ辨へ候はず、

とて、女三ノ宮の出家、朱雀院の御恨、さては中納言の事までも、取集めて、實に堪へ難げに思したり、後夜の御加持に、物怪出て来て、

物怪出現

(物怪) 女三宮の御出家、かくぞあるよ、君にはいと賢く、紫上一人をば、取り返しつと、思したりしが、いと妬かりしかば、此宮の邊に、然りげなくてぞ、日頃付き纏ひ候ひつるを、御出家にもなりにたれば、今はいざ歸りなむ、
 とて、からくと打笑ふ、院は御心に、いと淺ましく思して、さては彼の紫上を惱ませし物怪の、またこゝに離れざりけるにやあらむ、と思すに、いと心苦しく、悔しく思さる、宮は物怪の去りたる故にや、少し生き出て給ふやうなれど、尙いまだ頼み難げにはかり見え給ふ、伺候ふ人々も、宮の出家し給へれば、いふかひなく覺ゆれど、かくても平安にさへぞおはしまさば、せめて嬉しかるべきと、念じつゝ、御修法、またも日を延べて、撓みなく行はせなど、萬事に爲させ給ふ、

柏木中納言
 聞女三宮
 出家斷腸

彼の中納言は、病の床におはして、女三宮の尼になり給へることを聞き給ふに、いと消え入るやうに爲給ひて、無下に頼む方少くなり給ひにたり、さて中納言は、落葉宮女二の、哀に覺え給へば、宮の、吾方に渡り給はむことは、今更に輕々しきやうにもあらむを、母上も、父大臣も、かく我が傍につと添ひおはすれば、自然取放して、宮を見奉るやうもあらむに味氣なし、と思して、彼の落葉宮のおはします、一條宮に、今一度詣てむと言ふを、父母更に許し申し給はず、中納言は御兄弟など、誰にもこの宮の御事を頼み申しつけ給ふ、さて落葉宮を、中納言に許嫁せしこと、母御息所は、最初より専心進み給はざりしを、この致仕大臣の、居ても起ちても、懇切に申し請ふて、志深かりしに負け給ひて、朱雀院にも、いかゞはせむと、思し許しけ

るを、一品宮女三の御事を、六條院の、餘り寵愛し給はぬことを、歎き思し亂れける序に、却てこの女二宮は、行先後安く、眞實なる後見儲けたりと宣はすと、中納言は聞き給ひしを、辱く有り難く思し出づれば、母君に、

(柏) かくて我身不幸にて、彼宮を見捨て奉りぬるなるめり、と思ふにつけては、様々に、いと御氣の毒なれど、吾が心より外なる命なれば、如何とも爲難く、堪へぬ宿契、恨めしくて、彼宮の後に残りて思し歎かれむが、心苦しければ、御志あらば、訪問ひものせさせ給へ、

と申し給ふ、母君は、

(母) いてあな忌々し、其方に後れ奉りては、幾何世に經へき宮の御身とて、かくまで行先の事をば言ふぞ、

柏木中納言
遠任權大
納言

とて、唯泣きにはかり泣き給へば、中納言は、落葉宮女二の事をば、委しくもえ申し遣り給はず、御弟の左大辨にぞ、大抵の事どもは、詳細しく申し付け給ふ、さて中納言は、心ばえ長閑に、善くおはしつる君なれば、弟の君達も、また特に末々の若き弟達は、この兄の中納言を、親とばかり頼み申し給へるに、かく心細く言ふを、悲しと思はぬ人なく、殿の内の人も、皆歎く、朝廷にも、口惜しがらせ給ふ、かく中納言、今は限りと聞召して、俄に權大納言に任せ給へり、禁裡よりは、昇進の拜賀に思ひ起して、今一度も参内り給ふやうもやある、と思し詔はせけれど、權大納言は、更にもえ猶豫ひ遣り給はで、心地苦しき中にも、畏り申し給ふ、父大臣も、かく嫡子の、重き御寵任を見給ふにつけても、いよく悲しく、可惜しと思し惑ふ、夕

夕霧左大將
訪柏木權
大納言病
圖

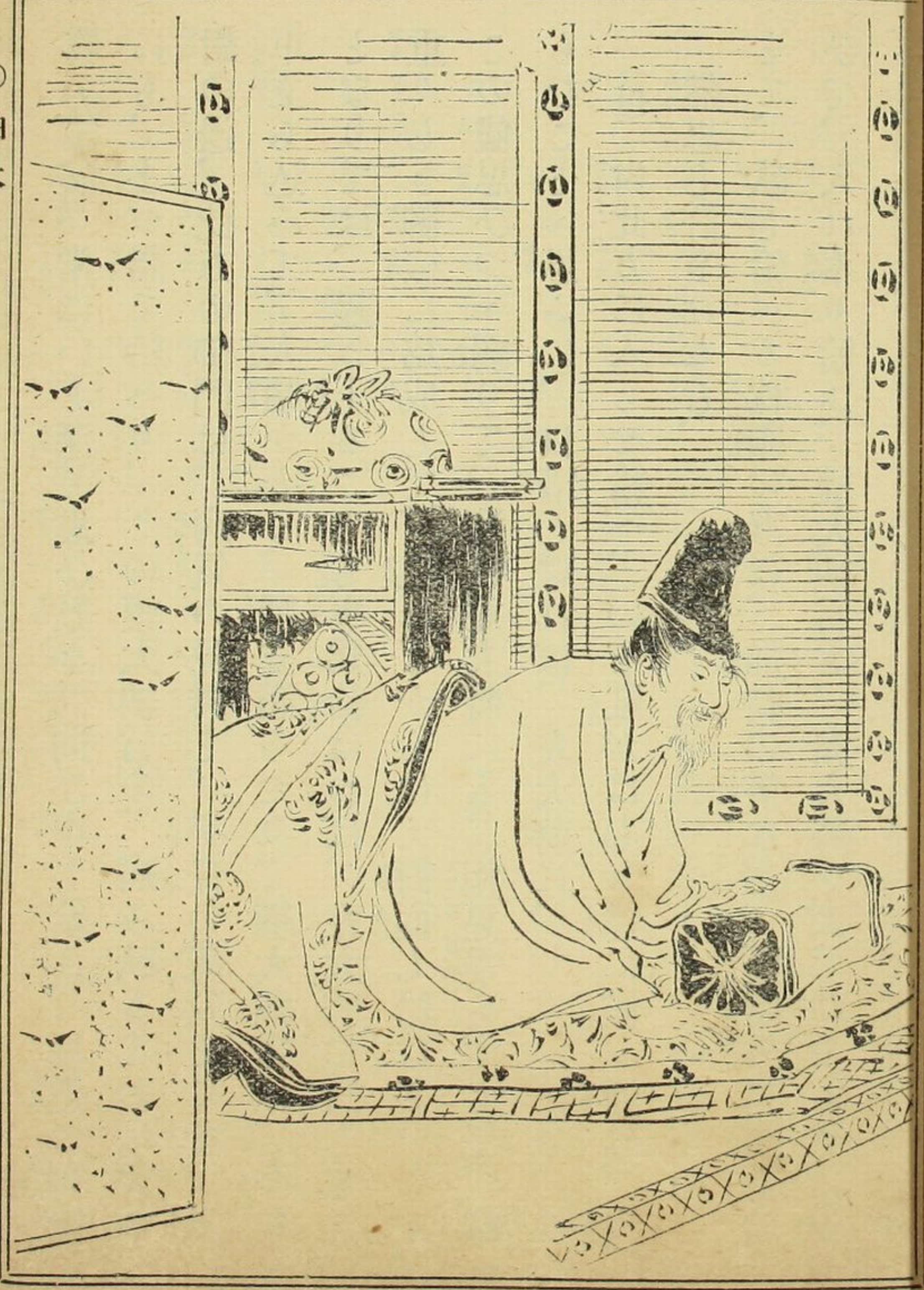
○柏木



三十四

辞世
ゆくへ
なき空
の烟と
なりぬ
とも思
ふあた
りを立
ちはば
なれじ

○柏木



三十五

夕霧左大將
訪柏木權
大納言

霧、左大將、常にいと深く思ひ歎き訪問ひ申し給ふ、昇進の御悦にも、まづ詣て給へり、この權大納言の、病み臥しておはする對の邊、此方の御門は、病氣の見舞と、昇任の祝賀にて、馬車立ち込みて、人騒がしく、騒ぎ満ちたり、權大納言は、今年となりては、起き上ることも專爲給はねば、左大將に對しても、重々しき御様に爲成して、亂れながらはえ對面し給はざりしが、この儘思ひつゝ、弱りて、遂に左大將にも、相見奉らずして、終らむことと思ふに、口惜しければ、左大將に、

(柏) 尙此方に入らせ給へ、いと亂がはしき様に候ふ罪は、自然思し許されなむ、

とて、臥し給へる枕頭の方に、加持の僧など、暫時外に出し給ひて、入れ奉り給ふ、權大納言と、左大將とは、幼少より、少

許も隔心て給ふことなく、睦び交し給ふ御交情なれば、左大將は、別れむことの、悲しく戀ひしかるべき歎、親兄弟の御思には劣らず、左大將は、心に、今日は昇進の悦とて、心地快げならましをと思ふに、いと口惜しく、かひなし、

(夕) 何とかく、頼もしげなくは、なり給ひにける、今日はかかる任官の御悦に、いさゝか健康かにもやおはさむところ、思ひ候ひつれ、

とて、几帳の端を引き上げ給へれば、

(柏) いと口惜しく、我にもあらずなりにて候ふよ、

とて、權大納言は、烏帽子ばかりを押入れて、少し起き上からむとし給へど、いと困しげなり、その様、白き衣どもの、懐かしく柔かなるを、數多重ねて、寢衣引き懸けて、臥し給へり、御

座の邊、物清げに、氣容香ばしく、奥ゆかしくも住み成し給へ
 る、打解けながら、用意ありと見ゆ、重く煩ひたる人は、自然
 髮鬚も亂れ、物むづかしき氣容も添ふ業なるを、權大納言は、瘦
 せ曉ひたるも、いよく白く、貴やかなる氣して、枕を欹て、
 物など申し給ふ氣容、いと弱げに、息も絶えつゝ、哀げなり、左
 大將は、

(夕) 久しく煩ひ給ふ程よりは、別段に甚くも損はれ給はざり
 けり、平生の御容貌よりも、却て勝りてぞ見え給ふ、
 と言ふものながら、涙押拭ひて、

(又) 後れ先つ隔てなくとこそ、契り申し、が、いみじう悲し
 くもあるかな、この御心地の様を、何事にて、かく重り給ふ
 とさへも、え聞き別き候はず、かく親しき間ながら、覺束な

くばかり候ふ、

など言ふに、權大納言、

柏木權大納言遺囑夕霧大將
 兩親にも云々○孝經に夫孝始於事親中於事君終於立身とあり

(柏) 我が心には、重くなる差別も覺え候はず、其處ぞと苦し
 きこともなければ、忽にかくなるとも思ひ候はざりし間に、月
 日も経て、弱り候ひにければ、今は現心も失せたるやうにぞ
 候ふ、惜しげなき身を、様々に引き留めらるゝも、祈禱立願
 などの力にやあらむ、さはいへ、さすがに祈願などに關係ふ
 も、却て苦しく候へば、我心から、死期を急ぎ立つ心地のし
 候ふ、されど、現世の別れ去り難きことは、いとほしくぞ候
 ふ、兩親にも奉仕り中止で、今更に御心どもを惱まし、主上
 に奉仕することも、半途の間にて終り、我が身を顧みる方も、ま
 た況して確乎しからぬ恨を留めつる、大方の歎きをばそれと

我身を顧る
云々○論語
に曾子曰吾
日三省吾
身云々と
あり

しても、また心の内に、私事の思ひ亂るゝことの候ふを、か
かる臨終の刻に、何かは漏すべきと思ひ候へど、猶忍び難き
ことを、君を置き奉りては、誰にかは愁へ申し候はむ、兄弟
これかれ數多候へど、その心々も、様々なることにて、更に
微め申さむもあへなし、實は六條院に對し奉りて、少許なる
事の違目ありて、月頃心の中に、畏まり申しゝことぞ候ひし
を、いと本意なく、世間心細く思ひ成りて、この事件故に、病
着きぬと覺え候ひしに、院の我を召しありて、朱雀院の御賀
の、樂所の試樂の日参りて、御氣色を伺ひしに、猶許されぬ
御心はえある様に、御眼光を見奉り候ひて、いと、世に存命
へむことも、憚り覺え成り候ふて、味氣なく思ひ候ひしに、心
の騒ぎ始めて、かく鎮靜らずなり候ひぬるにぞありける、院

は我をば、人數には思し入れざりけめど、幼稚く候ひし時よ
り、深く頼み申す心の候ひしを、如何なる讒言などのありけ
るにかと、この一事ぞ、今生の妄執にて残り候ひければ、無
論彼の後世の妨にもやならむと思ひ候ふを、御耳に留め置き
て、事の序候はゞ、院に宜しく辨明め申させ給へ、亡からむ
後にも、この勘當免されたらむぞ、君の御功德にも候ふべき、
など言ふまゝに、いと苦しげにばかり、見え勝れば、左大將は、
いみじく哀にて、心の中に、もしくは彼の女三宮の事にもやあ
らむと、思ひ合はすることどもあれども、指して慥には、得も推
測らず、
(夕)如何なる御心の暗鬼にかは候はむ、院には更にさやうな
る御氣色もなく、かく君の危篤り給へる由をも、聞き驚き、歎

き給ふこと限りなくこそ、口惜しがり申し給ふめりしか、何
とてかく、御心に思ふことあるにては、今まで隔て匿し給ひ
つらむ、さやうの事あらば、其方彼方に懸け廻りても、辨明
め申すべかりけるものを、今はかく煩ひ給ひては、いふかひ
なしや、

とて、今更取り返さまほしく、悲しく思さる、權大納言は、

(相) 實に、いさ、かも間隙ありつる折に、此事申して、御意
見も承はるべくこそ思ひ候ひつれ、されど、いとかく今日明
日死ぬべくとしも、自分ながら知らぬ命の程を、思ひ閑め候
ひけるも、果敢なくぞ候ふ、此事は更に御心より漏らし給ふま
じ、然るべき序候はむ折には、御用意加へ給ひて、院に申し辨
明め給へとて、唯今君にはかり申し置くにぞ候ふ、一條宮に

ものし給ふ、落葉宮女二へは、事に觸れて訪問ひ申し給へ、若
くて寡婦になり給へらむを、氣の毒なる様に、彼の山院などに
も聞召され給はむを、宜き様に修ひ申し給へてよ、
など言ふ、尙言はまほしきことは多かるべけれど、心地爲む方
なくなりにければ、

(又) はや歸り給ひね、

と息も切れて、臥しながら、手搔き申し給ふ、加持參る僧ども、
近く参り、母上、父大臣などおはし集りて、人々も立騒げば、夕
霧、左大將は、泣く／＼出て給ひぬ、權大納言の御妹、弘徽殿、女
御冷泉院の女御は、更にも申さず、この左大將の北方、雲井、雁、君など
も、いみじく歎き給ふ、さて權大納言は、心掟の、普く人の兄
心にもものし給ひければ、鬚黒、右府の北方、玉葛、君も、この權

止む薬云々
○細流抄に
我こそば見
ぬ人戀ふる
病すれ逢ふ
より外にや
む薬なしと
あり
柏木権大納
言薨

大納言ばかりをぞ、睦ましきものに思ひ申し給ひければ、萬事
思ひ歎き給ひて、御祈禱など、取別きて爲させ給ひけれど、も
とく戀の病にて、止む薬ならねば、かひなき業にぞありける、
吾が北方、落葉宮にも、終にえ對面し申し給はで、泡の消え
入る様にて、死亡たまひぬ、さて權大納言と、落葉宮とは、年
頃下の心こそ懇切に深くもなかりしか、大方には、いとあらま
ほしく待遇し傳き申して、氣懷しく、心ばえ面白く、權大納言
は、輕々しからず會釋ひて、打解けぬ様にて過ぐし給ひければ、
落葉宮は、辛き節も別段になし、唯男君の、かく命短かりける
御身にて、怪しく、凡ての交情、不用じく思ひ給ひけるなりけ
りと思ひ出て給ふに、いみじく哀にて、思し入りたる様、いと
氣の毒なり、母御息所は、權大納言に許嫁し給ひしこと、最初

女三尼宮聞
柏木薨去
密哀悼

より心ゆかず思したることなれば、いみじく人笑に、口惜しと
見奉りて、歎き給ふこと限なし、父大臣、母北方などは、況し
て言はむ方なく、我等こそ先だゝめ、世の道理なく、老少不定
の、いと辛きことよ、と戀ひ焦がれ給へど、今は何の効能なし、
尼宮女三宮は、六條院の御目を忍び給ひし、負ふけなき心も、
うたてくばかり思されて、世に長かれとしも思さざりしを、權
大納言柏木右衛門督の、かく死去りぬなど聞き給ふは、さすがにいと哀
なりかし、彼の大納言の、曩に、今に思し合することあらむ、と
言ひて、若君の御事を、それぞと思ひたりしも、實にかゝる宿
因にてやありけむ、思の外に、心憂きこともありけむ、と、宮は
思し寄るに、様々物心細くて、打泣かれ給ひぬ、三月になれば、
空の氣色も、物麗和にて、若君、五十日の程になり給ひて、い

と白く美しく、年の程よりは、成長けて、打笑などし給ふ、院渡り給ひて、尼宮に、

(源) 御心地爽快になり給ひにたりや、いてやいとかなき御姿にも候ふかな、例の御有様にて、かく見成し奉らましかば、いかに嬉しく候はまし、心憂くも、我をば思し捨てけることよ、

と涙催みて、恨み申し給ふ、かくて院には、日々に渡り給ひて、今しもこそ尊く、限りなき様に待遇し申し給ふ、若君誕生の御五十日に、餅參らせ給はむとて、母君、尼にましくて、容體異なる御様を、女房達、御祝には、いかがなど申し躊躇らへど、院渡らせ給ひて、

若君五十日祝賀

(源) この兒、女子にもものし給はこそ、母君と同じ筋にて、忌

々しくもあらめ、男子におはせば、何か苦しからむ、

とて、南面に、小き御座所など裝飾ひて、餅進らせ給ふ、御乳母、いと花やかに装束きて、御前の物色々に盡したる、籠物、檜割籠の心ばえどもを、内にも外にも、この御子の根本の事情を知らぬことなれば、籠物、割籠、取り散らし、祝ひ騒ぎて、何心もなきを、院はいと心苦しく、目映き業なりやと思す、尼宮も、御病褥を起き居給ひて、御切髪の末の、所狭く廣こりたるを、いと苦しと思して、額など撫で着けておはするに、院は儿帳を引き遣りて居給へば、宮はいと耻かしくて、背面き給へるいと、少く細り給ひて、御髪は惜しみ申して、長く殺ぎたりければ、前こそ變れ、後は別段に、尼といふ差別も見え給はぬ程なり、次々見ゆる鈍色の御衣ども、昔がちなる今様色など着給

今様色○紅なり

ひて、また尼ともありつかぬ御傍目、院はかくても美しき子供の心地して、艶めかしく美しげなり、

(源) いであな心憂よ、墨染こそ猶いとうたて、目も昏る、色なりけれ、かやうにても見奉ることは、堪ふまじきぞかし、と思ひ慰め候へど、是非なき心地する、舊り難き涙の、今も落つる人様悪さを、いでかく思ひ捨てられ奉る、我身の怠慢の咎に思ひ成すも、様々に胸痛く、口惜しくぞ候ふ、昔に取り返すものにもがなよ、

と打長息き給ひて、

(又) 今はとて、思し離れば、眞に君の御心と、我を厭ひ捨て給ひけることよ、と、耻かしく心憂くぞ覺ゆべき、尙我をば愛憐と思せ、

と申し給へば、尼宮は、

(三) 世を背きたる、かゝる様のものは、物の哀も知らぬものと聞きしを、況して元より知らぬことにて、如何は申すべからむ、

と言へば、院は、

(源) かひなの事よ、物の哀は、他に思し知る方もあらむものを、

とばかり、彼の權大納言の事を、衷心に言ひ中止て、若君を見奉り給ふ、御乳母達は、尊く見善き限り、數多伺候ふ、院はその乳母どもを召し出で、奉仕るべき心掟など言ふ、

(源) あはれ吾が、殘齡少き世に、生ひ出づべき人こそあれ、とて、若君を抱き取り給へば、若君は、いと心安く打笑みて、つ

六條院見
若君

ぶくくと肥え太りて、白く美し、さて院は、御心に、この若君、左大將などの御乳子生ひ、微かに思し出るには似給はず、明石、女御の御腹の御子達は、また父帝の御方様に、王氣づきて、氣高くこそおはしませ、特別に勝れて愛甚くしもおはせず、この若君、いと貴なるに添へて、愛敬づき、目つきの薫りて、笑みがちなるなどを、いと愛憐と見給ふ、されど思ひ成しにやあらむ、いと能く彼の柏木權大納言に似たりかし、眼子の居り様、長閑に耻かき様も、尋常の人には、様離れて、薫り美しき顔様なり、尼宮は、さやうにしも思し別かず、人もまた更に知らぬことなれば、唯院一人の御心の内にはかりぞ、愛憐はなかりける、權大納言の宿契になど見給ふ、大方の夫婦間の不定さも思し續けられて、涙のほろくと翻れぬるを、今日は五十日の御

祝にて、事忌みすべき日なるをとて、涙押拭ひ隠し給ひて、

(源) 靜に思ひ嗟くに堪へたり、

と打誦し給ふ、院は白樂天の五十八を、十取捨てたる御齡なれど、末になりぬる心地し給ひて、いと物哀に思さる、さて若君に對しては、汝が爺に似るなかれとも、諫めまほしく思しけむかし、この間の事情知れるもの、女房の中にもあらむかし、それを吾が知らぬこそ妬けれ、もしも知れるものは、我をば定めて思なりと見るらむと、安からず思せど、我が御咎あることは、勘忍せむ、二つ比へて言はむには、宮の御爲こそ、いと氣の毒なれ、など、思して、顔色にも出し給はず、若宮はいと何心もななく、言語して、笑ひ給へる目つき、口つきの美しきも、事情知らざらむ人は、如何あらむ、院の目よりは、尙いと能く彼の權

靜に思ひ云々
○白樂天が五十八歳にて男子を儲けたる生遅の詩に五十八翁方有後、靜思堪喜亦堪嗟、持盃祝願無他語、慎勿頑愚似汝爺とあり

大納言に似通ひたりけり、と、見給ふに、彼の親達の、この死亡し權大納言に、子なりともあれかし、と、泣き給ふらむにも、え見せずして、人知れず果敢なき形見ばかりを留め置いて、あれほど思ひ上り、成長げたりし身を、我が心もて失ひつるよ、と思へば、哀に氣の毒にて、權大納言に對しては、心外しと思ふ心も、引き返し打泣かれ給ひぬ、五十日の御祝賀も終て、人々退出でたる間に、院は、宮の御許に寄り給ひて、

(源) この兒を、其方はいかゞ見給ふや、かゝる兒を捨て、背き果て給ひぬべき、夫婦の間にやありける、あな心憂、と注意し申し給へば、尼宮は、顔打赤めておはす、院は、(源歌) 誰が世にか、種は蒔きしと、人間は、いかゞいは根の、松は答へむ、哀なり、

誰が世にか
云々○其種
は誰が蒔き
しといふべ
きぞとて下
句いか言
はむとて殿
にかけて松
は答へむが

我は知らず
との意なり

夕霧左大將
追懷柏木
權大納言

など忍びて申し給ふに、宮は御返答もなくて、帔臥し給へり、院は、それも道理と思せば、強ひても申し給はず、さて御心の中に、宮は權大納言の事を、いかに思すらむ、物深くなどはおはせねど、いかでかは尋常には思し給はじ、必悲しく思ひ給ふならむ、と、推量り申し給ふも、いと氣の毒にぞありける、夕霧左大將は、彼の柏木權大納言の、心に餘りて微めかし出でたりしことを、如何なることにかありけむ、少し病怠りて、物覺えたる様ならましかば、あれほど自分から打出で始めたりし程故に、いと能く氣色を見て、委細しく聞き置かましを、言ふかひなき生命の終局にて、折悪しく、能くも問ひ聞かれず、悒鬱く哀にもありしかな、と其折の權大納言の面影、忘れ難くて、兄弟の君達よりも、強ひて悲しと覺え給ひけり、さて左大將は、心に、

女三宮の、かく世を背き給へる有様、仰山しき病惱にもあらで、速に出家を思し立ちける程に、また然りとも、院の容易く許し申し給ふべきことかは、紫上の、あれほど大病の限りにおはして、泣く泣く、出家を申し請ひ給ふと聞きしを、院はいみじき事に思ひ、終にかく懸け留め奉り給へるものを、など、取集めて、些細に思ひ碎くに、權大納言は、猶昔より、絶えず女三宮に想ひ懸けし心ば見えしが、え忍ばぬ折々もありきかし、彼の大納言は、いと能く持て鎮めたる、表面は人より勝りて用意あり、長閑に何事を此人の心の中に思ふらむ、と見る人も推測るに、困しきまで有りしがど、但少し弱き所つきて、柔び過ぎたりし故に、かゝる過失ありけむかし、いかにいみじく戀しきことありとも、然るまじき事に心を亂り、かくも命を捨て、身に替ふべ

き程のことにやはありける、宮の爲にも、いと御氣の毒に、我身もまた徒に爲すべき事かは、然るべき前世の宿契といひながら、いと軽々しく、味氣なきことなりかし、など、心一つに思へど、此等のことは、吾が北方雲井、雁、君などにさへ、申し出て給はず、院にも然るべき序なくて、また申し出て給はざりけり、それは柏木權大納言の、かゝる事をぞ、遺言に微めしと申し出て、さてその御氣色も見まほしがりけるなりけり、權大納言の御父致仕大臣、母北方は、涙の暇なく思し沈みて、果敢なく過ぐる日數をも知り給はず、御法事の法服、御装束、何くれの用意をも、兄弟姉妹の方々、各自にぞ爲させ給ひける、經佛の掟なども、御弟左大辨ぞ爲させ給ふ、七日々々の御誦經なども、人の申し注意すにも、父大臣は、

一條宮哀傷

(致) 我にな聞かせそ、かくいみじく悲哀しと思ひ惑ふに、却て我子の、冥途の妨にもこそなれ、
 とて、正體もなきやうに思し耄れたり、落葉宮には、況して終に對面もせず、覺束なくて別れ給ひにし恨まで添へて、日頃經るまゝに、一條なる廣き宮の内、人氣少く、心細げにて、權大納言の親しく使ひ馴らし給ひし人は、尙參り訪ひ申す、權大納言の見給ひし鷹馬など、その方の預りの鷹飼ども、皆役に離れて、就く所なく思ひ倦じて、微かに一條宮に出て入るを、落葉宮は、見給ふにつけても、事に觸れて、哀情は盡きぬものにぞありける、男君の使用ひし御調度ども、常に彈き給ひし琵琶、和琴などの緒も、取放ち窶されて、音を立てぬも、いと埋れ痛き業なりや、御前の木立、甚く萌え立ちて、花は時を忘れぬ景

夕霧左大將
訪二一條宮一

色なるを詠めつ、悲しく伺候ふ女房達も、鈍色に窶れつ、寂しく徒然なる晝方、前駆花やかに追ふ音して、この宮の前に停りぬる人あり、女房どもは、
 (女房) あはれ、故殿權大納言の御氣容とこそ、打忘れては思ひつれ、
 とて泣くもあり、こは夕霧左大將の、おはしたるなりけり、左大將は、御消息申し入れ給へり、母御息所などは、例の權大納言の弟、左大辨、宰相などのおはしたると思しつるを、左大將の、いと耻かしげに、清らなる御持成にて、入り給へり、母屋の廂に、御座所裝飾ひて、入れ奉る、この左大將に對し、普通たるやうに、女房ども會釋ひ申さむは、辱き様のし給へれば、母御息所ぞ、御簾を隔て、對面し給へる、左大將は、

(夕) いみじき此度の御不幸を、思ひ歎き候ふ心は、某は、御兄弟の人々にも越えて候へど、他人は限あれば、別に申させ遣る方なくて、御悔みも、尋常の人のやうになり候ひにけり、故君の臨終の間にも、此方の宮につけたる御遺言候ひしかば、實は疎略ならず思ひ参らするにぞ候ふ、誰も長閑め難き無常の世なれば、後れ先つ間の差別なからむ間は、吾身のあらむ限り、深き心の程をも、御覽せられにしがな、とぞ思ひ候ふ、この月は、禁中にも神事などの繁き頃にて、私の志に任せ、出仕を休みて、つく／＼と籠居候はむも、例ならぬことなりければ、忌中とて、立ながら御悔み申さむも、また却て飽かず思ひ候ふべくてぞ、かく日頃は過ぐして、今まで延引申し候ひにける、父大臣などの、心を亂り給ふ様、見聞き候ふに

つけても、親子の道の闇をば、それとしても、かゝる夫婦の御交情の、深く思ひ留め給ひけむ、御心の程を、推量り申さするに、いと盡せず悲しく思ひ奉り候ふ、とて、屢涙押拭ひ、鼻打かみ給ふ、その様、鮮麗に、氣高きものながら、懐かしく、艶めきたり、母御息所も、鼻聲になり給ひて、

(母息) 哀なる事は、その常なき世の習慣にこそはあれ、いみじく悲しとても、また他に類なきことにはある、と、年積りぬる吾々は、強ひて心強く、思ひ覺し候ふを、この二の宮落葉宮の、更に思し入りたる様の、いと忌々しきまで、暫時も立ち後れ給ふまじきやうに見え候へば、凡ていと心憂かりける身の、今まで長命へ候ふて、かく婿むこ、女むすめ、方々につけて、果敢

なき世の末の有様を、見過ぐし候ふべきにやあらむ、と、いと
 静心なくぞ思ひ候ふ、故大納言と、君とは、近親き御交際に
 て、自然聞き及ばせ給ふやうもありけむ、即某は最初つ方
 より、この婚姻を、專引請け申さざりし事を、彼の父君、致
 仕大臣の、御心向けも氣の毒に、山院にも、可しきやうに思
 し許したる御氣色などの候ひしかば、更に自分の心掟の及ば
 ぬなりけり、と、思ひ成し候ふてぞ、終に婿にして見奉りつる
 を、かく夢のやうなる事を見候ふに、思ひ合すれば、自分の
 心の程ぞ、同じくは今少し強く争ひ申してましを、と、思ひ候
 ふに、猶いと後悔しく、それもかく男君の、世を早くし給ふ
 とは思ひ寄り候はざりき、皇女達は、一通ならぬ事ならでは、
 悪しくも善くも、かやうに縁着き給ふことは、え奥ゆかしか

らぬ事なり、と、古めかしき心には、思ひ候ひしを、この二の
 宮は、今は何方にも寄らず、中空に漂蕩ふ如き、憂き御宿因
 なりければ、何かは、かゝる序に、寧火葬の烟にも紛れ給ひ
 なむは、この御身の爲、外聞などは別段に口惜しかるまじけ
 れど、然りととも、さやうに清速かにも、え思ひ沈むまじく、
 悲しく見奉り候ふに、いと嬉しくも、淺からぬ御吊問ひの、度
 度になり候ふめるを、有り難くもと申し候ふも、然らば、彼
 の御遺言願ひ候ふも、御宿契ありけるにこそは、と、嬉しく思
 ひ候ふ、さて權大納言存生中は、二の宮に對して、思ふやう
 にしも見え奉らざりし御心ばえなれど、今は限りとて、この
 二の宮の事をば、此彼に告げ置き給ひける御遺言の、哀なる
 にぞ、憂き中にも、嬉しき瀬は交り候ひける、

とて、いと甚く泣き給ふ氣容なり、左大將も、涙に咽びて、頓にえ猶豫ひ給はず、

(夕) 怪しく、いと此上なく大人げ給へりし權大納言の、かく早世あらむとてや、この二三年以來ぞ、甚く濕りて、物心細げに見え給ひしかば、餘り世間の道理を思ひ知り、物深くなりぬる人の、心澄み過ぎては、かゝる類例、心美しからず、却ては餘り世を遠かりて、人近く花やかなる和氣、薄らぐものなりとぞ、平生に、吾が確乎しからぬ心に、諫め申し、かば、權大納言は、我をば、心淺しとぞ思ひ給へりし、それにつけても、人に勝りて、實に彼の思し歎くらむ、二の宮の御心の中の、申すも畏多けれど、いと御氣の毒にも候ふかな、など、懐しく、詳細に申し給ひて、稍間經てぞ、歸り出て給ふ、

今年ばかり
は○古今集
に深草の野
邊の櫻し心
あらば今年
ばかりは墨
染にさげと
あり
逢ひ見むこ
と○細流抄
に春毎に花

彼の柏木權大納言は、この夕霧、左大將よりは、五六年程の、兄なりしがど、尙いと若やかに、艶めき、愛垂れてぞものし給ひし、左大將は、いと健剛に、重々しく、男々しき氣容して、顔ばかりぞ、いと若く清らなること、人に勝れ給へる、一條、宮の、若き女房達は、物悲しさも、少し紛れて、左大將の御後姿を見出し奉る、御前近き櫻の、いと面白きを見給ひて、左大將、心の中に、今年ばかりはと打覺ゆるも、これは忌々しき筋なりければ、更に、

(夕) 逢ひ見むことは、
と口吟びて、

(夕歌) 時しあれば、變らぬ色に、匂ひけり、片枝枯れにし、宿の櫻も、

の盛りはあ
りなめと逢
ひ見むこと
は命なりけ
りとあり
時しあれば
云々○片枝
枯れたる櫻
も春になれ
ば咲き匂ふ
ものぞとて
落葉宮の夫
君を失ひて
も我にと少
しく懸想を
含めていへ
り
この春は云
々○此春は
涙にのみ暮
れて花をば
知らずとて
芽に目をか
けたり

○柏木

と、故意と詠み懸くるとはなく、誦じ成して、立ち給ふに、母
御息所は、いと疾く、
(息歌) この春は、柳のめにぞ、玉は貫く、咲き散る花の、ゆ
くへ知らねど、
と申し給ふ、この御息所は、いと深き由緒ある種姓にはあらね
ど、當世めかしく、才あり、と言はれ給ひし更衣なりけり、左
大將は、心に、實に昔才ありし程著く、見善き程の用意なりけ
り、と、見給ふ、かくて夕霧、左大將は、一條宮より、やがて致仕、
大臣の邸に参り給へれば、子息の君達、數多出て迎へて、此方
に入らせ給へとあれば、大臣の出居の方に入り給へり、大臣は、
愁歎き居給ひしが、猶豫ひて、對面し給へり、舊り難く清けな
る大臣の御容貌、この頃の愁傷に、甚く瘦せ衰へて、御鬢など

出居○常の
殿なり
夕霧左大將
更訪致仕
大臣

○柏木

も、取り修ひ給はねば、茂りて、親の喪よりも、勝りて窶れ給へ
り、左大臣は、見奉り給ふより、はやいと忍び難ければ、餘り
に收まらず亂れ落つる涙こそ、不都合けれ、と思へば、強ひて
ぞ持て隠し給ふ、大臣も、左大將は、我が愛子權大納言とは、取
別きて御交情善くものし給ひしを、と、見給ふに、涙唯降りに降
り落ちて、え止め給はず、盡せぬ御事どもを申し交し給ふ、さ
て左大將は、一條宮に詣でたりつる有様など、申し給へば、大
臣は、落涙いとしく、春雨かと思ゆるまで、軒の霰に異なら
ず、袖を濡らし添へ給ふ、左大將は、一條御息所の、疊紙に、彼
の柳のめにぞとありつる歌を、書き給へるを出して、見せ奉り
給へば、大臣は目も見えずやあらむ、と、涙を押絞りつ、見給ふ、
打潜みつ、見給ふ御様、例は心強く、鮮明に誇りかなる御氣色

の、今日は泣き貌に、名残なくなりて、人様悪し、然るは、この御歌、特別なることもなかるめれど、この玉は貫くとある節の、實にと思さるゝに、心亂れて、久しくえ猶豫ひ給はず、泣き給ふ、

(致) 君の御母君、葵上大臣の妹の、死去れ給へりし秋ぞ、世に悲しきことの極には覺え候ひしを、女は制限ありて、外にも出でねば、見る人少く、右あることも、左かることも、凡て顯露ならねば、悲哀も世に隠るへてぞありける、彼の權大納言は、確乎しからねど、朝廷においても捨て給はず、漸々人と成りければ、執柄の子息とて、官位につけて、その執奏を相頼む人々、自然次々に多くなりなどして、此度の不幸に驚き口惜がるも、類に觸れてあるべし、我がかく深く思ふは、權

空を仰ぎて
○咲花抄に
大空は戀し
き人のかた
みかは物思
ふことにな
がめらるら
むとあり
木の下の云
々○父が涙
にぬれて逆
に子の喪服
を着たりと
て霞の衣に
墨の衣をか
けたり

大納言の、大方の世の勢望も、官位などを思はず、唯彼が異なる事なかりし、平穩なる有様ばかりこそ、今は堪へ難く戀ひしかりけれ、この戀ひしさは、何ばかりの事にてかは、思ひ醒すべからむ、
と、空を仰ぎて詠め給ふ、夕暮の雲の景色、鈍色に霞みて、花の散りたる梢どもをも、今日ぞ左大將の入來によりて、大臣は始めて目留め給ふ、かの御息所の御疊紙の末に、大臣、
(致歌) 木の下の、雫に濡れて、さかさまに、かすみの衣、きたる春かな、
と書き給へるに、左大將また、その末に、
(夕歌) なき人も、思はざりけむ、打捨て、夕のかすみ、君きたれとは、

と書き給ふ、權大納言の弟、左大辨

(辨歌) 恨めしや、かすみの衣、誰きよと、春よりさきに、花
の散りけむ、

御法事など、尋常ならず、嚴重めしくぞありける、

夕霧、左大將の北方、雲井、雁、君をば、それとして、左大將は、
權大納言の爲に、心特別に誦經なども、哀に深き心はえを加へ

給ふ、彼の一條、宮にも、左大將は、常に弔問ひ申し給ふ、四月
ばかりの空は、何處となく心地快げに、一色なる新緑の、四方

の梢も面白く見え渡るを、物思ふ一條の宿は、萬の事につけて、
靜に心細く暮らし兼ね給ふに、夕霧、左大將の、例の渡り給へる、

庭も漸々青み出る若草見え渡り、此處彼處の砂子、薄き物の蔭
の方に、蓬も所得貌なり、故大納言の、前裁に心入れて、作る

なき人も云々○父君の喪服を着たりとは權大納言も思ひ懸けざりけむとなり恨めしや○兄君の早世を悼みたるなり
夕霧左大將重訪一條宮

一叢薄○古今集に君がうゑし一むら薄蟲の音の茂き野邊ともなりにけるかなとあり

ひ給ひしも、今は心に任せて茂り合ひ、一叢薄も、頼もしげに
廣ごりて、虫の音添はむ秋、思ひ遣らるゝより、いと物哀に、露
けくて、分け入り給ふ、伊豫簾懸け渡して、鈍色の几帳の、衣
更したる、透き影涼しげに見えて、容貌善き女童の、濃細に鈍
ばめる干衫の端、頭つきなど、微見えたり、美しけれど、鈍色
なれば、淺ましくて、猶目驚かるゝ色なりかし、左大將は、今
日は簀子に居給へば、褥差出てたり、いと輕らかなる御座所な
りとして、左大將は、例の母御息所を、驚かし申せど、御息所は、
この頃少し所勞しとして、物に倚り臥し給へり、かくてとかく申
し紛らはす間、左大將は、御前の女房達ども、思ふことなげな
る氣色を見給ふも、いと物哀なり、柏木と楓との、他の木立よ
り勝りて、若やかなる色して、枝差交したるを見給ひて、

ことならば
云々○權大
納言の遺言
もありつれ
ば許しあり
しこと、思
して落葉宮
を同じくは
此庭の柏木
楓の枝交せ
る如くに我
へと馴らし給
へとなりこ
とは如くの
意

柏木に云々
○此宿は寡

夕 かななる契にかあらむ、連理の様に、末合へる頼もしさ
よ、

など言ひて、忍びやかに、落葉宮宮女二の御方に差寄りて、

夕歌 ことならば、ならしの枝に、ならさなむ、葉守の神の、
ゆるしありきと、御簾の外の、隔ある程こそ、恨めしけれ、

とて、長押に倚り居給へり、柔び姿も、またいと甚く裊和ぎけ
るをよ、と、女房ども、此彼膝衝きじろふ、御息所は、この御應

接申す少將、君といふ女房して、

息歌 柏木に、葉守の神は、まさずとも、人ならずべき、宿
の梢か、突然なる、君の御言の葉にぞ、浅く思ひ成り候ひ
ぬる、

と申さすれば、左大將は、實にと思すに、少し含笑み給ひぬ、か

居にて葉守
の神はまさ
ずとも許し
はあるまじ
きとなり後
撰集にとし
子我宿をい
つならして
か檜の葉の
ならしがほ
には折にお
こする返し
枇杷左大臣
柏木に葉守
の神のまし
けるを知ら
でぞ折りし
たいりなさ
るなとあり

くて御息所、少し膝行り出て給ふ氣容すれば、左大將は、やを
ら居直り給ひぬ、御息所は、

息 憂き世の中を、思ひ沈む、月日の積る差別にやあらむ、亂
り心地も、怪しく耄々しくて、過ぐし候ふを、かく度々重ね
させ給ふ御訪問の、いと辱きに、思ひ起し候ふてぞ、起き
出で候ふ、

とて、實に惱ましげなる御氣容なり、左大將は、

夕 思し歎くは、世の道理なれど、さりとてもまた、いと然や
うにばかりは、いかゞ歎き給ふ、萬の事、皆然るべき前世の、
宿因にこそは候ふめれ、さはいへ、如何なる愁歎も、さすが
に際限ある世にぞ候ふ、

と、慰め申し給ふ、さて心の中に、この落葉宮こそ、聞きしよ

りは、心の奥見えたれ、あはれ實に今は、中空におはして、いかに人笑なることを、取添へて思すらむ、と、思ふも尋常ならねば、甚く心留めて、宮の御有様も、問ひ申し給ひけり、容貌ぞ、女三宮よりは、少し劣り給ふやうなれど、いと見苦しく、傍痛き程にさへなくば、多少見る目に、不足なりとて、何とてさやうに思ひ飽き、また然あるまじき女に、心をも惑はすべきぞ、様悪しや、凡て女は言ひもて行かむに、唯心ばせばかりこそ、大切かるべけれ、とて、權大納言の、女二宮に思ひ飽きて、女三宮に思ひ惑ひけることの、不都合かりけることを、思ひ續け給へり、
 (夕) 今は、吾をば昔の權大納言に思し擬へて、疎からず待遇させ給へ、
 など、故意と懸想びてはあらねど、懇切に氣色ばみて申し給ふ、

左大將の直衣姿、いと鮮明にて、丈立物々しく、背高にぞ見え給ひける、女房達は、

(女房) 彼の御父君、六條院は、萬の事、懐かしく艶めき、貴に愛敬づき給へることの、世に雙びなきなり、この左大將は、男々しく、花やかに、あな清らよと、ふと見え給ふ匂ひぞ、人に似ぬよ、

と、打私語きあひて、

(又) 同じくは、かやうにても、宮宮落葉の方へ、出で入り通ひ給はましかば、嬉しからまし、

など言ふめり、左大將は、

(夕) 右將軍が墓に、草初めて青し、
 と、打口吟みて、右大將保忠卿の卒去も、いと近き世のことな

右將軍の墓
 ○紀在昌の
 詩に天與三善

人吾不信
右將軍墓草
初秋とあり
右將軍は右
大將藤原保
忠にて左大
臣時平の子
承平六年卒
去す

○ 柏木

れど、柏木右衛門督權大納言の事に併せて、左大將は、様々近くも遠くも心亂るゝやうなりし、さて權大納言は、有識などの宜々しき方をば、それとして、怪しく情を立てたる人にぞものし給ひければ、さやうにも親しからぬ官人、官女などの、年古めきたるものどもまで、戀ひ悲しび申し、況して主上には、權大納言は、御琴の師におはしたれば、御樂遊などの折毎には、まづ思し出で、ぞ、慕はせ給ひける、あはれ柏木右衛門督といふ言種、何事につけても、言はぬ人なし、六條院には、況して哀と思し出ること、月日に添へて多かり、この若君を、御心一つに、形見と見成し給へど、世人の思ひ寄らぬことなれば、いとかひなし、秋の方になれば、この若君は、這ひるざりなどし給ふ、薰君といへるは、やがてこの人にこそ、

第三十六帖 横 笛

此帖は源氏
四十九歳の
春より秋に
至る
六條院追
悼柏木權大
納言

故權大納言の、はかなく逝去給ひにし悲しさを、飽かず口惜しきものに、戀ひ慕ひ給ふ人多かり、六條院にも、大方につけてさへ、世に見善き人物の、亡くなるをば、惜み給ふ御心に、況して權大納言は、朝夕に親しく参り馴れつゝ、他人よりも御心留め思したりしかば、女三宮の事につけて、如何にぞや思し出ることにはありながら、哀は多く、折々につけて、慕ひ給ふ、御一週忌にも、誦經など取別き爲させ給ふ、若君の何事も知らず貌に、幼稚き御有様を見給ふにも、さすがにいみじく哀なれば、御心の中に、若君の爲、また別に志し給ひて、權大納言の追善に、黄金百兩をぞ施入せさせ給ひける、致仕大臣は、事情も知らでぞ、

○ 横 笛

畏まり悦び申させ給ふ、夕霧、左大將も追善ども多く爲給ひ、特別に取持ちて、懇切に營み給ふ、また彼の一條宮なる、落葉宮をも、此間の御志、深く訪問ひ申し給ふ、兄弟の君達よりも勝りたる、左大將の御心の程を、父大臣、母北方も、いとかくは思ひ申さざりき、とて、喜び申し給ふ、權大納言は、亡き後にも、世の勢望重くし給ひける程度見ゆるに、父母の君いみじく可怖しくばかり、思し焦がる、こと盡せず、山院朱雀院法皇は、女二宮宮落葉も、かく人笑なるやうにて詠め給ふなり、女三宮宮入道も、出家して、此世の人めかしき方は、懸け離れ給ひぬれば、様々に飽かず口惜しく思さるれど、法皇は唯後世の事を勤め給ひて、凡て現世の事を思し惱まじ、と、堪忍び給ふ、御行法の間にも、尼宮宮女三も同じ道をこそは勤め給ふらめ、など思し遣りて、姫

朱雀院贈
土産於女三
宮

世を別れ云々
○父子の間を別れて佛の道に入る君は後れても終に同じ極樂を尋ね來よとて所に野老なかけたり
疊子○高坏の姿にて桶の蓋を仰様

宮の、かゝる出家の様になり給ひて後は、はかなき事につけても、絶えず申し訪らひ給ふ、御寺の傍近き林に、拙き出でたる筍、その邊の山に掘れる野老などの、山里につけては、愛憐なれば、尼宮の方に奉り給ふとて、御文詳細なる端に、

(朱文) 春の野山、霞も不案内しけれど、志深く掘り出ださせ候ふ筍、野老、しるしばかりにぞ奉り候ふ、世を別れ、入りなむ道は、後るとも、同じところを、君も尋ねよ、いと難き業にぞある、

と申し給へるを、尼宮は、涙催みて見給ふ間に、六條院渡り給へり、例ならず御前近き疊子どもを、院は、何ぞ、怪しと、御覽ずるに、朱雀院の御文なり、見給へば、いと哀なり、御命の程も、今日か明日かの心地するを、對面の心に叶はぬことなど、

にしたるやうのものにて置椽を高くしたるもの内は朱漆に外は黒漆にて菓子など入るゝ器なれどこゝは箭野老を盛りたるなり

うき世には云々○憂き世に倦きたれば父院のまします浮世の外山路に尋れ入らましとな

委細に書かせ給へり、院は御心に、この同じところの御同伴を、別段に面白き節もなき僧詞なれど、實にさやうにぞ思すらむかし、我さへ尼宮に疎略なる様に見られ奉りては、いと、同宮を不便に思召す、うしろめたき御思の添ふへかるめるを、いと御氣の毒と思す、さて尼宮は、御返歌慎ましげに書き給ひて、御使には、青鈍の綾一重を賜ふ、宮の御返歌、書き替へ給へりける紙の、御几帳の傍より、微見ゆるを、院は取りて見給へば、御手跡はいとはかなげにて、

(三歌) うき世には、あらぬところの、ゆかしくて、背く山路に、思ひこそ入れ、とあり、この若く美しき様にて、山路に入り給ふべきこと、後めたげなる御氣色なるに、院は、

(源) この浮世に、あらぬところ、求め給へる、いとうたて心憂し、

と申し給ふ、宮は今、院をば正面にも見奉り給はず、いと美しく可愛げたる御額髪、面つきの美しさ、唯乳兒のやうに見え給ひて、いみじく可愛きを、院は見奉り給ふにつけては、何とてかく尼姿にはなりにしことぞ、と、罪得ぬべく思さるれば、御几帳ばかり隔て、また此上なく氣遠く、疎々しくはあらぬ程に、待遇し申してぞおはしける、若君は、乳母の許に寝給へりける、起きて這ひ出で給ひて、院の御袖を引き纏はれ奉り給ふ様、いと美し、若君は白き羅に、唐の小紋の、紅梅色の御衣の裾、いと長くしどけなげに引き遣られて、御身は、いと顯露にて、後の限に着成し給へる様は、乳兒姿、例の事なれど、いと可愛げに

若君嬉戯

白く、丈聳やかに、柳を削りて作りたらむやうなり、頭髮は露草して、故意に彩色たらむ心地して、口つき美しく匂ひ、目つき延らかに耻しく薫りたるなどは、尙いと能く權大納言に似たりと思ひ出らるれど、彼の權大納言は、いとかやうに際離れたる清らはなかりしものを、この若君は、何とてかやうにあるぞ、母宮にも似奉らず、今より氣高く物々しく、様特別に見え給へる氣色などは、我が御鏡に映る影にも、似げなからず見成され給ふ、さて若宮は、僅に歩みなどし給ふ程なり、この筍盛りたる疊子に、何とも知らず立寄りて、小き手して、いと惚忙しく取り散らして、食ひ搔投りなどし給へば、院は、

(源) あな亂がはしや、いと不都合し、彼の筍取り隠せ、食物に目留め給ふと、物言ひ口悪き女房もこそ言ひ成せ、

花の盛は○
春毎に花の
盛はありな
めど逢ひ見
むことは命
なりけり柏
木帖に擧げ
たり

とて笑ひ給ふ、かくて院は、若君を搔き抱き給ひて、

(源) この若君の目つきの、いと氣色あるかな、小き程の乳兒を、數多見ねばにやあらむ、乳兒の、これほとの間は、唯幼稚きものとはかり見しを、此兒の、今よりいと氣容特別に、艶めきたるこそ、面倒しけれ、明石、中宮の御腹の皇女達ものし給ふ邊に、かゝる美男生ひ出で、權大納言にも似たらむには、また心苦しきこと、誰が爲にもありなむかし、あはれ彼の皇女達、この若君の、各自の生ひ行く末までは、吾も長命へて見果まじきを、花の盛はありなめと、

と打諦視り申し給ふ、伺候ふ女房どもは、

(女房) うたて、忌々しき御事言ふよ、

と申す、若君は、御齒の生ひ出るに、食ひ當てむとて、筍をつ

と握り持ちて、涎の雫も、よゝと食ひ濡らし給へば、院は、

(源) いと曲けたる好色かな、

と戯れ言ひて、

(源歌) うき節も、忘れずながら、吳竹の、こは捨て難き、も

のにぞありける、

と、笛を引き放ちて、言ひ懸れど、若君は、打笑ひて、何とも

思ひたらず、いとそゝかしく、院の御膝を這ひ下り騒ぎ給ふ、月

日に添へて、この若君の、美しく、忌々しきまで生ひ勝り給ふ

に、院は、誠に彼の權大納言との關係の、憂き節も、思し忘れ

ぬべし、この若君の生れ立てものし給ふべき宿縁にて、然る女

三ノ宮と、權大納言との、思の外なる事もあるにこそありけめ、さ

れば遁れ難かるなる因果そかし、と、少しは思し直さる、自分の

うき節も云々
○柏木右衛門督の事は心憂く思へど子の若君は愛らしとて笛に子をかけたり

夕霧左大將復訪一條宮

御宿世も、能く考ふれば、尙飽かぬこと多かり、御妃妾の方々、

數多集ひ給へる中にも、この女三ノ宮こそは、片帆なる思交らず、

人の御有様も、思ふに飽かぬ所なくともものし給ふべきを、かく

出家して、思はざりし様にて見奉ることよ、と、思すにつけてぞ、

過ぎにし二人女三ノ宮、權大納言の罪、許し難く、猶口惜しかりける、

夕霧左大將は、彼の權大納言の、臨終の結局に、一言留め給ひ

し遺言を、心一つに思ひ出でつ、如何なりしことぞ、とは、い

と申し聞かまほしく、且は、父院の、御氣色もゆかしきを、女

三ノ宮との關係ひならめとは、微心得て、思ひ寄らる、こともあ

れば、却て打出て申さむも、傍痛くて、如何ならむ序に、この

事の委細しき有様も辨明め、また彼の權大納言の、思ひ入りた

りし様をも、院に聞召させむ、と、思ひ渡り給ふ、秋の夕の、物

虫の音繁き
○君がうゑ
し一むら薄
蟲の音の繁
き野邊とも
なりにける

哀なるに、一條宮を思ひ遣り申し給ひて、渡り給へり、落葉宮
は、打解け蕭條に、御琴どもなど弾き給ふ間なるべし、樂器な
ど深くも取り遣らで、やがて左大將をば、南の廂に入れ奉り給
へり、端つ方なりつる人の、奥の方へ膝行り入りつる氣容ども
著く、衣の音なひも、大方の匂、香ばしく奥ゆかしき程なり、か
くて例の母御息所、對面し給ひて、昔の物語ども申し交し給ふ、
左大將は、吾殿、二條宮の、朝夕人繁く、物騒がしく、幼き君
達など集き騒ぎ給ふに比へ給ひて、この一條宮の、いと靜に、物
哀なり、打荒れたる心地すれど、貴に氣高く住み成し給ひて、前
栽の花ども、虫の音繁き野邊と、亂れたる夕榮を見渡し給ふ、か
くて左大將は、和琴を引き寄せ給へれば、律に調べられて、い
と能く弾き馴らしたる人香に染みて、懐かしく覺ゆ、左大將は、

かな柏木帖
に擧げたり

御心に、かやうなる邊に、思の儘なる好色心ある人は、鎮むる
ことなくて、様悪しき氣容をも顯はし、然るまじき浮名をも立
つるぞかし、など、思ひ續けつゝ、搔き鳴らし給ふ、故權大納言
の平生に弾き給ひし和琴なりけり、左大將は、面白き手一曲、少
し弾き給ひて、

(夕) あはれ、いと珍らかなる音に、故殿の搔き鳴らし給ひし
はよ、この宮の御琴にも、故殿の名殘籠りて候はむかし、一
曲承はりて、その餘響を顯はしてしがな、
と言へば、御息所は、

(息) 琴の緒絶えにし後より、宮は昔の御童樂遊の名殘をさへ、
思ひ出で給はずぞ、なりにて候ふめる、御父朱雀院の御前に
て、皇女達の、各自の御琴ども試み申させ給ひしにも、かやう

世の憂き端
○細流抄に
淺茅生の小
篠が原に置
く露ぞ世の
憂きつまと
思ひ乱るゝ
とあり
限りだに○
細流抄に戀
しさの限り
だにある世
なりせばつ
らきを強ひ
て歎かざら
ましとあり

の彈物の方は、此宮は覺束なからずものし給ふとぞ、評定め
申し給ふめりしを、今は御琴さへ、手に觸れ給はで、我身に
もあらぬ様に、茫然しくなりて、詠め過ぐし給ふめれば、世
の憂き端に、といふやうにぞ見給ふる、
など、申し給へば、左大將は、

(夕) いと道理の御思なりや、限りだにあり、

と打詠めて、和琴をば押遣り給へれば、御息所、

(息) 君は、此上なき故殿の知音にましますば、聲に傳はるこ
ともやあらむと、聞き別くばかり、鳴らさせ給へ、此頃の物む
づかしく沈み候ふ耳をなりとも、明らめて承はり候はむ、
と申し給ふを、左大將は、

(夕) さやうに傳はる、夫婦の中の緒は、格別に候へば、宮の

羽打交す○
古今集に白
雲に羽打交
し飛ぶ雁の
數さへ見ゆ
る秋の夜の
月とあり

御琴にこそ、却て故殿の餘韵は傳はり給はめ、それをこそ承は
らむと申しつれ、

とて、落葉宮のまします、御簾の下に、近く和琴押寄せ給へど、
宮は、頓にしも承け引き給ふまじきことなれば、強ひても申し
給はず、月差出で、曇りなき空に、羽打交す雁が音も、列を
離れぬをば、宮は羨ましく聞き給ふらむかし、風の肌寒く、物
哀なるに誘はれて、落葉宮は、やがて箏の琴を、いと微かに搔
き鳴らし給へるも、奥深き聲なるに、左大將は、いと心留ま
り果て、却て懐かしく覺ゆれば、自分は、琵琶を取寄せて、い
と懐かしき音に、想夫戀を弾き給ふ、
(夕) 此方より、御心情を推量り貌なるは、傍痛けれど、この
曲につけては、言問はせ給ふべくや候はむ、

夕霧大將訪
一條宮圖

御息所

露しげき

むぐら

のやどに

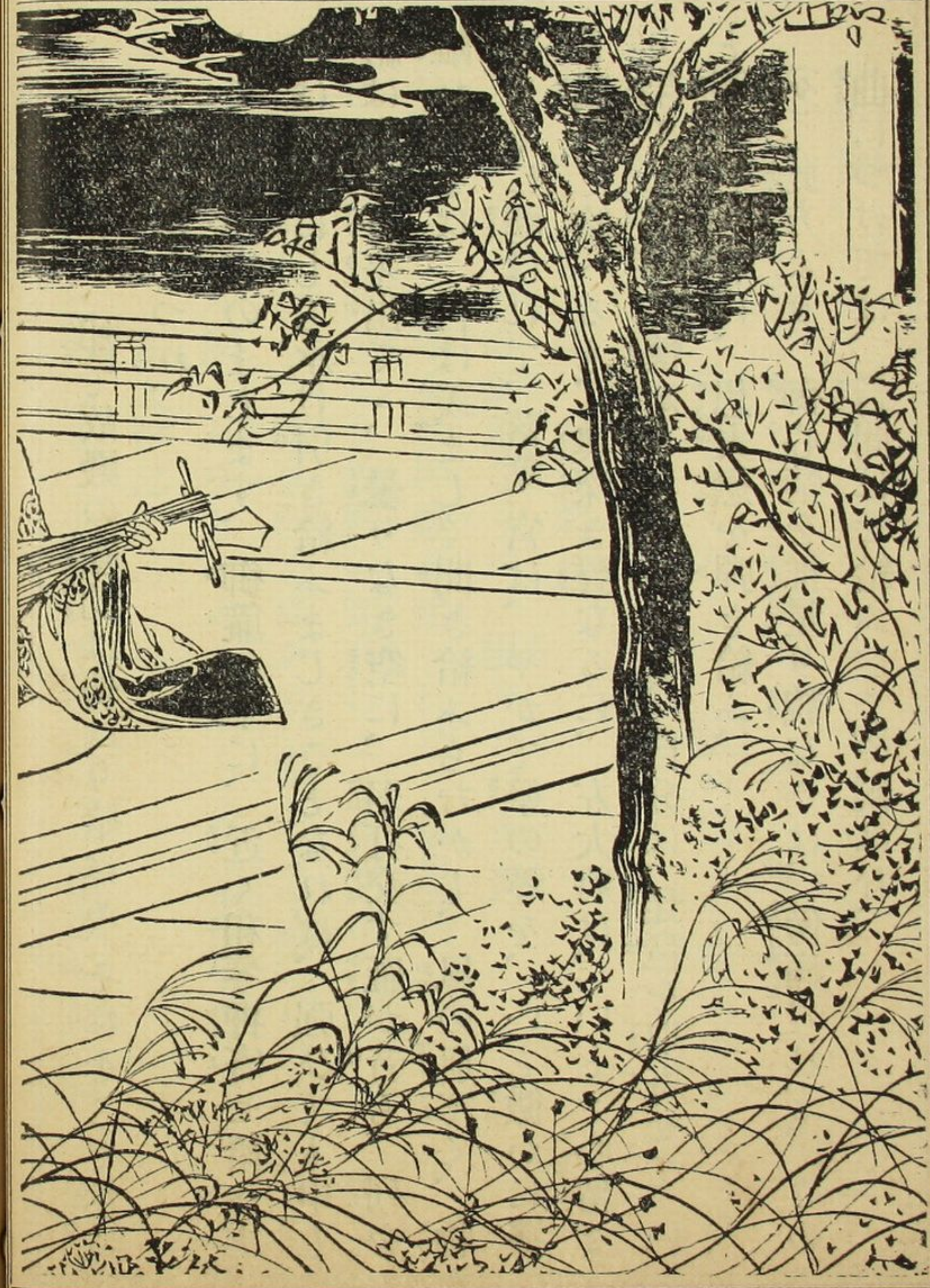
いにし

への秋に

かはら

ぬむしの

聲かな



○横笛

左大將

横笛の

まらべは

ことに

かはらぬ

を空し

くなりし

音こそ

つきせれ



○横笛

とて、切に御簾の内を、勧誘し申し給へど、宮は、琴を弾くさへ尙耻かしきに、況して想夫戀は、慎ましき差返答なれば、唯物のみ哀と思し續けたるに、左大將、

(夕歌) ことに出で、言はぬを言ふに、勝るとは、人にはちたる、氣色をぞ見る、

と申し給ふに、落葉、宮は和琴取り給ひて、唯曲の末つ方を、少許弾き給ふ、さて、

(落歌) 深き夜の、哀ばかりは、聞き別けど、ことより外に、えやはいひける、

と言ふ、想夫戀は、さやうに大様なる和琴の音がらに、古人の、心染めて弾き傳へたる、同じ調のものといへども、折から哀に、心凄き樂曲の一端を、宮は、搔き鳴らして止み給ひぬれば、左

ことに出で云々○人に耻ぢ給ふ氣色を見ればいはぬはいふに勝る御心深きのいよ／＼知らるゝとて言に琴をかけたり
深き夜の云々○今夜君の想夫戀を弾き給ふ哀だけは聞き別けて哀と

大將は、心に恨めしきまで覺ゆれど、

(夕) 物好々々しさを、様々に弾き出で、も、御覽ぜられぬるかな、秋の夜更し候はむも、故殿の咎やあらむと、遠慮りて、

ぞ、退出で候ひぬべかるめる、また重ねて、事更に心して伺候ふべきを、この御琴どもの、調へ更へず待たせ給はむや、御

心も、御琴も、引き違ふことも候ひぬべき世なれば、不安心くこそ候へ、

など、正面にはあらねど、懸想打匂はし置きて、出で給ふ、御息所は、

(息) 今宵の御物好には、人許し申すべくぞありける、そこはかとなき古語りにばかり、紛らせ給ひて、命を延ぶる程も弾き給はぬ、残り多くぞ候ふ、

言はまほしけれども琴を弾くより外に言葉にはいひ難しとなり

母御息所贈
權大納言遺
愛笛於左大
將

とて、御贈物に、笛添へて奉り給ひて、

(又) この笛にぞ、誠に古き言ども傳はるべく、聞き置き候ひしを、かゝる蓬生に埋没るゝも、可憐に見候へば、君に奉るにこそ候へ、御前駈の聲に競はむ音ぞ、餘所ながらも承はらほしく候ふ、

と申し給へば、左大將、

(夕) 我身に取りては、いと辱く、似合しからぬ隨身にこそ候ふべけれ、

とて見給ふに、これも實に、彼の權大納言が、世と共に身に添へて、翫弄びつゝ、大納言自身も、更にこれが音の限りは、え吹き徹さず、我が思はむ人に、いかで傳へてしかなと、折々申し言ち給ひしを、左大將は思ひ出で給ふに、今少し哀多く添ひて、試

みに吹き鳴らし給ふ盤渉調の、半分吹き中止て、

(夕) 昔を忍ぶ獨言(琴)は、さても罪許され候ひけり、この笛は目眩くぞ候ふ、

とて、出で給ふに、御息所、

(息歌) 露繁き、葎の宿に、いにしへの、秋に變らぬ、虫の聲かな、

と申し出し給へり、左大將は、

(夕歌) 横笛の、しらべはことに、變はらぬを、空しくなりし、音こそ盡きせね、

とて、出難に休息ひ給ふに、夜も甚く更にけり、かくて三條殿に歸り給へれば、人々格子など下させて、皆寢給ひにけり、大將殿は、彼の落葉宮に心懸け給ひて、かく懇切がり申し給ふぞ、

露繁き云々
○大將の笛の音に右衛門督の昔を思ひ出づとて笛を虫にとりなせり
横笛の云々
○笛の調は別に變られど右衛門督のおはせれば泣く音は盡きぬとな

夕霧左大將
歸三條邸

など人の申し知らせければ、北方雲井雁には、かやうに夜更かし給ふも、生憎くて、左大將の入り給ふも聞きながら、寝たるやうにてもものし給ふなるべし、左大將は、

(夕) 妹と我と、いるさの山の、

と、聲はいと面白くて、獨言ち謠ひて、

(又) こは、何ぞかく格子鎖し固めたる、あな埋れくさや、今夜の月を見ぬ里もありけり、

と呻吟き給ふ、かくて格子上げさせ給ひて、御簾巻き揚げなど

し給ふて、端近く臥し給へり、さて北方に、

(又) かゝる夜の月に、心安く夢見る人はあるものか、少し出

て給へ、あな心憂

など申し給へど、雲井雁は、心疾ましく打思ひて、聞き忍び給

妹と我と云々○催馬樂に妹と我といるさの山の山關手な取り觸れそやかほまさるかにやとくまさるか

かゝる夜の月○古今集にかくばかり惜しと思ふ夜を徒に寝てあかす

らん人さへぞうきとあり

ふ、御子の君達の、幼稚く寝をびれたる氣容など、此處彼處にして、女房も、差籠りて臥したる人氣も、賑はしきに、彼の一條、宮の、寂しき有様、思ひ合するに、多く變りたり、彼の贈られたる笛を、打吹き給ひつゝ、落葉宮の、いかに名残も詠め給ふらむ、御琴どもは調へ變らず弾き遊び給ふらむかし、御息所も、和琴の上手ぞかし、など思ひ遣りて、臥し給へり、さて心の中に權大納言は、落葉宮に對して、唯大方の心ばえは、大切に待遇し申しながら、内實はいと深き氣色なかりけむと、それにつけても、宮の容貌の、いと不審しく覺ゆ、さて近くて見奉らば、見劣せむこそ、いと口惜しかるべけれ、大方の世につけても、限りなく美しなど聞くことは、必さやうに見劣することあるぞかし、など思ふに、我が雲井雁との御交情、打仇めき、疑はしき

左大将夢亡友權大納言

笛竹に云々
○この調べの風の如く傳はるものならば吾が思ふ薫君の方へ傳へてよとなり
嘔吐○嘔は小兒嘔乳又不顧而

思遣りもなく、睦び始めたる年月の間を數ふるに、愛憐に雲井、雁の、いとかく押立ちて、驕り怨じ馴れ給へるは、道理に覺え給ひけり、左大将は、少し寢入り給へる夢に、彼の柏木右衛門督、唯昔の有りし様の桂姿にて、傍に居て、この笛をば手に執りて見る、左大将は、夢の中にも、亡き人の煩はしく、この笛の音を尋ねて來ると思ふに、右衛門督は、

(柏歌) 笛竹に、吹き寄る風の、ことならば、末のよ長き、ねに傳へなむ、思ふ方、別に候ひき、

といふを、左大将は、問ひ返さむと思ふ間に、幼君の、寢をびれて啼き給ふ御聲に、夢覺め給ひぬ、この幼君、甚く啼き給ひて、嘔吐などし給へば、乳母も起き騒ぎ、雲井、雁も、御燈臺近く取寄せさせ給ひて、御髪も耳挿して、幼君をそくり修治ひ

吐と字典に見えたり

て、吾が懷に抱きて居給へり、いと能く肥えて、つぶくと美しげなる胸を開けて、乳など口含め給ふ、乳兒もいと美しくおはする君なれば、白く美しげなるに、御乳は更に出でず、いとかはらかなるを、女君は心を遣りて慰め給ふ、左大将も寄りおはして、

(夕) 如何なるぞ、

など言ふ、厭法に、散米打蒔き散らしなどして、亂りがはしきに、大将は、夢の哀も紛れぬべし、北方は、

(雲) この兒、いと悩ましげにこそ見ゆれ、こは君の當世めかしき御有様の程に、あくがれ給ひて、夜深き御月愛に、格子も上げられたれば、例の物怪の入りたるなるめり、など、いと若く美しき顔して、託怨ち給へば、夫君打笑ひて、

(夕) 奇怪の物怪の案内よ、我格子上げずば、道なくて、實に物怪はえ入り來ざらまし、其方は、數多の子供の親になり給ふまゝに、思慮深く、物をこそ言ひなりにたれ、とて、打見遣り給へる目つき、いと耻しげなれば、北方も、さはいへ、さすがに物も言はで、

(雲) 出て給ひね、この姿見苦し、とて、我が體の、明かなる火影に映れるを、さすがに羞ぢ給へる様も、憎からず、誠にこの幼君、煩みて啼きむつかり明し給ひつ、左大將も、夢をば思し出るに、この笛の面倒しくもあるかな、右衛門督の、熱心留めて思へりし樂器の、傳へ行くべき方にもあらざる我へ、落葉宮の、相傳へたるは、かひなきをよ、右衛門督の、いかゞ思ひつらむ、現世にて、物の數にも入れぬ

左大將追
善權大納言

左大將參
六條院

樂器も、彼の臨終の閉眼に、一念の恨めしきにも、もしくは哀と思ふ熱心に纏綿れてこそは、浮ばれずして、長き世の闇にも迷ふ業なるなれ、かゝればこそは、何事にも、執は留めじと思ふ世なれ、など、思し續けて、彼の權大納言柏木右衛門督を葬りつる、愛宕に誦經せさせ給ふ、また彼の君の歸依の寺にも、誦經せさせ給ひて、この笛をば、故意と、落葉宮の由緒深き樂器として、引出物に賜へりしを、忽に寺僧に施入して、佛の道に、面向けむも尊きことゝはいひながら、かくては餘りに張合なかるべし、と思ひて、その儘左大將は、六條院に參り給ひぬ、院は明石女御の御方におはします間なりけり、女御の御腹皇子の三の宮宮三歳ばかりにて、御子達の中にも、美しくおはするを、紫上の御方にぞ、また取別きて、猶子として、おはしまさせ給ひけるが、

その三の宮、走り出て給ひて、左大將に、

(三) 大將こそ、我を抱き奉りて、院のおはする、彼の方へ、連れて往ておはせ、

と、自分畏りて、いとあどけなげに言へば、左大將打笑ひて、

(夕) いざ此方へおはしませ、いかで、この紫上の御簾の前をば渡り候はむ、いと軽々ならむ、

とて、抱き奉りて、居給へれば、三の宮は、

(三) 人も見ざるやう、我が大將の顔は隠さむ、尙彼方へ、く、とて、御袖して、左大將の御顔隠し給へば、左大將は、心に

と愛しく思ひて、明石女御の御方へ、將て奉り給ふ、此方にも、御兄君の二の宮の、彼の尼宮の若君と、一所に交りて遊び給

ふを、院は、愛しく見ておはしますなりけり、左大將は、三の

宮をば、角の間の程に下し奉り給ふを、二の宮見付け給ひて、

(三) 我も大將に抱かれむ、

と言ふを、三の宮、

(三) いな我が大將をよ、

とて、控へ給へり、院も御覽じて、

(源) いと亂りがはしき御有様どもかな、朝廷の、御近き衛り

の大將を、私の隨身に領せむと、争ひ給ふよ、三の宮こそ、い

と悪くおはすれ、常に兄に競ひ申し給ふことよ、

と教訓め申し扱ひ給ふ、左大將も笑ひて、

(夕) 二の宮は、此上なく兄心に、所譲り申し給ふ御心、深く

ぞおはしますめる、御年齢の程よりは、恐しきまで大人しく

見えさせ給ふ、

など申し給ふ、院は打笑みて、兄弟何れをも、いと愛しと思ひ申させ給へり、さて左大將に、

(源) 見苦しく、軽々しき公卿の御座なり、彼方にこそ入らせ給へ、

とて、紫上の方に渡り給はむとするに、幼き宮達纏はれて、更に離れ給はず、院は、尼宮の若君は、我が御子なれば、皇子達の列にはあるまじきぞかし、と、御心の中に思せど、却てその心ばえを、母宮の御心の鬼にや、右衛門督の胤ゆるに、思ひ貶すよと思ひ寄せ給らむと、これも院の御心の深き御癖に、氣の毒に思さるれば、いと可愛きものに思ひ傳き申し給ふ、左大將は、この若君を、またえ見ぬことかな、と思して、御簾の隙間より、若君の差出て給へるに、花の枝の萎れて落ちたるを、

手に取りて見せ奉りて、招ぎ給へば、若君走りおはしたり、二藍色の直衣ばかりを着て、いみじく白く光り美しきこと、皇子達よりも、精細に美しげにて、つぶく清らなり、權大納言の遺胤にても、雑りはせぬかと、生目留まる心も添ひて見ればにやあらむ、眼子の居りなど、この若君は、今少し強く才ある様勝りたれど、目尻の末、美しく薫れる氣色、いと能く權大納言に似給へり、口つきの、別段に花やかなる様して、打笑みたるなど、我が目の率爾なるにやあらむ、院は必この若君、權大納言に似たりと思し寄すらむ、いとくこの關係の御氣色、聞かまほしくなりぬ、皇子達は、思成しこそ氣高けれ、尋常の美しき乳子とも見え給ふに、この若君は、いと貴なるものながら、様特別に美しげなるを見比べ奉りつゝ、左大將は、心に、あは

れ、もし權大納言の遺胤も、眞實ならば、彼の父大臣の、あれ
 ほと世にいみじく思ひ耄れて、權大納言の子と名告り出て來る
 人さへなきぞ口惜しき、いかで我が嫡子の形見に、見るばか
 りの名残をなりとも、留めよかし、と、泣き焦れ給ふに、この若
 君の事、聞かせ奉らざらむも、罪得がましき、など、思ふも、い
 かで權大納言の遺子にはあるべきことぞ、と、思へ返しては、尙
 心得ず思ひ寄る方なし、若君は、心はえさへ懐かしく、愛憐に
 て、睦れ遊び給へば、いと可愛く覺ゆ、左大將は院に隨ひ奉り
 て、紫上の御方へ渡り給ひぬれば、長閑に御物語など申してお
 はする間に、日も暮れかゝりぬ、左大將は、昨夜彼の一條宮に
 詣でたりしに、落葉宮の、物寂しくおはせし有様など、申し出
 て給ひつるを、院は、含笑みて聞きおはす、左大將の、哀なる

左大將隨
 六條院詣
 紫上

昔の事、語りたる節々は、院會釋ひなどし給ふに、

(源) 彼の想夫戀の心ばえは、實に古の例にも引き出づべかり
 ける、哀なる折からの事ながら、落葉宮は、人の心移るほど
 の故由をも、一通にては漏らすまじくこそあらまほしかりけ
 れ、と、我身には思ひ知らるゝことゞもこそ多かれ、其方は過
 ぎにし右衛門督の遺志を忘れず、かく亡き跡までの長き用意
 を、人に知られたるとならば、同じくは彼の落葉宮に、懸想
 なく心潔白くて、とかく關係ひ、ゆかしげなき亂行なからむこ
 そ、誰が爲にも、奥ゆかしく見善かるべきことならめ、とぞ
 思ふ、

と言へば、左大將は、心の中に、父院は、他人の身の上の御教
 訓ばかりは、心強げにて、かゝる好色は、御自身は、いでやい

かゝあらむ、と、見奉り給ふ、

(夕) 何の亂か候はむ、尙常ならぬ世の哀を、懸け始め候ひにし宮の邊に、心短く絶えくゞに候はむこそ、却て普通の人のやうに、尋常の嫌疑あり貌に候はめ、と、思ひてこそ、度々懇切に訪問ひ申したれ、さて想夫戀は、我より心と差過ぎて弾き出で給はむは、憎きことに候はまし、されど彼宮の、物の序に、微かに漏らし給へりしは、折からの由緒づきて、美しくぞ候ひし、何事も女は、凡て人により事に従ふ業にこそ候ふべかるめれ、彼宮は、年齢なども、漸々甚く若び給ふべき程にもものし給はず、また我の戯謔がましく、好色々々しき氣色などに、物馴れてなども爲候はぬに、却て彼宮の心安く、打解け給ふにやあらむ、大方懐かしく、見善き人の御有様に

ぞ、ものし給ひける、

など申し給ふに、兼ねて彼の權大納言の遺言を、院に申さむと思ひ居たれば、いと善き序作り出で、少し御前近く参り寄り給ひて、まづ彼の夢語を申し給へば、院は、頓に物も言はで、その夢語聞召しては、御心に思し合することゝもあり、

(源) その笛は、此許に見るべき理由あるものなり、彼の品は、もと陽成院の御笛なり、それを故桃園式部卿宮の、いみじき寶物に爲給ひけるを、彼の右衛門督、童より、いと特別なる音を吹き出でしに感じて、彼の桃園の宮の、萩の宴せられける日、右衛門督に、贈物に取らせ給へるなり、彼の一條の御息所は、女心に、さほどの寶器とも尋取り知らずして、さやうに其方に贈物とはせられたるならむ、

桃園式部卿
宮○陽成帝
の皇弟式部
卿貞保親王
は笛の名人
なりこれに
なぞらへて
かけり

など言ひて、御心に、末の世の相傳は、また何方にとかは思ひ
 まがへむ、彼の右衛門督も、さやうに若君に、傳へむと思ひ
 成りけむかし、など、思ひて、この大將も、いと注意深き人なれ
 ば、この若君の由來をば、思ひ寄ることあらむかしと思す、左
 大將は、院の御氣色を見るに、彼の遺言のこと、いと、遠慮ら
 れて、頓にも打出で申し給はねど、強て聞かせ奉らむの心あれ
 ば、今しも物語の序に、ふと思ひ出でたる様に、おぼめかしく
 持て成して、

(夕) 彼の柏木右衛門督の、終焉とせし間に、訪問ひに退出
 候ひしに、右衛門督は、我が亡からむ後の事ども、言ひ置き
 候ひし中に、父院に對し奉りて、しかんぞ深く畏入り申す
 由を、返すくものし候ひしかば、如何なることにか候ひけ

む、今にその理由をぞ、え思ひ寄り候はねば、覺束なく候ふ、
 と、いと不案内しげに申し給ふに、院は御心に、さればよ、此
 兒は、探知にけるよ、と思せど、何かは、その間の事、顯はし
 言ふべきならねば、また右衛門督の思はれけむ事も、おぼめか
 しくて、

(源) さやうに人の遺恨、留まる程の我が氣色は、何の序にか
 漏り出てけむと、自分もえ思ひ出でずぞある、さて今靜に彼
 の夢は、思ひ合せてぞ申すべき、夢は夜語らずとか、女房の
 諺傳に言ふことなり、
 と言ひて、專御返答もなければ、夕霧大將は、打出で申してけ
 るを、父の院には、いかに思すにかあらむと、心の中に、慎ま
 しく思しけるとぞ、

第三十七帖 鈴虫

此帖は源氏
五十歳の夏
より秋に至
る
六條院供養

夏頃六條院の御池の、蓮の花の盛に、尼宮女三宮の御持佛ども、
 顯はし出で給へる供養せさせ給ふ、此度は、院の御志にて、御
 念誦堂の具ども、綿密に整頓へさせ給へるを、やがて修飾はせ
 給ふ、幡の様など、懐かしく心特別なる唐の錦を撰び縫はせ給
 へり、紫上ぞ、悉皆用意せさせ給ひける、花机の覆など、美し
 き目染も、懐かしく清らなる匂ひ、染め着けられたる心ばえ、目
 馴れぬ様なり、夜の御帳臺の帷子を、四面ながら上げて、後の
 方に、法華の曼荼羅懸け奉りて、白銀の花瓶に、高く仰山しき
 蓮花の色を整へて奉れり、名香には、唐の百歩の香を焼き給へ
 り、阿彌陀佛、脇士の菩薩、各々白檀して作り奉りたる、精工

に美しげなり、閑伽の具は、例のきはやかに小くて、青き白き紫の蓮の作花を整へて、荷葉の方を合せたる名香、蜂蜜を隠しほろ、げて焼き匂はしたる、百歩香と荷葉と、一つ薫りに匂ひ合ひて、いと懐かし、經は、六道の衆生の爲に、六部、書かせ給ひて、尼宮自身の御持經は、院ぞ御手づから書かせ給ひける、院は尼宮に對し、これをなりとも、今生の結縁として、互に佛道へ導き交はし給ふべき心を、願文に作らせ給へり、さて阿彌陀經は、院の書き給ふに、唐の紙は脆くて、尼宮の朝夕の御手習にも、いかゞとて、紙屋の人を召して、特別に院宣賜ひて、心特別に、清らに漉せ給へるに、この春の頃より、御心留めて、急ぎ書かせ給へるかひありて、端を見給ふ人々、目も輝き惑ひ給ふ、罨かけたる金の筋の光よりも、墨着のその上に輝く様など、

紙屋○京の北野に紙屋川ありこゝにて紙を漉きしなり

言ふも更なり、さてこの院の書き給ひし御經は、別段に沈の華足の机に居ゑて、佛を居ゑ置き奉る、御同じ帳臺の上に飾られ給へり、堂裝飾り終て、講師參上り、行道の公卿、殿上人ども、參り集ひ給へば、院も彼方に出て給ふとて、尼宮のおはします、西の廂に臨き給へれば、狭き心地する假の道場の修飾に、所狭く暑げなるまで、仰山しく装束きたる女房、五六十人ばかり集ひたり、北の廂の簀子まで、女童などは彷徨ふ、燠爐ども數多して、空燒の香、煙たきまで搦ぎ散らせば、院は差寄り給ひて、

(源) 香を空燒に燒くは、何處の煙ぞ、と思ひ別かれぬこそ善けれ、富士の嶺よりも勝りて、燠り満ち出でたるは、本意なき業なり、講説の折は、大方の鳴を鎮めて、長閑に物の心を

聞き別くべきことなれば、遠慮なき衣の音なひ、人の氣容鎮めてぞ善かるべき、

など、例の物心深からぬ、若女房どもの用意を、教誡へ給ふ、尼宮は、人氣に壓され給ひて、いと小く、美しげに帔伏し給へり、院は、

(源) 若君わかきみ君きみ薰かほこへ御出おいでであらば、亂らうがはしからむ、抱いだき隠かくし奉たてまつれ、

など言のたまふ、寢殿しんでんの北きたの御障子みさうじも取放とりはなちて、御簾みすか懸かけたり、其方そなたに聽聞きこえの人々ひとは入れ給ふ、院は、尼宮にきやうにも、物ものの心知こころしり給ふべき、豫かねての用意よういを申し知しらせ給ふ、御懇情みこんじやういとあはれに見みゆ、女三に宮みやの御座所おんざしよを、佛ほとけに譲ゆづり給へる、その佛壇ぶつだんの御修飾おんしゆしやくを、見遣みやりり給ふにつけても、宮みやの彼かの事ことなかりせば、かく尼あまにはして

見奉みたまつらじを、など、様々さまざまに思おもしては、宮みやは我が跡あとに残のこりて、世よをも背そむき給ふべきを、我われに先まちて、かゝる方かたの御營おんえいみをも、諸共もろともに急いそがむものとは、思おもひ寄よらざりしことなり、まゝよ今世このよにては、我われに先まち、佛ほとけの道みちに思おもひ入り給ふとも、後世のちのよになりとも、彼かの蓮はちすの花はなの中の宿やどりに、諸共もろともに隔へだてなくと思おもほせよ、とて、打泣うちなき給ひぬ、

(源歌) 蓮葉はちすはを、同おなじ臺うたなと、契ちぎりおきて、露つゆの分わかるゝ、今日けふ

と、御硯おんすずりに、御筆おんふで差濡さしぬらして、香染かうぞめなる、尼宮おんあふぎの御扇おんあふぎに、書かき付け給へり、宮みやは、

(三歌) 隔へだてなく、蓮はちすの宿やどを、契ちぎりても、君きみが心こころや、すまじとすらむ、

蓮葉云々○
後世は蓮臺
を共にする
ことを契り
置きながら
今別かるい
は悲しとな
り
隔てなく云
々○隔てな
く他生を契
り給ふとも

君は我が一
蓮には住み
給ふまじと
て住に澄を
かけたなり

七僧〇七僧
とは講師、讀
師、咒願、三
禮、唄、散華、
堂達をいふ

と、書き續け給へれば、院は、
(源)言ふかひなくも、思し腐すかな、
と打笑ひながら、猶可哀と物をおぼしたる御氣色なり、例の皇
子達なども、いと數多參り給へり、紫、上、花散里などの、御方
方より、我もくと營み出で給へる、御捧物の有様、心特別に、
所狭きまで見ゆ、七僧の法服など、凡て大方の事どもは、皆紫
上爲させ給へり、法服は、綾の装束にて、袈裟の縫目まで、見
知る人は、世に普通ならずとて、賞感けりとや、面倒しく綿密
なる事どもかな、講師の、講座に登りて、いと尊く、事の心を
申して、女三宮の、此世に勝れ給へる榮華を厭ひ離れ給ひて、長
き世々に、絶ゆまじき院との御契りを、法華經に結び給ふ、尊
く深き様を演へ顯して、當世に學才も勝れ、寛けき辯舌をいと

朱雀院欲
使女三宮
移三條宮

ど注意して言ひ續けたるが、いと尊ければ、聽聞の人々、皆萎
たれ給ふ、この御佛事は、唯内々の事にて、御念誦堂の供養の
始と思したることなれど、主上にも、山院にも、聞召して、皆
御使どもあり、御誦經の布施など、いと所狭きまで、俄にぞ事
廣がりける、六條院に、布施ども儲けさせ給へりける事ども、
省畧と思し、がど、尙尋常ならざりけるを、況して主上、山院
よりの御布施、嚴重しき事どもの加入りたれば、夕の寺、置所
なげなるまで、所狭き勢になりてぞ、僧どもは歸りける、院は、
尼宮の御佛事につけても、今更に御氣の毒なる御心添ひて、量
りも無く傳き申し給ふ、山院は、彼の御讓與の、三條宮に、尼
宮の、終には住み離れ給ひなむことなれば、同じくは、今の間
に移り給はむこと、見善かりぬべく申し給へど、六條院には、

(源) 尼宮の、餘所々々に離れおはしては、覺束なかるべし、朝夕見奉り申し承け給はらむことを怠らむには、本意違ひぬべし、實に有り果てぬ命、幾何もあるまじけれど、尙生ける限りの志をなりとも、失ひ果てじ、

と申し給ひつゝ、三條宮をも、いと精細に清らに修造せ給ふ、御封の物ども、國々の御庄、御牧などより奉る物ども、はかしくしき様の物は、皆彼の三條宮の御藏に收めさせ給ふ、またも御藏建て添ひさせ給ひて、様々の御寶物ども、山院の御處分の御寶物、數も無く賜はり給へるなど、尼宮に屬けたる物は、皆三條宮に運び渡し、巨細に嚴重しく爲置かせ給ふ、朝夕の御傳、許多の女房の事ども、上下の世話方は、凡て院の御扱ひにてぞ用意ぎ奉仕らせ給ひける、秋頃、尼宮のまします、西の渡殿の、前

の中の堀の、東の際を、凡て野に作らせ給へり、閑伽の棚などして、寺院の庭園などの様に爲成させ給ひ、御修飾など、いと艶めきたり、御弟子に慕ひ申して爲りたる尼ども、御乳母、古女房どもは、勿論それとして、然もなき若き盛の女房も、心定まりて、後までも出家を遂げ盡しつべき限りは、撰抜てぞ尼に爲させ給ひける、然る競争には、我もく御弟子にならむと、競進ひけれど、院は聞召して、

(源) そはあるまじき事なり、本意ならぬ人、少しにても雜りぬれば、傍の人、却て迷惑に、疎忽しき外聞、出て來る業なり、

と、諫止め給ひて、十餘人ばかりの程ぞ、撰抜き尼に爲して、容貌異様にては伺候ふ、この作りたる野に、虫ども放たせ給ひて、

風少し涼しく成り行く夕暮に、院は此方に渡り給ひて、虫の音聞き給ふ様にて、尙尼宮に思ひ離れぬ様を、申し惱まし給へば、女三宮は、我かく尼になりたる上は、院には、例の御心は、あるまじき事にこそあるなれ、と、偏に難澁しき事に思ひ申し給へり、さて尼宮には、人目にこそは變ることなく、院を待遇し給ひしが、内心には、權大納言の事につけて、憂きを知り給ふ氣色著く、此上なく變りにし御心を、いかで院には見せ奉らじの御心にて、多分はそれ故に、尼に思ひ成り給ひにし御出家なれば、今は持て離れて心安きに、然るを院は、尙かやうになど思ひ離れぬ様に申し給ふぞ、苦しくて、早く人離れたらむ、彼の三條宮の御住居にも、移はまほしと思し成れど、老成けて、得さやうにも強ひ申し給はず、

八月十五夜の月の、まだ影顯はさぬ夕暮に、佛の御前に、尼宮おはして、端近く詠め給ひつゝ、念珠し給ふ、若尼君達二三三人、花奉るとて、鳴らす闍伽器の音、水の氣容など聞ゆる、様變りたる營みに、私語き合へる、いと哀なるに、院は、例の如く渡り給ひて、

(源) 虫の音、いと繁く亂るゝ夕かな、
とて、御自分も、忍びて打誦し給ふ阿彌陀の大咒、いと尊く、ほのく、聞ゆ、實に虫の聲々聞えたる中に、鈴虫の振り出でたる間、花やかに面白し、院は、

(源) 秋の虫の聲、何れともなき中に、松虫の聲ぞ勝れたるとて、秋好、中宮の、遙けき野邊を分けて、いと故意と松虫を尋ね取りつゝ、放たせ給へるが、野にてのやうに著く鳴き傳ふる

こそ少かるなれ、千歳をも契る、松虫といふ名には違ひて、命の程はかなき虫にぞあるべき、心に任せて、人聞かぬ奥山、遙けき野の松原に、聲惜しまぬも、いと隔てある心ある虫にぞありける、鈴虫は、心安く當世めきたるこそ可愛けれ、など言へば、尼宮は、

(三歌) 大方の、秋をば憂しと、知りにしを、振り捨て難き、鈴

虫の聲、

と忍びやかに言ふ、いと艶めいて、貴に大様なり、院は、

(源) いかにとか言ふや、さやうに秋を憂しと思し給ふは、案の外なる御言にこそ候へ、とて、

(源歌) 心もて、草の宿を、厭へども、猶鈴虫の、聲ぞふりせ

大方の云々
○世を憂し
と知りて出
家したれど
虫の聲は捨
て難しとて
鈴に振るを
かけたり

心もて云々
○君は我を

ぬ、

など申し給ひて、琴の御琴召して、珍らしく弾き給ふ、尼宮御數珠引き怠り給ひて、御琴に尙心入れ給へり、月差出で、いと花やかなる間も哀なるに、院は空を打詠めて、世間様々につけて、果敢なく移り變る有様も、思し續けられて、例よりも哀なる音に搔き鳴らし給ふ、今夜は、中秋なれば、例の御樂遊にやあらむと、推測りて、螢兵部卿宮、六條院へ渡り給へり、夕霧、左大將、その他殿上人の、然るべき人など具して参り給へれば、院は尼宮の御方におはしますと、御琴の音を尋ねて、やがて兵部卿宮、左大將など、参り給ふ、院は、

(源) いと徒然にて、故意と樂遊とはなくとも、久しく絶えにたる、珍らしき音樂の音など、聞かまほしかりつる獨琴を、い

厭ひ給へど
我は君を捨
て申さずと
て女三宮を
鈴虫にたと
へていへり

螢兵部卿宮
夕霧左大將
参六條院

いつとても
○細流抄に
いつとても
月見ぬ秋は
なきものを
別きて今宵
かなとあり
新なる色に
は云々○白
氏文集に三
五夜中新月

と能う尋ね給ひけるよ、
とて、螢宮も、此方に御座所裝飾ひて、入れ奉り給ふ、禁裡の
御前に、今夜は月の宴あるべかりつるを、中止りて、物寂しか
りつるに、この六條院に、人々参り給ふと聞き傳へて、此彼公
卿なども参り給へり、虫の音の品評をし給ひて、御琴どもの聲
聲搔き合せて、面白き時分に、

(源) 月見に、宵のいつとても物哀ならぬ折はなき中に、今宵
の新なる色には、實に尙我が世の外までこそ、萬事思ひ流さ
るれ、故權大納言は、何の折々にも、亡きにつけて、いと々
忍ばるゝこと多く、公私につけて、物の折節の匂ひ失せた
る心地こそすれ、花鳥の色にも音にも思ひ辨へ、言ふかひあ
る方の、いと周到りしものを、

色二千里外
故人心とあ
り

冷泉上皇消
息六條院

式部大輔○
系圖になし

雲の上を云
々○今は禁
中を離れて
仙洞に居れ

など言ひ出で、御自分も搔き合せ給ふ御琴の音にも、涙に袖濡
らし給ひつ、御簾の内にも、尼宮は彼の權大納言の事を耳留め
て聞き給ふらむと、院の御心には、思しながら、かゝる御樂遊
の間には、まづ戀しく主上などにも思し出でける、院は、

(源) 今夜は、鈴虫の宴にて明かしてむ、

と思し言ふ、御蓋二巡ばかり参る間に、冷泉上皇より御消息あ
り、禁裡の御前の御樂遊、俄に中止りぬるを、口惜しがりて、左
大辨梅紅、式部大輔、また人々率ゐて、然るべき限り冷泉院へ参
りたれば、左大將などは、六條院に伺候ひ給ふと聞召して、か
く御消息はありしなりけり、上皇、

(冷歌) 雲の上を、懸け離れたる、住み家にも、物忘れせぬ、秋
の夜の月、同じくは、

ど月は忘れずとなり
同じくは○細流抄にあ
たら夜の月と花を同
じくは心知れらむ人に
見せばやとあり

月影は云々
○月影は變はられど見
る人の心に
よりにて秋の
思は變るわ
ざなりとな
り

と申し給へれば、院は、

(源) 何程も重々しく、所狭き我が身の分限にもあらずながら、

今は院も脱履り給ひて、長閑におはしますに、此身参り馴る

ること、専なきを、本意なきことに思し餘りて、注意させ

給へる、畏多し、

とて、俄なるやうなれど、やがてこれより、冷泉院へ参り給は

むとす、

(源歌) 月影は、同じ雲るに、見えながら、我宿がらの、秋ぞ

變れる、

この御返歌、特別なる節なかるめれど、唯冷泉院の、今昔の御

有様の、思し續けられけるまゝなるめり、上皇の御使に、盃賜

ひて、祿いと多く似るものなし、さてこれより、人々は六條院に

六條院率
諸卿參冷
泉院

左衛門督藤
宰相○致仕
大臣の子な
り

新院○冷泉
院今年卅三
歳におはす

供奉して、冷泉院へ参るに、御車、官位の次第のまゝに引き直

し、御前駟の人々立込みて、静なりつる御樂遊も、これに紛れ

て出で給ひぬ、六條院の御車に、螢兵部卿、宮合乗り奉り、夕霧、

左大將、左衛門督、藤、宰相などおはしける限り、皆参り給ふ、院

も、宮も、直衣にて、軽らかなる御装束どもなれば、院は下襲

ばかり加へ着給ひて、月や、中天に差昇り、更けぬる空の面白

きに、若き人々車の内にて、笛など故意となく吹かせ給ひなど

して、忍びたる御参院の様なり、正式しかるべき折節は、所狭

く世高けき儀式を盡して、互に御覽せられ給ふ、然るを、今夜

はまた古の臣下様に思し返りて、軽々しきやうに、ふとかく参

り給へれば、冷泉院には、甚く驚き待ち悦び申し給ふ、さて新

院冷泉の壯び整へ給へる御容貌、六條院の御胤として、いよいよ

六條院訪
秋好中宮

よ別物ならず、いみじき御盛の世を、御自身、御心と覺し捨てて、静閑なる御有様にまします、哀少からず、當夜の歌ども、唐詩も、和歌も、心ばえ深く、面白きはかりぞ、例の言足らぬ片端は、記者も學ぶに傍痛くて省筆きぬ、明方に、詩歌など講じて、朝早く人々退出で給ふ、六條院は、秋好中宮の御方に渡り給ひて、御物語など申し給ふ、

(源) 今はかく閑静なる御住居に、屢も参りぬべく、何とはなけれど、過ぐる齡に添へて、忘れぬ昔の御物語など、承はり申さまほしく思ひ候ふに、今は院號など賜はりて、何にも附かぬ身の有様にて、さすがに初々しく、所狭くも候ふてぞ、屢え参り兼ね候ふ、我より後の人々、權齋院を始め、臈尙侍、女三宮など、方々出家し給ふにつけ、後れ行く心地し候ふも、

いと常なき世の心細さの、長閑め難く覺え候へば、我も出家して、世離れたる住居にもや移はむと、漸々思ひ立ちぬるを、明石女御などのやうなる、残りの人々の、物果敢なからむをば、漂蕩はし給ふなと、先々も申し付けし心違へず、思し留めてものせさせ給へ、

など眞實やかなる様に、申させ給ふ、中宮は、
(秋) 禁中にありて、九重の隔て深く候ひし年頃よりも、却て隙なくて、院へも参り候はで、覺東なさの勝るやうに、思ひ候はるゝ有様を、かく新院讓位させ給ひては、長閑におはしませば、いと案外に暇なくて、皆人の背き行く世を、自分も厭はしく思ひ成ることも候ひながら、その心の中を申させ承はらねば、これまで何事も、まづ頼もしき蔭には申させ習

覺東なさ○
河海抄に詠
めやる山邊
はいと霞
みつゝ覺東
なさの勝る
春かなとあ
り
皆人の○細

流抄に皆人の背き果てぬる世の中にふるの社の身をいかにせむとあり

○鈴虫

慣ひて候ひし故に、近來隙暇なきにつけて、發心の事も、え承はらず、悒鬱く候ふ、

と申し給ふ、院は、

(源) 實に朝廷にまします時は、限ある折節の御里居も、いと能う待ちつけ申させしを、今は何事につけてかは、御心に任せて、御里移ひも自由に候はざらむ、定めなき世とは言ひながら、さも、さして此世に厭はしきことなき人は、爽然に背き離るゝも、有り難く、心安かるべき臣下の身分につけてさへ、自然思ひ關係ふ羈絆ばかり候ふを、何どかその人真似に競争ふ御道心は、却て辟しく推量り申さする人もこそ候へ、懸けても御發心は、いとあるまじき御事にぞ候ふ、

と申し給ふを、中宮は御心に、院は深くも我が心中を汲み量り

給はぬなるめり、と、この諫言を却て辛く思ひ申し給ふ、さて故六條の母御息所の御身の、苦惱しく成り給ふらむ有様、いかなる火煙の中に迷ひ給ふらむ、亡き蔭にても、人に疎まれ奉り給ふ御名告などの、物怪の中に出で來りけること、六條院にはいみじく隠し給ひけるを、自然人の口悪くて、中宮の傳へ聞召しける後、いと悲しくいみじくて、凡ての世の厭はしく思ひ成りて、假にても彼の御息所の、物怪に名告り出で言ひけむ御執心の有様の、委細しく聞かまほしきを、正面にはえ打出で申し給はで、唯、

(秋) 亡き母御息所の御有様の、罪業輕からぬ様に微聞くことの候ひしを、然る物怪などのやうなる驗、顯露ならでも、罪業の程は推量りつべきことに候ひけれど、今日までは、唯母

○鈴虫

君に後れし間の悲哀ばかりを、忘れぬことに思ひて、後世の苦惱を思ひ遣らざりけるが、物果敢なきを、いかでこの間の道理を、能く言ひ聞かせむ人の勸告をも聴き候ふて、自分なりとも出家して、彼の亡き母の、嗔嗔の悪焰をも、覺滅し候ひにしがな、と、漸々年の積りにぞ、思ひ知らるゝことゝもありける、

と微めつゝ言へば、院は實に然も思しぬべきことよ、と、哀に見奉りて、

(源) さてその悪焰ぞ、誰も遁るまじき事と知りながら、朝露の懸れる間、即ち命のある間は、誰も此世は思ひ捨てられ候はぬにぞ候ふ、目蓮が、佛に親近き聖の身にて、忽にその母の、餓鬼道に墮ちたるを、救ひけむ先例候へど、目蓮なれば

目蓮○目蓮の事孟蘭盆經に見えたり

こそ救ひも爲たれ、よし今御出家ありたりとて、これにはえ追ひ付かせ給はざらむ、且はまた玉の鈿捨てさせ給はむも、惜しむ人々もあれば、却て現世には怨恨残るやうなる業なり、形貌を更へ給はずとも、漸々にその御志を染め給ひて、彼の御怨焰霽るゝべき法事を爲させ給へ、我もさやうに、御母の御息所の御追善は、申さむと思ひ候ふこと、候ひながら、何となく物騒がしきやうに、閑靜なる本意もなきやうなる様に、明け暮らし候ひつゝ、自分の勤行に添へて、今靜に御追福は奉仕らむと思ひ候ふも、實にこそ心幼きことなれ、
など、世間凡て果敢なく、厭ひ捨てまほしきことを申し交し給へど、雙方とも、尙出家し難き御身の有様どもなり、さて院には、昨夜は打忍びて、簡易かりし御外出、今朝は顯はれ給ひて、

公卿なども参り給へる限りは、皆扈從ひて御送り奉仕り給ふ、院は明石、女御の御有様の、雙びなく齋き立て給へるかひぐしきも、夕霧、左大將の、またいと他人に特別なる御様をも、何れとなく見善しと思すに、尙この冷泉新院をば、思ひ申し給ふ御志は、一層勝れて、深く愛憐にぞ思し給ふ、新院も、また平生に、この六條院をば、ゆかしくばかり思ひ申し給ひしに、御位にましくしては、御對面の稀に悒鬱くばかり思されけるに、御脱履を急がされ給ひて、かく心安き仙洞の様に、と、思しなりけるにぞありける、秋好、中宮も、かく共に位を避り給へれば、心安く御里出もありぬべきを、却て退出で給ふことも難くなりて、今は尋常人の交情のやうに、常に並びおはしますに、當世めかし、却て禁中におはせし昔よりも、花やかに御樂遊をも爲給ふ、

何事も御心遣れる有様ながら、唯彼の母御息所の御事を、思し遣りつゝ、佛道修行の御發心、進みにたるを、御養父の院も、また新院も、御出家をば、許可し給ふまじきことなれば、せめて母君の功德の事を立て、思し營み、いと心深く世間の有様を思し取りて、専佛道に心入れ給ふ、六條院にも、諸心に、御息所の御追善をば、用意ぎ給ひて、御八講など行はせ給ふとぞ、承はりし、

第三十八帖 夕霧

此帖は源氏
五十歳の秋
より冬に至
る

眞實人の名を取りて、賢がり給ふ夕霧、左大將は、彼の一條の落
 葉宮の御有様を、尙かくあらまほし、と、心に留めて、大方の人目
 には、昔の柏木右衛門督の遺言を、忘れぬ用意に見せかけつゝ、
 いと懇切に訪問ひ申し給ふ、下の心には、かくては、止むまじ
 くぞありける、御母一條御息所も、愛憐に有り難き大將の御心
 ばえにもあるかな、と、今はいよく物寂しき御徒然を、絶えず
 音問れ給ふに、慰むる事ども多かり、大將は心に、最初より懸想
 びても申し給はざりしに引き返し、懸想はみ艶めかむも目眩し、
 唯深き志を見せ奉りたらば、彼の宮も、打解け給ふ折あらむ、そ
 の上にて打出でむと思ひつゝ、然るべき事につけても、宮の御

一條御息所
病移ニ小野山
莊

氣容有様を見給ふ、さて落葉宮には、これまで自分など會釋ひ
申し給ふことは更になし、然れば大將は、如何ならむ序に、思
ふことも、正面に申し知らせ、宮の御氣色を見む、と思し渡る
に、御息所、物怪に甚く煩ひ給ひて、小野といふ邊に、山莊持
給へるに、渡り給へり、以前より御息所の御祈禱の師にて、物
怪など禳へ捨てける律師の、山籠りして、里に出てじと誓ひた
るを、その山麓近くて、請じ下し給ふ故に、この小野の山莊に
は移ろひ給ふなりけり、この御移徙につけては、御車より始め
て、御前駈など、大將よりぞ奉り給へる、却て眞の昔の右衛門督
の近因の兄弟の君達は、事業繁き各自の營みに紛れつゝ、御息所
の供奉などの事は、えも思ひ出で申し給はず、弟の左大辨も、ま
た落葉宮に思ふ心なきにしもあらで、氣色はみけるに、一條の宮

よりは、案外なる御待遇なりければ、強ひてはえ詣で訪ひ給はず
なりにたり、この大將は、いと賢く懸想たゞずに、然り氣なく
申し馴れ給ひにたるめり、御息所には、彼の山莊にて、修法な
ど爲させ給ふと聞きて、大將よりは、僧の布施、淨衣などやう
の、小細なる物をまで、奉り給ふ、御息所は、物怪に惱み給へば、
御返事え申し給はず、女房達は、

(女房) この御返書、普通の宣旨書にては、大將如何と思しぬ
べく、彼の君重々しき御様にて、輕蔑りにくき御方に候ふ、
と申せば、落葉宮ぞ母君に代りて、御返事申し給ふ、御手跡は
いと美しげにて、唯一行など、大様なる書き様、詞も懐かしき
所書き添へ給へるを、大將はいよく見まほしく目留まりて、こ
れよりは一層繁く申し通ひ給ふ、本妻雲井、雁には、大將と落葉

宣旨書○後
世の僧書と
いふに同じ

宮との間、終にあるやうあるべき交情なるめり、と推量りて、氣色取り給へれば、大將は、心に面倒しく思ひて、彼の山里へ詣でまほしく思せど、頓にもえ出で立ち給はず、八月の廿日ばかりなれば、小野の山莊の有様の、いとゆかしければ、北方に、(夕) 某の律師の山籠せしが、珍しう麓に下りたるに、切に談合ふべきことあり、御息所の煩ひ給ふなるも、見舞ひがてら詣でむ、

夕霧左大將
訪小野山莊

と大方にぞ申し言ちて出で給ふ、御前駈仰山しからず、親しき限り五六人ばかり、狩衣にて侍ふ、殊別に奥深き道ならねど、松崎の小山の色なども、然る巖ならねど、秋の景色づきて面白く、山里に分け入るまゝに、都には似なくと盡したる家居には、尙哀も興も勝りてぞ見ゆるよ、さて山莊には、はかなき小柴垣も、由

緒ある様に爲成して、假初なれど、貴はかに住居し給へり、寢殿と思しき東の放出に、修法の壇塗りて、御息所は、北の廂におはすれば、西面に、落葉宮はおはします、御物怪難澁とて、宮をば京に留め奉り給ひけれど、宮はいかてか母君に離れ奉らむとて、強てこの山莊に慕ひ渡り給へるを、物怪の人に移り散るを畏れて、少しの隔離ばかりして、御息所の方へは渡し奉り給はず、客人大將は、居給ふべき所のなければ、落葉宮の御方の、簾の前に入れ奉りて、上臈めく女房達して、御息所の御消息を申し傳へしむ、

(息) かくまで懇切に言はせ渡らせ給へるぞ、いと辱く候ふ、もしこの生命、かひなく成り果て候ひなば、この御禮をさへ申さで止みなむか、と、思ひ候ふにぞ、今暫時存命へまほしき心

夕霧大將訪
小野山莊圖

夕霧君

山里の

あはれを

そふる

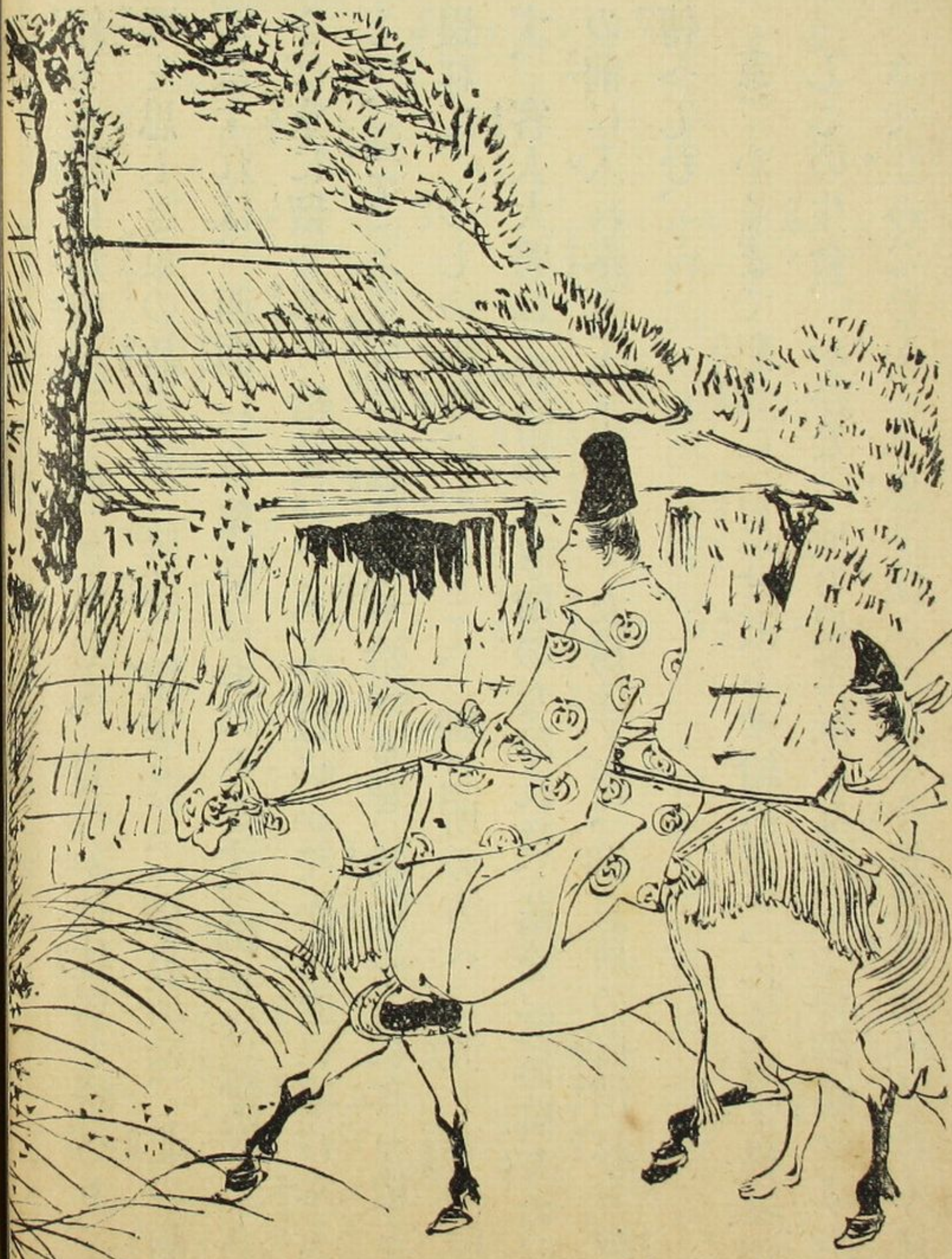
夕霧りに

たちい

でむ空も

なきこ

こちして



○夕霧

百四十二

落葉宮

山殿の

まがきを

こめて

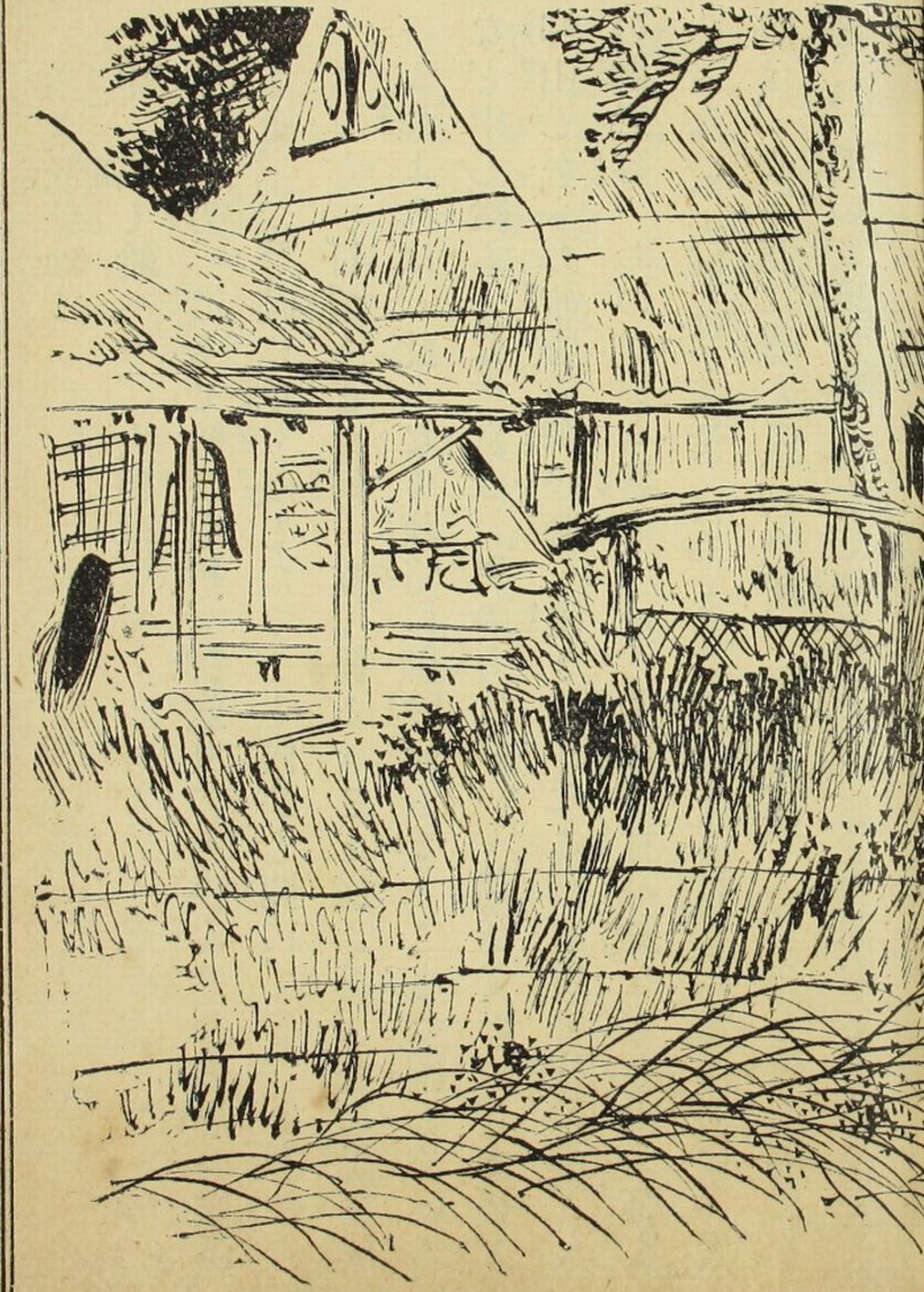
たつ霧も

こゝろ

そらなる

ひとば

咎がめす



○夕霧

百四十三

着き候ひぬる、

と申し出し給へり、大將は、

(夕) 此方へ渡らせ給ひし折、御送りにも供奉せむと思ひ候ひしを、六條院に承り残したること候ひし間にてぞ、え奉仕らざりし、日頃もまた何となく紛るゝこと候ふて、心に思ひ候ふ程よりは、此上なく疎略に御覽ぜらるゝことの困しく候ふなど申し給ふ、落葉宮は、奥の方に、いと忍びておはしませど、仰山しからぬ旅所の御修飾、淺きやうなる御座所の程にて、人の御氣容、おのづから著し、いと柔かに打身動などし給ふ御衣の音なひ、大將は、落葉宮ほどなるなりと推量り聽き居たり、大將は、心も空に覺えて、御息所の御消息通ふ間、少し遠く隔たる隙に、例の女房少將、君など伺候ふ人々に、物語などし給ひて、

(夕) かく参り來馴れ承はることの、年頃といふ程になりけるを、此上なくも物遠く待遇させ給へる、いと恨めしく候ふ、かゝる近き御簾の前にて、人傳の御消息などの、微かに申し傳ふることよ、またこそ習はね、いかに古めかしき様に、人含笑み給ふらむと、不都合なくぞ思はれ候ふ、年齢も積らず、身の分際も輕らかなりし時分より、微妙好色たる方に面馴れなましかば、かく初々しくも覺えざらまし、更に拙者のやうに、これほど正直しく、癡れて年經る人は、他には比類あらじかし、

と言ふ、女房どもは、實にいと輕蔑りにくげなる様し給へれば、さればとて、却て傍より御返答申し出でむは、耻かしくこそあれ、など、膝衝きじろひて、少將、君など、落葉宮に、

(少) 大將殿の、かゝる御愁言、君には聞召し知らぬやうなり、と申せば、宮は、

(落) 母御息所、自身申し給はざるめる傍痛さに、吾身代りて、御對面申すべきを、母君の物怪、いと恐ろしきまでものし給ふめりしを、看護ひ候ひし間に、吾身も、いと有るか無きかの心地になりてぞ、得申さぬ、とあるを、大將の方へ傳へ申しければ、大將は、

(夕) こは、宮の御消息か、と居直りて、

(又) 御息所の、御氣の毒なる御病惱を、拙者の身に替ふばかり歎き申させ候ふも、何の故にか候はむ、畏多けれど、御息所の物を思し知る御有様など、御病氣の霽々しき方にも、見

奉り直し給ふまでは、宮の平安に過ぐし給はむこそ、御息所の御爲にも、また宮の御爲にも、頼もしきことには候はめ、と推量り申さするによりてぞ、かく及ばずながら、心を盡すに候ふ、然るを、唯御息所方のみ思し譲りて、積り候ひぬる我が志をも、宮には少しも知召されぬは、いと本意なき心地ぞし候ふ、

と申し給ふ、少將、君を始め、伺候ふ女房ども、實に御道理と申す、日入り方に成り行くに、空の景色も哀に霧り渡りて、山の陰は小闇き心地するに、蛸鳴き頻りて、垣穂に生ふる瞿麥の、打靡きける色も、面白く見ゆ、御前の前栽の花どもは、心に任せて亂れ合ひたるに、水の音いと涼しげにて、叡山嵐心凄く、松風の響き、木深く聞え渡されなどして、不斷の經讀む時更りて、

蛸云々○河海抄にひぐらしの啼きつるなへに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞありけるとあ

り
垣穗に○同
抄にあな戀
ひし今も見
てしか山賤
の垣穗にお
ふる大和な
でしことあ
り
不斷の經○
十二時を一
時づゝ交替
して讀經す
るなり

山里の云々
○只さへ歸
り難きにこ

鉦打鳴らすに、起つ聲も居替る聲も、一つに合ひて、いと尊く
聞ゆ、所がら、萬の事、心細く見成さるゝも、大將は、哀に物
思ひ續けられて、出で給はむ心地なし、律師の加持する音して、
陀羅尼いと尊く讀むなり、物怪今いと苦しげに爲給ふなりとて、
女房ども皆御息所の方に往き集ひて、大方もかゝる旅所には、女
房ども數多集らざりけるに、落葉、宮の方には、人寡にて、宮は
寂しく詠め給へり、大將は、蕭條にて、思ふことも打出でつべ
き折かなと思ひ居給へるに、霧の唯この軒の下まで起ち渡れば、
(夕) 退出でむ方も見えず成り行くは、いかゞすべき、
とて、

(夕歌) 山里の、哀を添ふる、夕霧に、立ち出でむ空も、なき
心地して、

と申し給へば、落葉、宮は、

(落歌) 山賤の、眞垣をこめて、立つ霧も、心空なる、人は咎
めず、

と微かに申す御氣容に、大將は慰めつゝ、眞に歸途忘れ果てぬ、
大將は、

(夕) あはれ霧深く、中空なる業かな、家路は見えず、霧の籬
は立止まるべくもあらず逐はせ給ふ、好色事に、相應なきも
のは、かゝる事こそ習はで困しけれ、

など申し休らひて、忍び餘りぬる筋も、微聞かし申し給ふに、落
葉、宮は、心に、年頃も無下に見知り給はぬにはあらねど、知ら
ぬ貌にはかり待遇し給へるを、今かく言に出で、恨み申し給ふ
を面倒しく思ひて、いとゞ御返答もなければ、大將は、甚く歎

の夕霧にい
かで立出で
られむとな
り題名此歌
によれり
山賤の云々
○この山家
にも君の如
きあるまじ
き心ある人
は留めじと
なり

栗栖野の莊
○花鳥餘情
に小野郷は
上賀茂領な
り栗栖郷は
下賀茂領な

きつゝ、心の中に、またとかゝる折はありなむや、と、思し廻らし給ひて、宮には、たとひ情なく、疎忽きものには、思はれ奉るとも、いかゞはせむ、心に思ひ渡る様をなりとも、知らせ奉らむと思ひて、御供の人を召せば、近衛將監より、敍爵得たる睦しき右近、大夫將監ぞ參れる、大將は忍びやかに、召寄せて、
夕 彼の律師に、是非とも言ふべきことのあるを、御息所の護身などに、暇なげなるめるを、唯今は打休むらむ、今夜予はこの邊に宿りて、初夜の時終てむ間に、律師の居たる方にものせむ、供人の此彼は、そここゝに伺候はせよ、隨身などの男どもは、栗栖野の莊近からむ所に、秣など取り飼はせて、御息所、御病氣にましますば、此處には供人數多、聲な爲そ、かやうの旅寐は、輕々しきやうに、人も取り成すべし、

りとあり小
野の近傍に
て大將の御
莊に書き成
したるなり

と言ふ、右近大夫は、大將殿には、今夜はあるやうあるべしと心得て、承知りて立ちぬ、かくて大將は、落葉宮に、
夕 道いと不案内しければ、この邊に宿借り候ふ、同じくは、この御簾の下に、許可されあらなむ、律師の下るゝ間までぞ、とつれなく言ふ、宮は心に、例は大將は、かやうに長居して、洒落ばみたる氣色も見えたまはぬを、今夜は、うたてもあるかな、と思せど、然りとて故意めきて、輕らかに御息所の方へ這ひ渡らむも、様悪しき心地して、唯音もせで、靜におはしますに、大將は、とかく申し寄りて、御息所の御消息を申傳へに、宮の方へ膝入り入る女房の背後につきて、御簾の内に入りぬ、また夕暮の霧に閉鎖られて、内は昏くなりたる間なり、女房は淺ましく、見返りたるに、落葉宮は、いと氣味悪くなり給ひて、北の御

夕霧大將密
入落葉宮簾
内

障子の外に、膝行り出てさせ給ふを、大將はいと能く尋取りて、引き留め奉りつ、宮の御身は、彼方へ入り果て給へれど、御衣の裾の残りて、御障子は、懸鍵此方にありて、彼方より鎖す方なかりければ、宮は障子を引閉て中止て、汗は水のやうに流れて、戦慄きおはす、女房達も、呆れて、いかに爲べきことゝも思ひ得ず、此方よりこそ鎖す懸鍵などもあれ、されど、いと是非なく荒々しくは、え引き搔投ぐるべくも、また爲し奉るべきにもあらねば、女房達は、

(女房) いと淺ましく、思ひ寄り候はざりける、御心の程にぞ候ふ、

と泣きぬばかりに申せど、大將は、

(夕) これほとまでにて伺候ふらむが、他人より勝りて、疎ま

千々に碎け
○河海抄に
君戀ふる心
は千々に碎
くれど一つ
も散らぬも
のにぞあり
けるとあり

しく心外しく思さるゝ事は、よもあらじ、數ならぬ身に候へども、御耳馴れぬる年月も、重りぬらむ、

とて、いと長閑に、様善く持て鎮めて、思ふことを申し知らせ給ふ、宮は聴き入れ給ふべくもあらず、心の中に、悔しく、かくまで近づかれぬることよ、と、思ふことのみ、遣る方なければ、御返答言はむことも、また況して覚え給はず、大將は、

(夕) いと心憂き若々しき御様かな、人知れぬ心に餘りぬる、好色々々しき罪ばかりこそ候はめ、これより馴れ過ぎたることは、更に御心許されずしては、御覽ぜられじ、いかばかり千々に碎け候ふ思に堪へぬぞや、然りとも我が志は、君にも自然御覽じ知る節も候はむものを、強ひて知らぬ貌におぼめかし、氣疎く待遇させ給ふれば、申させむ方なさに、いかゞはせ

む、心なく憎しと思さるとも、此儘徒に思ひ腐すべきにも候
 はねば、この切なる愁情を、分明に申し知らせ候はむと、思
 ふばかりに候ふ、言ひ知らぬ御氣色の無情きものながら、い
 と畏多ければ、思のまゝにもえ爲奉らず、
 とて、強に情深く用意し給へり、落葉宮は、障子一重ばかりを
 押へ給へるは、いと物はかなき固守なれど、大將は、その障子
 引きも開けず、

(夕) 君は、こればかりの障子の隔別を、と、強ひて思さるら
 むこそ可憐なれ、

と打笑ひて、大將は、うたて心の儘なる、勝手の様にもあらず、
 宮の御有様の、懐かしく貴に艶めき給へること、人聞には、容
 貌餘り佳からずといひしが、今親しく見奉れば、特別に美しく

見ゆ、さて宮には、世と共に長く物を思ひ給ふ故にや、瘦せく
 に、細小なる心地して、打解け居給へる、有りの儘なる御姿の、
 御袖の邊も柔靡かに、氣近く染みたる薰香など、取り集めて可
 愛げに、柔輦なる心地し給へり、風はいと心細く、更け行く夜
 の景色、虫の音も、鹿の鳴く音も、瀧の音も、一つに亂れて、艶
 なる頃なれば、唯大方の物思知らぬ、疎躁人さへ、寐覺めしぬ
 べき空の景色を、また御格子もそのまゝにて、入方の月の、山
 の端近き間、止め難く物哀なり、
 (夕) 尙かく何處までも、思し知らぬ御有様こそ、却ては御心
 の程も浅く知らるね、かく我が世着かぬまで、癡々しき心安
 さなども、他には等類あるまじと、自覺え候ふを、何事にも
 容易き程の、下等の人こそ、我々のやうなるものをば、癡物

など打笑ひて、無情き心も使ふなれ、君は何事も御分別あるに、餘り此上なく思し貶したるに、我も得ぞ思ひ鎮め終つまじき心地し候ふ、君は男女の間を、無下に思し知らぬにしもあらじを、

と、萬事に申し迫められ給ひて、宮は心に、いかゞ言ふべき、と詫びしく思し廻らす、男女の間を知りたる方の、心安きやうに、大將は折々微聞かすも、心外しく、實に世に比類なき身の憂さなりや、と、思し續け給ふに、死ぬべくも覺え給ひて、

(落) たとひ一旦、人に逢ひ始めて、憂き自分の罪を思ひ知るとても、いとかく淺ましき君の御所爲を、いか様に思ひ成すべきにかはあらむ、
と、いと微かに、哀げに泣き給ひて、

我のみや云云○心ならず右衛門督

に逢ふて又その上に君に逢ふていかで只管に名を腐すべきそは有るまじきことぞとなり

大方は云々○大抵は我が濡衣を着せすとも右衛門督の着古らせし名は隠れずとなり

(落歌) 我のみや、憂き世を知れる、ためしにて、濡れ添ふ袖の、名を腐すべき、

と言ふともなきを、我が心に續けて、忍びやかに打誦し給へるも、傍痛く、大將の、いかに言ひつることぞ、と、宮は思さるゝに、大將は、我ながら、實に悪しくも申しつかし、など、含笑み給へる氣色にて、

(夕歌) 大方は、我が濡衣を、着せずとも、朽ちにし袖の、名やは隠るゝ、
今は御名を憚り給はで、一向に我に思し成りねかし、

とて、月明き方に、誘ひ申すも、宮は淺ましと思す、さて心強く待遇し給へど、大將は、はかなく引き寄せ奉りて、
(夕) これほと比類なき我が志を、御覽じ知りて、心安く待遇

し給へ、御許可あらでは、更にく無理なる押立ちたることは奉仕らじ、

と、いと分明に申し給ふ間、明け方近くなりけり、月隈なく澄み渡りて、霧にも紛れず差入りたり、浅はかなる廂の軒は、間もなき心地すれば、宮は月の面に向ひたるやうなる、怪しく不都合くて紛らし給へる待遇など、言はむ方なく艶めき給へり、大將は、故權大納言木柏の御事も、少し申し出で、様善く長閑なる物語をぞ申し給ふ、宮は、さすがに尙彼の過ぎにし權大納言よりは、思し貶して待遇し給ふを、大將は恨めしげに、怨み申し給ふ、宮は御心の中にも、彼の權大納言は、位なども、我が夫としては及ばざりける程ながら、誰もく御許ありけるに、自然それに持て成されて、夫と見成されにしを、それさへ彼の君

の疎略にして、我ながらいと心外しき心に成り果てにし様よ、況して大將の、かくあるまじきことに、その北方は、權大納言の妹にて、餘所に聞く邊にさへあらず、彼の父君、致仕大臣の聞き思ひ給はむことも、如何あらむ、凡ての世の誹謗は、更にも言はず、我が父の院朱雀院にも、如何に聞召しおぼされむ、など、離れぬ親族の、此處彼處の御心を思し廻らすに、いと口惜しく、我心一つに、かく強く思ふとも、人の評判如何ならむ、母御息所の知り給はざらむも、罪得がましく、またかく大將に近かれぬと聞き給ひなば、我が心稚くと思し言はむも詫しければ、打明かさでなりとも、大將には、出で給へと逐へ申すより外の事なし、など、様々に思し煩ふ、大將は、
(夕) 浅ましや、事有り顔に、分け候はむ朝露の、思はむ所に、

尙我が志の程を、此後も思し知れよ、かく愚癡しき様を見せ奉りて、さて君には、賢く欺し遣りつ、と思し離れむこそ、その際は、我が心も、え治め合ふまじく、我が心ながらも、何とも知れぬ事々、怪しからぬ心使ひも、習ひ始むべく、思ひ寄られ候ふ、

とて、脅迫しても 宮の御心、打解け給はねば、却て不安心く、一體この大將は、不意に洒落れたることの、眞に習はぬ御心地なれば、然る心見せ奉りては、いと御氣の毒に、我ながら心劣りやせむなど思して、誰が爲にも、顯露なるまじき程の、霧に立ち隠れてぞ、心も空に出で給ひぬる、

萩原や云々
○此所を出る時は萩の露にぬれ此

(夕歌) 萩原や、軒端の露に、そぼちつ、八重立つ霧を、分けぞ行くべき、濡衣は、猶え乾させ給はじ、かく是非なく

先は多くの霧を分くることよとて戀の困難を愁訴したるなり
濡衣○河海抄に世ととも我ぬれ衣になるものは詫ふる涙の着するなりけりとあり

逐はせ給ふ御心つからこそ、我もその濡衣は着め、と申し給ふ、實に宮の御名の力なく漏りぬべきことを、心の問はむにさへ、口清く答へむと思せば、いみじく持て離れ給ふ、さて宮は、

心の問はむ○後撰集になき名ぞと人にはいひて有りぬべし心の問はしいか答へむとあり分け行かむ

(落歌) 分け行かむ、草葉の露を、かごとにて、尙濡衣を、かけむとや思ふ、珍らかなることかな、と憎め給へる様、いと美しく、耻しげなり、大將は、年頃、世人に違へる、心はせある人になりて、様々に情を見せ奉る精神の、名残りなく打撓め、好色々々しきやうなるが、いと氣の毒に、心耻かしげなれば、一通ならず思ひ返しつ、かく強に従へ申しても、後には愚痴しくやあらむ、と様々に心亂れつ、出で給ふ、道の露けさも、いと所狭し、かやうの微行、これまで

云々○凡て人は濡衣を乾さむとするを途の露にかこつけて我にその濡衣を着せむとするは心外に珍らかなることなりと詞にかけていへり

夕霧大將贈書落葉宮

習ひ給はぬ心地に、面白くも心盡しにも覺えつゝ、三條宮に歸れば、北方雲井雁、かゝる露霧の濡衣を、怪しと咎め給ひぬべければ、六條院の東殿、花散里の御方に詣で給ひぬ、都にはまた朝霧も霽れず、まして小野の山莊には、いかにと思し遣る、大將殿には、例ならぬ御有様なりと、東殿の女房達は私語く、大將は暫時打休み給ひて、御衣脱ぎ替へ給ふ、花散里の方には、大將の御爲に、夏衣冬服と、いと清らに爲置き給へれば、香の御唐櫃より取出て、着せ奉り給ふ、御粥など参りて、大將は院の御前に参り給ふ、

いと耻かしく、またかゝる事やありけむ、と、御息所の、懸けても知り給はざらむに、尋常ならぬ節にても、ふと見付け給ひ、或は人の評判、隠れなき世なれば、自然聞き合せて、我よりは打隠して隔てける、と思されむが、いと困しければ、女房の中に、誰か有りしまゝに、母君に申し漏す人あれかし、母君の聞召して、憂しと思すとも、今更如何はせむ、と思す、親子の御間と申す中にも、この落葉宮は、少しも隔てずぞ思ひ交し給へる、餘所の人は漏り聞けども、親に隠す類こそは、昔物語にもあるめれど、この宮は、さやうにもまた思されず、女房達は、
(女房) 此度の御事、御息所の、微かに聞き給ひても、事も有り顔に、何かはとかく思し亂れむ、聞召さで、未しきに思し亂れむは、却て御氣の毒に候ふ、

など言ひ合せて、大將よりの御文、如何ならむと思ふ、女房同志、彼の御消息の、ゆかしきを、宮は引きも開封させ給はねば、待遠に思ひて、

(女房) 尚無下に、御返事申させ給はざらむも、覺束なく若々しきやうにぞ候ふらむ、

など申して、披げたれば、宮は、

(落) 怪しう我が、何心もなく打解けたる様にて、彼の大将に、あれほどまでも近づき見られしは、やがて何心もなき疎忽さの、我が自身の過失と思ひ成せど、大将の思ひ遣りなかりし淺ましきも、慰め難くぞある、我は御文見え、
と言へど、殊の外にて、物に倚り伏させ給ひぬ、然るは、大将の御文、憎げもなく、いと心深く書き給ひて、

魂を云々○
心ならず魂
もあくがれ
行くとて古
歌のあかさ
りし袖の中
にや入りに
けむ我魂の
なき心地す
るといふに
よれり
外なるもの
○細流抄に
身を捨て
いにやふに
けむ思ふよ
り外なるも
のは心なり
けりとあり

(夕歌) 魂を、つれなき袖に、留め置きて、我心から、惑はるるかな、外なるものは、とかいふめれば、昔も類ありけりと思ひ成すにも、更に心の行き方も知らずばかりぞ候ふ、
など、詞いと多かるめれど、肝腎の宮には、え正面にも見ず、例の後朝めきたる今朝の御文にも、あらざるめれど、女房達は、昨夜の御様、實事ありしや否や、猶え思ひ晴けず、宮の御気色も、いと御氣の毒なるを、歎かしく見奉りつゝ、如何なる御事にかはあらむ、大將の、何事につけても、有り難く可憐なる御心様は、年経ぬれど、夫婦の方に頼み申しては、見劣りやし給はむと思ふも、危くなど、睦しく伺候ふ限りは、己が同志思ひ亂る、御息所は、此度の事、懸けても知り給はず、物怪に煩ひ給ふ人は重しと見れど、忽爽快き給ふ隙もありてぞ、御息所は、時と

して物覚え給ふ、晝つ方、日中の御加持終て、律師一人留まりて、猶陀羅尼讀む、御息所の御惱、快しくおはしますを悦び勵みて、

(律) 大日如來、虚言し給はずば、何とてか、かく拙僧が心を致して、奉仕る御修法に、効驗なきやうはあらむ、惡靈は執念きやうなれど、業障に纏はれたる、果敢なきものなり、と、聲は枯れて、怒り言ふ、いと聖だち、剛直しき律師にて、不圖く御息所に、

律師怪問大將事於御息所

(律) それよ、彼の大將は、何時より此方には、参り通ひ給ふと問ひ申す、御息所は、

(息) 然ることも候はず、彼の大將は、故權大納言と、いと善き交情にて、遺言頼み候ふ心違へじと、この年頃、然るべき事につけて、いと奇妙しくぞ、語合ひものし給ふも、かく我が振りはへ煩らふを、故意訪問にとて、立寄り給へりければ、辱く聞き候ひき、

と申し給ふ、律師は、

(律) いであな片輪よ、拙僧に隠匿さるべきことにもあらず、今朝後夜に詣で上りつるに、彼の西の妻戸より、いと美麗しき男の出で給へるを、霧深くて、拙僧はえ見別き奉らざりつるを、かの法師達ぞ、大將殿の出で給ふなりけり、昨夜も御車返して、宿り給ひける、と、口々に申しつる、實にいと香ばしき香の、薰り満ちて、頭痛きまでありつれば、實に大將なりけり、と、思ひ合せ候ひぬる、彼の君は、平生にいと香ばしく

女人の云々
○女人は地
獄の使なり

ものし給ふ人なり、此事いと大切にもあらぬことなり、彼の君は、いと有識にもものし給ひし時より、彼の君の御爲のことは、修法をぞ、彼の君の祖母君、故大宮の言ひ付けたりしかば、一向に然るべきこと、今に至るまで奉承る所なれど、實はいと益なし、本妻雲井、雁の御方、強氣くものし給ふ、彼の本妻は、あか時に逢へる族類にて、いと尊し、御子達は、もはや七八人になり給ひぬ、此方の皇女君落葉宮などは、とても彼の北方は、壓し給はじ、またさては後世に、女人の悪しき身を受け、長夜の闇に惑ふは、唯かやうの罪業によりてぞ、然るいみじき應報をも受くるものなる、本妻の御怒出で來なば、長き羈絆となりなむ、彼の大将の事、拙僧は、専承引かず、と頭振りて、唯言ひに言ひ放てば、御息所は、

(息)いと怪しきことなり、彼の大将は、更にさやうの氣色にも見え給はぬ人なり、我身、萬事心地の悩み惑ひにししかば、彼の大将には、さらば少し打休息みて、對面せむとてぞ、暫時立ち止まり給へると、こゝなる女房達の言ひしを、さやうにて大将の留まり給へるにやあらむ、彼の君は、大方眞實に、正直にもものし給ふ人なるを、

御息所自疑
大将事

と、おぼめき言ひながら、心の中には、然ることもありけむ、尋常ならぬ御氣色は、折々見ゆれど、彼の君の御様の、いと才々しく、強に人の誹謗あらむことは、省き捨て、端正しだち給へるに、容易く心許されぬ押立ちたることは、よもあらじ、と、打解け油斷したるに、宮の方、人寡にておはする様子を見て、這ひ入りもや爲給ひけむ、と、思す、律師起ちぬる後に、御息所

は、女房少將、君を召して、

(息) かゝる事をぞ聞きつる、如何なりし事ぞ、何とて己には、さぞありし、かくぞありし、とは、聞かせ給はざりける、よもや然やうにもあるまじ、とは、思ひながら、それとも眞事にや、いかに、

と言へば、少將、君、心に落葉宮には、いと御氣の毒と思ひけれども、有りし様を、最初より、委細しく申す、今朝の大將よりの御文の氣色、宮も微かに言はせつる様など、申して、さて心の中に、大將の年頃忍び渡り給ひける心の中を、申し知らせむとばかりにや候ひけむ、有り難く用意ありてぞ、夜を明かしも果てずして、出で給ひぬるを、人はいかに御息所へは申し候ひけるにかあらむ、と、少將、君は、律師の語りしとは思ひも寄らず、忍

びて人の申しけると思ふ、御息所は、物も言はで、いと憂く口惜しと思すに、涙ほろくくと翻れ給ひぬ、少將、君は、見奉るも、いとく御氣の毒に、何の爲に、我が有りの儘には申しつらむ、御息所の御病惱に、苦しき御心地を、彌々思し亂るらむ、と、後悔しく思ひ居たり、少將、君、

(少) さて大將の入りまし、折には、宮には、障子は鎖してぞおはせし、

など、萬事に宜しき様に、申し成せど、御息所は、

(息) とてもかくても、宮のあれ程に、何の用意もなく、平生の打解けたる様を、輕卒に人に見られ給ひけむこそ、いとみじけれ、内々には、御心潔白くおはすとも、あれ程までに言ひつる法師達、不良らぬ童などは、正に言ひ残してむや、世

御息所召落葉宮

人にはいかに言ひ辯争ひて、然もあらぬこと、言ふべきにかあらむ、惣て女房達の、心稚き限りしも、此所に伺候ひて、ともえ言ひ遣らず、いと病苦しげなる御心地に、物を思し驚きたれば、尙苦惱しさの打添ひたる御様にて、いとく御氣の毒げなり、御息所は、この落葉宮を、氣高く持て成し申さむと思したるに、世着かはしく、權大納言といひ、左大將といひ、方々輕々しき御名の、立ち給ひぬべきことを、一通ならず思し歎かる、御息所は、少將、君に、

(息) かく少し物覺ゆる間隙に、宮に此方へ渡らせ給ふべく申せよ、實は其方へ参り來へけれど、この病體にて、動くべくもあらでぞ、見奉らで、久しく成りぬる心地すよ、

と涙を泛けて言ふ、少將、君は、宮の御方へ参りて、宮に、唯、

(少) 御母御息所、かくぞ申させ給ふ、

とばかり申す、落葉宮は渡り給はむとて、御額髪の、涙に濡れ纏がれたるを、引き修ろひ、單の御衣の綻びたるを、着替へなとし給ひても、頓にもえ動き給はず、さて御心の中に、この少將なども、いかに思ふらむ、御息所のまた知り給はで、後に少許も此事聞き給ふことあらむに、我が無情くてありしよ、と、思し合せむも、いみじく耻かしければ、また打伏し給ひぬ、

(落) 心地のいみじく惱ましきかな、やがて此儘にて、直らぬ様にもなりなば、いと見善かりぬべくこそあれ、脚氣の上りたる心地すよ、

とて、女房に按摩せさせて、押下させ給ふ、宮は物をいと困しく、様々に思すには、氣ぞ逆上せけるなり、少將、君は、

(少) 御母御息所には、彼の御事を、微聞かし申しける人こそ候ふべけれ、御息所の、如何なりしことぞ、と、問はせ給へければ、有りの儘に申して、御障子の固鎖ばかりをぞ、少し言添へて、分明に申しつる、もし御息所の、さやうに微め申させ給はゞ、同じ様に、御答申させ給へ、と申す、されど御息所の歎き給へる氣色は申し出でず、落葉宮は、かくと聞召して、心にさればよ、と思ひて、いと詫しくて、物も言はぬ、御枕より、涙の雫ぞ落る、宮は御心に、この大將の事にはかりもあらず、故權大納言の事につけても、身の案外にも成り始めしより、いみじく母君に物をばかり思はせ奉ることよ、と、生けるかひなく、思ひ續け給ひて、この大將は、かくても已まで、とかく言ひ關係ひ出でむも、面倒しく、聞苦しか

るべく、萬事に思す、況して大將よりも、言ふかひなき下様の人の事によりて、浮名の立つこともあらば、如何なる名をか腐さまし、さればまた大將の事は、少し思ひ慰むる方はあれど、これほどまでになりぬる、皇女ともいはる、貴き人の、かくまで不意に、人に見ゆるやうはあらじかし、と、吾が宿世を憂く思し屈して、夕つ方ぞ、御息所の御方より、尙渡らせ給へ、と、御使あれば、已むなく、中間の塗籠の戸明け合せて、忍びて御息所の方へは渡り給へる、御息所は、病苦しき御心地にも、斜ならず畏まり傳き申し給ふ、病中ながらも、平生の御作法過たず、起き上り給ひて、

(息) いと亂りがはしく候へば、此方へ渡らせ給ふも、御氣の毒にぞ候ふ、この二日三日ばかり、見奉らざりける間の、長

き年月の心地するも、且はいと果敢なくぞ候ふ、親子は一世の契約と申せば、來世に必しも再對面の候ふべききにも候はざるめり、また再この世に生れ返りて、廻り参るとも、互にえ知らねば、かひやはあるべき、思へば唯、一時の間に隔たりぬべき世の中を、強に馴れ候ひけるも、却て後悔しきまでにぞ候ふ、

など泣き給ふ、宮も取り集め、物のみ悲しく思さるれば、申し給ふこともなくて、見奉り給ふ、御息所は、御心に、宮は物包みを甚く爲給ふ性質にて、際々しく言ひ騒ぐべきにもあらぬに、宮の耻かしとはかり思せば、いとく氣の毒にて、昨夜は如何なりし、なども、問ひ申し給はず、御燈臺など急ぎ参らせて、御膳など、此方にて進らせ給ふ、宮は物食召さずと聞き給ひて、御

息所はとかく手つかずから賄ひ直しなど爲給へど、宮は御箸觸れ給ふべくもあらず、唯御母御息所の、御心地の快しく見え給ふぞ、胸少し開き給ふ、大將より、また御文あり、心知らぬ女房、請取りて、

(女房) 大將殿より、少將君へ、と、御文あり、

といふにぞ、宮も、少將も、諸共に詫びしきよ、と思ふ、少將君、御文は取り收めつ、御息所、

(息) 如何なる御文にか、

とさすがに問ひ給ふ、御息所は、御病氣の故にもやあらむ、人知れず思し弱る御心に添ひて、心底には、却て大將を待ち申し給ひけるに、別に大將のおはさぬなるめり、と思すも、心騒ぎして、

(息) いでその御文は、尙御返事申し給へ、申さでは愛なし、人の御名を、善様に言ひ成す人は、難きものなり、心底に心潔白く思すとも、さやうにその心採用る人は寡くこそあらめ、御返事は、心美しきやうに申し通ひ給ひて、猶ありしまゝならむこそ善からめ、早く御返事なくては、人目却ていかゞあらむ、あまへたる様なるべし、

御息所見大將書

せくからに云々○我をせきとむるとも浮名の流るゝをせき止すば却

とて、大將よりの御文召寄す、少將、君は、困しけれど、奉りつ、御息所、開封きて見給へば、
 (夕文) 淺ましき御心の程を、見奉り顯はしてこそ、却てひたふるの負けじ心も着き候ひぬべけれ、せくからに、淺くぞ見えむ、山河の、流れての名を、包み果てずば、
 と、詞も多かれど、御息所も、残らず見も果て給はず、さて御

て淺く人の知るべき所詮末の名を包まむとならば心安の我に打解けよとなり

心に、この御文も、分明なる氣色にもあらず、目覺しげに心地善貌にして、大將には、今夜も無情くましまさぬを、いといみじと思す、故權大納言の御心様の、思はずにも淺くなりし時、いと憂しと思ひしがど、大方の持成は、また雙ふ人なかりしかば、此方につけては、力ある心地して、慰めしにさへ、世に心も進かざりしを、あないみじよ、大將の北方、雲井、雁の、思ひ言はむことを、と、思し染み給ふ、されど尙大將の、いかゞ言ふかと、今一度氣色をなりとも見むと、御息所は、心地の搔き亂り昏る様にし給ふ、さて御息所は、目を絞りて、怪しき鳥の跡のやうに、大將への御返事書き給ふ、
 (息文) この病惱に、頼もしげなくなりにて候ふ、見舞に姫宮の、参り給へる折にて、御返事勧誘し申せど、いと思し亂る

女郎花云々
○物思に屈
して人も訪
ひ來ぬ宮の
方へよくも
一夜とまり
給ひけむよ
となり河海
抄に秋の野
に狩ぞくれ
ぬる女郎花
一夜ばかり
の宿もかさ
なむとあり

夕霧大將至
三條殿

様にもものし給ふめれば、見煩ひ候ふてぞ、某代りて、女郎花、萎るゝ野邊を、いつこととて、一夜ばかりの、宿を借りけむ、
と唯書き中止て、押捻りて出し給ひて、臥し給ひぬるまゝに、いと甚く苦惱がり給ふ、御物怪の、まつ油断めさせて取り入るにやあらむ、と、女房ども言ひ騒ぐ、例の驗ある僧の限り、いと騒がしく祈禱り騒ぐ、落葉、宮をば、尙物怪の移れば、早く我が御方へ歸り渡らせ給ひね、と、女房ども申せど、宮は御身の憂きまに、この序にも、空しくならまほしく思して、母君に後れ申さじと思せば、つと御息所に添ひ給へり、夕霧大將には、この晝つ方より、北方雲井、雁のまします、三條殿におはしける、今夜立返り、小野の山莊に詣て給はむに、此方に、さも實事もあり

千重に○河
海抄に心に
は千重に思
へど人に言
はぬ我が戀
ふ妻を見む
よしもがな
とあり

雲井雁奪小
野返書

貌に思はれむも、未だに聞き苦しかるべし、など念じ給ひて、いと却て、年頃の待遠さよりも、千重に物思ひ重ねて、歎き給ふ、北方雲井、雁は、大將の、かゝる御微行の氣色微聞きて、心疾ましと聞き居給へるに、大將は、故意と知らぬ様にて、御子達翫弄び紛らはしつゝ、我が晝の御座所に臥し給へり、宵過ぐる程にぞ、小野よりの御返事持て参れるを、御書、かく例にもあらぬ鳥の跡のやうなれば、頓にも開封き給はで、御燈臺近く取り寄せて見給ふ、北方は、物隔てたるやうなれど、いと疾く見付け給ひて、這へ寄りて、御背後より此文取り給ひつゝ、大將は驚きて、

(夕) 淺ましく、こは如何に爲給ふぞ、あな怪しからぬ、六條の東上里の花散の御文なり、今朝風邪起りて、惱ましげにし給へる

を、我院の御前に伺候ひて出る間、またも東上へ詣てずなりぬれば、御氣の毒さに、今の間、いかにと訪ひ申したりつる、その御返事なり、見給へよ、懸想びたる文の様か、それにつけても凡人々々の御様よ、一體年月に添ひて、甚く我をば輕蔑り給ふこそ慨たけれ、我が思はむ所を遠慮り給はば、無下にかゝる事をば爲給ふなよ、

と打呻吟きて、彼の御文を惜しみ貌にも、引じろひ給はねば、北方は、さすがに、ふとも見ずして、持給へり、

(雲) 年月に添ふる輕蔑はしきは、却て君の御心習慣なるべかるめり、

とばかりにて、かく大將の端正しだち給へるに憚りて、若やかに美しき様して、言へば、大將打笑ひて、

鷹は小鷹○
鷹は小は雄
鷹にて大は
雌鷹なり雌
鳥は奢り雄
鳥は病めり
といふこと
あり自分を
雄鷹北方を
雌鷹にたと
へたるなり
翁の某○古
き物語にあ
りしことな
るべけれど
その物語今
傳はらず竹
取翁或は韓

(夕) それは、ともかくもあれ、普通に、誰も言ふことなり、我が如きものは、等類あらじかし、大人しくなりぬる男の、かく他に迷ふ方なく、本妻一人を守らへて、嫉妬畏したる、恰も鷹の小鷹のやうなるは、いかに世人笑ふらむ、然る頑固しき我身に守られ給ふは、其方の御爲にも、たけきことにはあらじよ、數多が中に、猶分際勝りて、特別なる差別見えたるこそ、餘所よりの勢望も、奥ゆかしく、我が心地にも、尙經り難く、新しき心地して、面白きことも、哀なる筋も、絶えざらめ、かく我身の如く、翁の某守りけむやうに、癡れ惑ひたれば、いとぞ口惜しき、何處の光榮かあらむ、

とさすがに、此文の氣色を見せず、誘り取らむの心にて、欺き申し給へば、北方は、いと匂ひやかに、打笑ひて、

詩外傳の守
株伺兔の故
事を引く説
あれど當ら
ず

豫てより○
細流抄にか
れてよりつ
らさを人に
ならはさで
俄に物を思
はするかな
とあり

六位の袖○
大輔の乳母
が六位を過
ぐせと大將
を輕蔑せし
こと乙女帖
にあり

（雲）物の榮えくしき、作り出で給ふ程、年経りぬる此身は、
困しよ、更に新しき人出で来て、君のいと當世めかしくなり
變れる御氣色の、不用じさも、我は見習はずなりにけること
なれば、いとぞ苦しき、豫てより習はし給はで、
と託怨ち給ふも、憎くもあらず、大將は、

（夕）俄にと思す程には、何事か新しき人も見ゆらむ、いとう
たてある御心の隈なきことかな、これには必善からぬ物申し
知らする人ぞあるべき、彼の大輔乳母など、怪しく、元來我
をば許さぬぞかし、尙彼の六位の袖の名殘、輕蔑はしきに託
けて、其方と我との間を、隔て待遇し奉らむ、と思ふやうある
にやあらむ、色々聞きにくき事ども、微聞くめり、あいなき
一條宮の人達の御爲にも、いと氣の毒にぞある、

胸走り○河
海抄に人に
逢はむ月の
なき夜は思
ひおきて胸
走り火に心
やけけりと
あり

など言へど、終にかゝる嫉妬あるべきこと、思せば、別段に論
争はず、北方は、大將の、大輔乳母、いと困し、と言ひしを聞
きて、物も申さず、とかく言ひじろひて、彼の御文は、引き匿
したまひつれば、大將は、追めても取り取らず、無情く一人一
人に御寝りぬれば、大將は胸走りて、いかで彼の御文取りてし
がな、と、思へど、よし落葉宮の方にはあらで、御息所の方の御
文なるめり、そもまた何事ありつらむ、と、思へば、目も合はず、
思ひ臥し給へり、北方の寝給へるに、大將は昨夜の御座の下な
ど、然りげなく探り給へど無し、隠匿し給へらむ間の所もなけ
れば、いと心病ましくて、明けぬれど、頓にも起き給はず、北
方は、御子達に驚かされて、起きて膝行り出で給ふにぞ、大將
も今起き給ふやうにして、萬事に窺ひ給へど、え見付け給はず、

北方は、大將のかく求めむとも思ひ給はぬをぞ、實に懸想なき御文なりけり、と、心にも入れねば、御子達の忙で遊び、雛作り居ゑて遊び給ふ、または書讀み手習などして、様々に、いと惚忙しく、小き乳兒這ひ懸り、引きじろへば、北方は取りし文の事も、思ひ出で給はず、大將は、他事も覚え給はず、小野に早く御返事申してむ、と、思すに、昨夜の御文の様も、え慥に見ずなりにしかば、折角の御文見ぬ様ならむも、先方には我が散らしてげる、と、推量り給ふべし、など、思ひ亂れ給ふ、誰もく御膳参りなどして、長閑になりぬる晝つ方、大將は思ひ煩ひて、北方雲井雁に、

(夕) 昨夜の御文は、何事か有りし、怪しう見せ給はで、困しく候ふ、今日も東上里花散をば、訪問ひ申すべし、我は惱まし

くて、六條院にもえ参るまじければ、東上へは、文をこそ奉らめ、先方の御文、何事かありけむ、

と言ふ氣色、いと然りげなければ、北方は、心に、文は愚癡がましくも奪取てげり、と、不用じく、その事をば更に心に懸け給はず、

(雲) その惱ましきは、一夜の深山風を、引き過ち給へるなるなり、と、面白きやうに、彼方へ託ち申し給へかし、

と申し給ふ、大將は、

(夕) いでこの辟言な、常に言ひそ、何の面白きやうかある、我をば世の好色人に擬へ給ふこそ、却て耻かしけれ、こゝに侍ふ女房達も、且は怪しき我が實直様を、其方のかくは仇めき言ふことゝ、含笑むらむものを、

と戯言に、言ひ成して、

(又) その文よ、何處にやある、

と言へど、北方は、頓にも引き出し給はぬ間に、大將は、尙物語など申して、暫時臥し給へる間に、日暮れにけり、蜩の聲に目覺めて、彼の山莊の、山の陰、いかに霧り塞がりぬらむ、淺ましや、今日彼の御文の、御返事をなりとも爲さることよ、といと氣の毒にて、唯知らず貌に、硯打磨りて、彼の御文を、如何に爲してしことにか執成して、御返事は書かむ、と、詠めおはする御座の奥の、少し上りたる所を、試に引き上げ給へれば、御文は、北方の、これに挟み給へるなりけり、と、嬉しくも、また愚癡がましくも覺ゆるに、打笑みて見給ふに、御文には、かく實に御氣の毒なることぞありける、大將は胸潰れて、御息所に

は、彼の一夜の事を、心ありて聞き給ひけるよ、と、思すに、いと御氣の毒に、心苦しく、御息所や、落葉宮には、昨夜さへ、如何に思ひ明かし給ひけむ、況して今まで文をさへ参らせざることよ、と、言はむ方なく覺ゆ、御息所の御文の、いと困しげに、言ふかひなく書き紛らはし給へる様にて、一通に思ひ餘りての事にはあらで、かく書き給ひつらむ、我を待ち給ふにも、参らねば無情くて、今夜の明けつらむ、と、言はむ方のなければ、北方雲井雁ぞ、いと辛く心憂き、不意に彼の御文をば、戯れ匿して、いでやこれも、北方を我意に抛任せし我が習慣しの悪きぞや、と、様々に思へば、身も辛く、凡て泣きぬべき心地し給ふ、かくて大將は、やがて小野の山莊へ出で立ち給はむとするを、さて参りても、落葉宮の、心易く對面も爲給はざらむものながら、

夕霧大將消
息小野山莊

坎日○花鳥
餘情に九坎
日不可出行
云々凡諸事
憚之日也と
あり

善からむ事
○瞬花抄に
いかにして
いかによか
らむをの山
の上より落
つる音無の
瀧さあり

秋の野の云
々○小野な
る宮の方へ
は分け入り
しがど枕は
結び交さず
となり

移鞍○此は

御息所も、かく許し方に言ふは、如何ならむ、今日は坎日にも
ありけるを、もし邂逅に思ひ許し給はば、尙善からむ事をこそ
見め、と、直行しき心になりて、まづこの御返事を申し給ふ、

(夕文) いと珍らしき御文を、方々嬉しく見奉るに、かの一夜
の御咎をぞ、其方は如何に聞召したることに候はむ、秋

の野の、草の茂みは、分けしがど、假寝の枕、結びやはせし、
辨明め申すも、無用れど、昨夜の罪科せ給ふは、事の様を、

能く尋ね給はで、唯一向に押籠めて、罪に成し給ふにや候は
む、

とあり、落葉、宮の方へは、御文の詞、いと多く申し給ひて、宮
の御方に、足駿き御馬に移鞍を置きて、例の一夜の右近大夫を
ぞ、御使に出し遣り給ふ、さて大將は、大夫に、

(夕) 我は昨夜より、六條院に伺候ひて、唯今ぞ退出でつる、と
先方へは言へ、

とて、尙言ふべき様を、私語き教へ給ふ、

隨身の乗馬
に用ゐる鞍
にて近衛大
將は隨身を
召使ふ故な
り

小野にては、御息所、昨夜も大將の御出なく、無情く見え給ひ
し御氣色を、忍びあへずして、後の外聞をも包みあへず、文し

て恨み申し給ひしを、その御返事さへ見えずして、今日の暮れ
果てぬるを、大將の、いかばかりの御心にかはあらむ、と、殊の

外に、淺ましく、心も摧けて、一時快しかりつる御心地、また
いと甚く悩み給ふ、然るに落葉、宮は、御心の中には、却て大將

の参り給はぬを、別段に憂しとも思し驚くべきこともなければど、
唯思ひも寄らぬ大將に、打解けたりし平生の有様を、見られし
ことばかりこそ、口惜しけれ、さてかく大將の音信なきは、い

としも御心に思し染まぬを、母御息所の、かくいみじく思したるを、浅ましくて、一夜の實事ありつると思されむことの、耻かしく、斷念め申し給ふ方なくて、例よりも、別けて物耻し給へる氣色、見え給ふを、御息所は、心に、いと氣の毒に、宮の物をのみ思し添ふべかりけるよ、と、見奉るも、胸のつと塞がりて、悲しければ、宮に、

(息) かくなりては、今更に面直しき事をば申さじ、と、思へど、猶御宿因とは言ひながら、一夜の事、意外に心稚くて、世人の誹謗を負ひ給ふべきことを、今更取り返すべきことにはあらねど、以後は、尙然るべき心し給へ、我數ならぬ身ながらも、其方をば、萬事に養育み申しつるを、今は何事をも思し知り、世の中の、右様、左様の有様をも、思し尋取りぬべき

程に、見奉り置きつること、好色方様の事は、後安くこそ見奉りつれ、然るを、此度の事につけては、尙いと幼稚く、強き御心掟のなかりけることよ、と、思ひ亂れ候ふに、今暫時、我が命も留めまほしくぞある、臣籍人にてさへ、少し上等しく成りぬる女の、夫二人と見る例は、心憂く、疎忽き業なるを、況してかゝる皇女の御身には、さやうにはかり一通にては、男の近つき申すべきにもあらぬを、彼の故權大納言を婿に取りたるさへ、思の外に心にも着かぬ御有様と、年頃も見奉り惱みしがど、これも然るべき前世の御宿世にこそはあれ、と、父の院院朱雀より始め奉りて、思し従ひ、彼の父致仕大臣にも、強ひて請ひ申し給ふべき御氣色ありしに、己は進み申さざりしが、さて獨心を立て、遮り申すも、いかゞはと思ひ弱り候

大空を○河
海抄に身の
うきを世の
ながむれば
いかに大空
くるしがる
らむとあり

○夕霧

ひしことなれど、その權大納言にも後れ給ひて、末の世まで、如何しき御有様なるを、もとく父の院の定め給ひしことにて、我が過失ならぬに、大空を託怨ちて見奉り過ぐすを、いとかく大將の爲、御身の爲、萬事に聞悪くかりぬべきことの出て來添ひぬべきが、本意なきことよ、それにつけても、大將の、餘所の御名立たむをば、知らぬ貌として、その通ひたまふ御懇情、尋常の御有様にてさへあらば、自然有り經むにつけても、慰むこともやあらむと、思ひ候ふを、その後、御來駕もなく、御返事さへあらで、此上なく情なき御心にも候ひけるかな、

とて、つぶくと泣き給ふ、落葉宮は、母君の、いとわりなく、實事の有無をも押籠めて言ふを、辨争ひ霽さむ言の葉もなく、唯

御息所逝去

打泣き給へる様、大様に可愛げなり、御息所は、打諦視つゝ、(息) あはれ何事かは、世人に劣り給へる、如何なる御宿因にて、安からず、物を深く思すべき宿契、深かりけむ、など言ふまゝに、いみじく苦惱しく爲給ふ、物怪なども、かゝる弱目に所得るものなりければ、御息所は、俄に消え入りて、御身體は、唯冷に冷え入り給ふ、律師も騒ぎ立ち舞ふて、願など立て騒ぐ、この律師、深き誓にて、一生出でまじ、と命を限りける山籠を、かくまで一通ならず出で立ちて、祈禱り參らせし功能もなく、今は修法の壇毀ちて、さて山に歸り入らむことの、面目なく、佛も無情く覺ゆべきことなれば、心を起して、必死と祈禱り申す、落葉宮の、泣き惑ひ給ふこと、いと道理なり、かく騒ぐ間に、女房ども、大將殿より御文參りぬ、とて、取り入れ

○夕霧

落葉宮哀哭

たるに、御息所消え入りながらも、微かに聞き付け給ひて、今宵もおはすまじきなるめり、と、打聴き給ふ、心憂く世の例にも引かれ給ふべきなるめり、何の爲に我さへ、大將に對ひて、然る言の葉を残りしけむ、と、様々思し出るに、やがて絶え入り給ひぬ、張合なく、いみじといふも愚なり、さて御息所は、昔より物怪には、時々煩ひ給ひて、今は限りと見ゆる折々もあれば、全く例の如く、物怪の取り入れたるなるめりとして、律師ども加持参り騒げど、終焉の様は、著かりけり、宮は我も母君に後れじと思し入りて、つと添ひ伏し給へり、女房達参りて、

(女房) 御息所、かく成り果て給ひては、今は言ふかひなし、いとかく思すとも、限りある黄途には、もはや此世に歸りおはすべきことにもあらず、御跡を慕ひ申し給ふとも、いかでか

朱雀院吊問落葉宮

御母君の御命、君の御心のまゝに叶ふべき、と、事経りたる道理、今更なるやうに申して、

(又) いと忌々し、叶はぬことを歎き給ふは、亡き御爲にも、罪業深き業なり、今は御側去らせ給へ、

とて、引き動し奉れど、宮は縮みたるやうにて、物も覺え給はず、修法の壇毀ちて、加持の僧ども、ほろ／＼と出るに、然るべき籠り残る限りの僧どもは、半分こそ立留まれ、今は限りの様、いと悲しく心細し、何時の間に聞え渡りてか、所々の御吊問申し参る、夕霧、大將も、限りなく聞き驚き給ひて、まづ御吊問申し給へり、六條院よりも、致仕、大臣よりも、凡ていと繁く申し給ふ、山、院朱雀法皇も、聞召して、いと哀に、御文書き給へり、皇女落葉宮は、この御消息にて、始めて御頭擡げ給ふ、

(朱文) 御息所には、日頃重く惱み給ふと聞き渡りつれど、これ迄も危篤しくばかり聞き候ひつる習慣に、打撓みてぞ、訪問の消息も怠り申し、御息所の、今はかひなき命數の程をばそれとしても、其方の思ひ歎き給ふらむ有様、推量るぞ、哀に氣の毒なる、今は思し歎くとも、かひなければ、總ての世の道理に思し慰め給へ、

とあり、宮は御涙に、目も見え給はねど、御返事申し給ふ、さて御息所は、平生の御遺言に、我卒りなば、亡骸は、久しく残し置くべからず、とありければ、やがて埋葬め奉るとて、御息所の御甥の、大和守にてありける人ぞ、萬事に扱ひ申しける、宮は、遺骸をなりとも、暫時見奉らむとて、惜しみ申し給ひけれど、さてもかひあるべきならねば、皆急ぎ立ちて、御葬送申す

間にぞ、大將殿、御吊問におはしたる、

夕霧大將は、三條殿にて、北方などには、

(夕) 外に出るには、今日より後の日は、序あしかりけり、など言ひて、小野の山莊にては、落葉宮の、いとも悲しく、哀に思し歎くらむことを、推量り申し給ひて、人々は、

(人々) 人の御不幸に、かくも急ぎ渡り給ふべきことならず、と諫め申せど、強ひて小野へおはしましぬ、大將は、御心の急かる、まゝに、路の程さへ遠くて、入り給ふ間、いと心凄し、山亭にては、穢氣をば忌々しげに引き隔て、物など廻らしたる儀式の方は隠して、この西面に入れ奉る、大和守出て来て、泣く泣く畏まり申す、大將は、妻戸の簀子に押懸り給ひて、女房呼び出でさせ給ふに、女房ども、ある限り、心も治まらず、誰も

誰も正體なく、物覺えぬ間なり、大將のかく渡り給へるにぞ、少許心慰めて、少將、君は參る、大將は物もえ言ひ遣らず、一體涙脆におはせぬ心強さなれど、所の様、人の氣容などを思し遣るも、いみじくて、常なき世の有様の、他人の上ならぬ、誰が身にも遁れぬことの、いと悲しきなりけり、稍暫猶豫ひて、

(夕) 御息所には、快しく平癒り給ふ様に、承りしかば、御訪問も思ひ撓みたりし間に、夢の覺むる間よりも、果敢なかる御壽命の程、いと淺ましくぞ候ふ、

と申し給へり、落葉、宮は、母御息所の、思し入りたりし様、多くは大將の御事に、御心も亂れにしぞかし、と、思すに、生死は然るべく定まりたること、は言ひながらも、いとく無情き人の御宿契なれば、御返答をさへ爲たまはず、近侍ふ女房達は、

少將、君を始めとして、宮に、

(少) 宮には、いかに御返答申させ給ふとか、大將殿へ申し候ふべき、いと軽らかならぬ御様に、かく故意、急ぎ渡らせ給へる御心ばえを、思し別かぬやうならむも、餘りに御氣の毒に候ひぬべし、

と、口々に申せば、宮は、

(落) 唯推量りて、然るべく申せ、我は言ふべきことも覺えず、とて、伏し給へるも、道理にて、少將、君は、大將に、

(少) 宮には、只今は亡人と異ならぬ御有様に、御返答も親しく申し候はぬ、君の渡らせ給へる由は、宮に申し候ひぬ、と申す、この女房達も、涙に咽せ返る様なれば、大將は、
(夕) 餘りの御愁傷に、申し遣るべき方もなきを、今少し自分

も思ひ長閑めて、また宮の御心も鎮まり給ひなむ頃に、参り
 來む、それにつけても、御息所には、如何にして、かく俄に
 は成らせ給ひしぞ、その御有様ぞ、承はらまほしき、
 と言へば、少將、君は正面にはあらねど、御息所の、彼の一夜の事
 を思し歎きし有様を、片端づ、申して、

(少) 君をば、託怨ち申さする様にぞなり候ひぬ、今日は、い
 と、亂りがはしき心地どもの惑ひに、申し違ふる事ども候ひ
 なむ、さらば宮のかく思し惑へる御心地も、限りあるべけれ
 ば、少し鎮靜らせ給ひなむ程に、申させ承はらむ、
 とて、少將、君の、我にもあらぬ様なれば、大將は言ひ出ることに、
 口塞がりて、

(夕) 實にこそ闇に惑へる心地すれ、尙宮をば申し慰め給ひて、

少許の御返事もあらば、嬉しからむ、
 など言ひ置きて、立ち煩ひ給ふも軽々しく、御葬式に、さすが
 に人騒がしければ、歸り給ひぬ、さて大將は、今夜しも御葬式
 はあらじ、と、思ひつるに、御葬事の有様、いと簡略に分際々々
 しきを、心に、いと張合なしと思して、近き我が御領の、御庄
 の人々召し課せて、然るべき事ども奉仕るべく、掟て定めて、
 出で給ひぬ、事の俄なれば、省略やうなりつる事どもを、大將
 助け成して、嚴重めしく御葬送の人数なども添ひてぞ、大和守
 も、世に有難き大將の御心掟など、喜び畏まり申す、落葉宮は
 今にはや母君の名残さへなく、淺ましき事よ、と、慟哭つゝ、伏
 し轉び給へど、かひなし、かく宮のいみじき愁歎を見奉れば、た
 とひ親と申すとも、いとかく親しくは習はずまじきものなりけ

り、かく見奉る女房達ども、この宮の御事を、また忌々しく長
歎き申す、大和守、残りの事ども整理めて、宮に、

(大) かく心細くては、此所には得おはしまさじ、いとゞ母君
の御事を思し忘るゝ隙あらじ、されば京に歸り給ひては、い
かに、

など申せど、宮は御心に、尙峯の烟をなりとも、氣近く見て、亡
き母君を思ひ出で申さむ、とて、此山莊に住み果てなむと思した
り、御忌に籠れる僧は、東面の、其方の渡殿、下舎などに、果
敢なき隔障しつゝ、微かに居たり、宮は西の廂を窺して、倚廬の
様にしておはします、夜の明け、日の暮るゝも、思し分かねど、
日頃経ければ、九月になりぬ、山嵐いと烈しく、木の葉の隠れ
なく落ち散りて、萬の事、いとみじく悲しき頃なれば、宮は

倚廬○喪舎
なり

命さへ○河
海抄に命さ
へ心に叶ふ
ものならば
死には易く
ぞあるべか
りけるとあ
り
大將屢慰
問小野宮

大方の空に催されて、涙の乾る間もなく、思し愁歎きて、亡母
の御後慕ひ給へど、命さへ心に叶はず、厭はしくいみじく思す、
伺候ふ女房達も、萬事に物哀しく思ひ惑へり、大將は日々に御
文して、訪問ひ申し給ふ、寂しげなる念佛の僧などを始めとし
て、慰むばかり萬の物を遣し吊問はせ給ひ、宮の御前には、愛憐
に心深き言の葉を盡して、恨み申し、且は盡きもせぬ御訪問を
申し給へど、落葉、宮は、その御文、手に取りてさへも御覽せず、
不意に淺ましき、彼の一夜の事を、御息所には、御病氣に弱れ
る御心地に、實事ありしと、疑なく思し染みて、消え失せ給ひ
にしことを、思し出るに、冥途の御罪障にさへやなるらむ、と
胸に滿つ心地して、この大將の御事をさへ、懸けて聞きたまふ
はいとゞ辛く、心憂き涙の催しに思さる、されば大將の御文の

事につけては、女房達も申し煩ひぬ、かくて大將は、心に、宮の一行の御返事さへなきを、初の間は、宮の暫時心惑の爲給へるならむ、など、思しけるに、餘りに程經ぬれば、悲哀しき事も限りあるを、我が心の程を、などか、かく餘りに見知り給はずはあるべき、言ふかひなく、若々しきやうにぞある、と、恨めしく思ひて、さて御文も、他事の筋に、花や蝶や、と、表面の風流ばかりに書けばこそ、御返事なきこともあらめ、我が心に、哀と思ひ物歎かしき方様の事を、如何にと問ふ人は、睦しく愛憐にこそ覺ゆれ、昔我が祖母大宮の母の、逝去給へりしを、いと悲しと切に思ひしに、致仕大臣大宮の嫡子の、さやうにも思ひ給へらず、道理の世の死別に、公々しき作法ばかりの事を、孝じ給ひしに、無情く氣に喰はざりしに、六條院の、却て懇切に、死後の御法事

あはれをも
云々○有る
やは落葉宮
を無きやは

をも營み給ひにしが、院は吾が方様といふ中にも、嬉しく見奉りし、その折に、故柏木右衛門督權大納言をば、取別きて親しく思ひつきにしぞかし、人柄の甚く沈着りて、物を甚く思ひ留めたりし心に、愛情も勝りて、大宮逝去の折には、我と悲哀を同うして、他人より深かりし心の程ぞ、懐かしく覺えし、など、徒然と物をばかり思し續けて、明かし暮し給ふ、北方雲井雁は、心中に、大將と落葉宮との御中の氣色を、如何なるにかありけむ、御息所とこそ文通はしも、巨細に爲給ふめりしか、など、思ひ得難く覺えければ、大將の、夕暮の空を詠め入りて、横臥給へる所に、若君して、御消息奉り給へる、果敢なき紙の端に、
(雲歌) あはれをも、如何に知りてか、慰めむ、有るや戀しき、無きや悲しき、覺束なきこそ、心憂けれ、

御息所をさしていつ方を慕ひて慰め給ふぞとなり

いつれとか云々○露も消えて草葉の上に留まらぬはかなき世を何れと別けて詠めむとなり

大將重訪
小野山莊

とあれば、大將含笑みて、心に、我は落葉、宮ばかりにて、御息所の事は思はぬに、様々にかく思ひ寄りて言ふ、似げなき擬へ言よ、と思す、さて御返事、いと疾く、何も事なしぶりに見せて、(夕歌) いづれとか、別きて詠めむ、消え返る、露も草葉の上と見ぬ世を、大方にこそ、悲しけれ、と書き給へり、北方は、心に、大將の、尚かく我に隔て、有のまゝに言はぬことよ、と、露の哀をば差置きて、一通ならず歎きつゝおはす、

大將は、小野の山莊、尚かく覺束なく思し詫びて、また渡り給へり、實は御息所の御忌など過ぐして、長閑に渡らむと思し鎮めけれど、さやうにしも堪忍び果つまじくて、今は落葉、宮との、この御虚名の、何かは強にも包まむ、唯一向に契を籠てこそ、終

峯の葛葉○孟津抄に風はやみ峯の葛葉のともすればあやかりやすき君が心かとあり

の思は叶ふべきなれ、と思し立ちにければ、北方雲井、雁の御想像を、強ても辯争ひ申し給はず、本人落葉、宮は、我に強く思し離るとも、彼の一夜ばかりの、御息所の御許可の文を、捉へ所にして、託怨ち寄らむに、宮の我と共に立ち給へる浮名は、得も雪ぎ果て給はじ、と思ひ定めて、出で立ち給ふ、いと頼もしかりけり、九月十餘日、野山の景色は深く、何事も見知らぬ人さへ、尋常には感えざるべし、山風に堪へぬ木々の梢も、峯の葛葉も、心惚忙しく争ひ散る紛れに、尊き續經の聲微かに、念佛などの聲ばかりして、人の氣容いと少く、木枯の吹き拂ひたるに、鹿は唯籬の下に立住みつゝ、山田の引板にも驚かず、色濃き黄稻どもの中に交りて打鳴くも、我が心から愁貌なり、瀧の聲は、いとゞ物思ふ人を驚かし貌に、耳喧ましく轟き響く、叢

裡の虫ばかりぞ、寄り所なげに鳴き弱りて、枯れたる草の下より、龍膽の、我獨ばかり心長く這ひ出で、露けく見ゆるなど、皆例の此頃の風物なれど、折からにやあらむ、所からにやあらむ、いと堪へ難き程の物哀さなり、大將は、例の妻戸の下に立寄り給ひて、やがて詠め出して立ち給へり、懐かしき程の直衣に、色濃き紅の御衣の打目、いと清らに透きて、影弱りたる夕日の、さすがに何心もなく射し来る、目眩げに故意となく扇を差隠し給へる手つき、女こそかくはあらまほしけれ、その女さへ、かくはあらぬ御風情を、と、女房達は見奉る、物思の慰めに爲つべく見れば、笑ましき大將の顔の風韵にて、大將は取別きて彼の少將、君を召し寄す、大將の居給ふ簀子と、少將の居る所と、間もなければ、奥に人やあらむと、後めたくて、え委細

にも語らひ給はず、少將、君に、

(夕) 尙近く寄りてよ語らひ給へ、我をば差し放ち給ふな、かく山深く分け入る志は、其方も能く見知りて、隔心あるまじきことぞ、霧もいと深しよ、目眩くもあらじ、

とて、故意と御簾の内をば、見入れぬ様に、山の方を詠めて、

(又) 尙参り寄れよ、尙よ、

と切に言へば、少將、君は、鈍色の几帳を、簾の端より、少し押出で、裾を引き側めつゝ居たり、この少將、君は、大和守の妹にて、御息所の姪なれば、かく御息所に離れ奉らぬ内に、幼少くより、養育てられければ、喪服の色も、いと濃くて、椽色の喪絹一重、小袿着たり、大將は、

(夕) かく御息所の、盡せぬ哀傷はそれとしても、宮の申さむ

見る人毎に
○瞬花抄に
忍ぶれと色
に出てにけ
り我戀は物
や思ふと人
の間ふまで
とあり

○夕霧

方なき御心の、無情さを思ひ添ふるに、心魂もあくがれ果て
て、見る人毎に咎められ候へば、今は更に忍ぶべき方なし、
といと多く恨み續け給ふ、また彼の御息所の、最終の御文言ひ
出で、いみじく泣き給ふ、この少將、君も、況していみじく泣き
入りつゝ、

(少) その御文ありし夜の、君の御返事さへ、見え候はずなり
にしを、御息所には、今は限りの御心に、やがて思し入りて、昏
くなりし程の、空の景色に、御心地惑ひにけるを、然る弱
目に、例の物怪の、引き入れ奉るとぞ見候ひし、過ぎにし右
衛門督殿の、逝去りし折にも、御息所は、殆御心惑ひぬべか
りし折々多く候ひしを、宮の同様に泣き沈み給ひしを、母御
息所は慰めこしらへ申さむの御心強さにぞ、漸く物覚え給ひ

し、然るに此度、かく卒去れ給ひし御歎きをば、宮には、唯
我彼の御氣色にて、呆れて御涙にばかり暮らさせ給へば、御
自身よりは、御返事も申さじ
など、長閑め難げに、打歎きつゝ、確乎しくもあらず申す、大
將は、

(夕) それよ、宮のさやうにばかり歎き給ふも、餘りに少女め
かしく、言ふかひなき御心なり、今は畏多くとも、宮には誰
をかは寄邊に思ひ申し給はむ、御父院の御山住も、いと深き
峯に世間を思し絶えたる、雲の詠めなるめれば、宮の申し通
ひ給はむこと難し、いとかく宮の、我に無情き御氣色を、其
方より申し知らせ給へ、萬の事、凡て前世の宿因にこそあれ、
宮はたとひ、世に有り經じ、と、思すとも、御心に従はぬ世な

○夕霧

りけり、もしも御心に叶ふ世ならば、まづは母君の御別れあ
るべきことかは、

など、萬事に多く言へど、少將君は、宮に申すべき心もなく、
打歎き居たり、大將は、鹿のいと甚く鳴くを聞き給ひて、泣く
には我劣らめや、とて、

(夕歌) 里遠み、小野の篠原、分けて来て、我も志かこそ、聲
も惜まね、

と言へば、少將君、
(少歌) 藤衣、露けき秋の、山人は、鹿の鳴く音に、ねをぞ添
へける、

と申す、善からねど、折からに忍びやかなる少將の聲遣ひなど
を、大將は、可しく聴き成し給へり、かくて大將は、落葉、宮に

我劣らめや
○細流抄に
秋なれば山
どよむまで
鳴く鹿に我
劣らめや獨
ぬる夜はと
あり
里遠み云々
○我もわざ
とて来て鹿と
同様になく
となりまか
はさやうに
といふに鹿

御消息、とかく申し給へど、宮は、

(落) 今はかく淺ましき夢の世を、少しも思ひ覺ます折あらば
ぞ、絶えぬ御吊問の御禮も、申し遣るべき、

とばかり、剛直に、少將君して言はせ給ふ、大將は、いみじく
言ふかひなき宮の御心なりけり、と、長歎きつゝ、還り給ふ、途す
がらも、哀なる空を詠めて、十三夜の月、いと花やかに差出で

ぬれば、小暗山も運歩るまじく、還りおはするに、落葉、宮の御
本邸なる、一條、宮は、途なりけり、いと、打荒れて、坤の方の、

土塀の崩れたるより見入るれば、杳々と御格子下し籠めて、人
影も見えず、月影ばかり、遣水の面を顯はに澄み成したるに、故
柏木大納言の、此所に樂遊などし給ひし折々を、思ひ出でたま

ふ、

なかけたり
藤衣云々○
裏中涙にく
れ居る吾々
は鹿の鳴く
音に尙添ひ
て泣かる、
となり
小暗山○河
海抄に秋の
夜の月の光
の清ければ
暗部の山も
越えぬべら
なりとあり
暗部山を小
暗山に取り
成したるな

見し人の云々○もとの權大納言も住まぬに月のみ獨すめるとなり後撰集になき人の影さへ見えぬ遺水の底に涙を流してぞ來しとあり

大將歸三條殿

夜よの月つき、
見し人の、影かげすみ果てぬ、池いけの水みづに、獨宿ひとりやどもる、秋あきの
（夕歌） 見し人の、影すみ果てぬ、池の水に、獨宿もる、秋の
と獨言ひとりごとちつ、我が里第さとの、三條殿におはしても、月つきを見つ、
心こころは空そらにあくがれ給へり、殿とのの古女房ふるにやうだち達は、大將たいしやうの、然さも見苦みぐる
しく、以前いぜんにあらざりし、近來ちかごろの御癖おんくせかな、と、憎にくみ合あへり、本もと
臺雲井のうかた雁かりは、眞實まめやかに、心憂こころうく、いよく、彼の落葉宮かに、あくが
れ立ちぬる、大將たいしやうの御心おんこころなるめり、元來もとより妃妾おまひびと、數多あまた有りつけた
る方かたに習慣なつちひ給へる六條院むつじやういんの、その妃妾おまひびとの御交情おんかじやう平穩なだらかなるを、
大將たいしやうは、ともすれば愛め甚たき例たとへに引き出いでつ、我われをば愉快こころよから
ず愛あいだてなきものに思おもひ給へる、いとわりなしや、我われも昔むかしより
妃妾おまひびと、數多あまたある中に、習慣なつちひなましかば、人目ひとめも馴なれて、却かへりて
平穩なだらかに過すぐしてまし、これまでは、此身このみと大將たいしやうとの間まを、思おもふ

いつとかは云々○前に落葉宮の夢の世を少し

ことなき御交情おんかじやうと、世人ひとは言いひしを、近來ちかごろの大將たいしやうの御様子おんやうすにつ
けては、世よの例たとへにも爲しべき御心おんこころはえなり、と、親兄弟おやへらより始はじめ
て、此迄こゝまで見善みよきあやかりものに爲し給へるを、かく現世このよにありあ
りて、末すえに耻はぢがましきことやあらむ、など、雲井雁うゑいかりは、いと甚いたく
歎なげき給へり、夜よも明け方がた近く、男君おとぎみも女君くものかりも、互かたみに打解うちとけ給ふ
ことなくてぞ、一所ひととどころに臥ふしながら、背向そむきくくに、歎なげき明あかして、
朝霧あさぎりの晴間はれまを待またず、大將たいしやうは例たとへの落葉宮おちばへの御文おんふみをぞ、急いそぎ書か
き給ふ、雲井雁うゑいかりは、氣きに喰くはずと思おもへど、以前いぜんやうにも奪うばひ給
はず、大將たいしやうは、いと詳細こまやかに書かきて、打置うちおきて打嘯うちうらき給ふ、忍しのび
て打誦うちうたし給へど、漏もりて、北きた方かたには聞きき付けらる、その歌うたは、
（夕歌） いつとかは、驚おどろかすべき、明けぬ夜よの、夢ゆめさめてとか、
いひし一言ひとこと、上うへより落おつる、

も思ひ覺ま
す折あらば
といふを受
けてその約
束の一言は
いつと定め
て待ち見る
べきぞとて
驚かすは夢
をさますこ
とをいふ
上より落つ
る○小野山
の上より落
つる音無の
瀧の歌前に
擧げたり

とや末に書き給へらむ、大將は、やがて表紙に押包みて餘波も
いかで善からむ、など、口吟み給へり、人召して、小野へ持て參
れとて、この御文賜ひつ、雲井、雁は、落葉、宮の、この御返事な
りとも見付けてしがな、尙如何なる事ぞ、と、氣色見まほしく思
す、日高けてぞ小野より御返事持て參れる、紫の精細なる紙に、
剛直にて、少將、君ぞ、例の申し越したる、唯前と同じ様に、か
ひなき由を書きて、御氣の毒さに、彼のありつる大將の御文に、
落葉、宮の、手習ひすさみ給へるを、竊みたるとて、御返書の中
に引き破りて入れたり、大將は、心に、さては我が文、宮の御
目には見給ひてげり、と、思すばかりの嬉しさぞ、いと人様悪か
りける、宮の、何處となく書き散らし給へるを、繼ぎ合せつ、
見續け給へれば、

朝夕に云々
○朝夕悲哀
に堪へぬ我
涙やこの小
野山にあり
といふ瀧な
らむとなり

(落歌) 朝夕に、泣く音を立つる、小野山は、絶えぬ涙や、音
無の瀧、

とや取り成すべからむ、古事など、物思はしげに書き亂り給へ
る、御手跡など、見所あり、大將はこれまで他人の身の上など
にて、かやうの好色心思ひ入らるゝは、戻かしく、現心とは思
はれぬことに、見聞きしがど、今我が身の上にて考ふれば、こ
の戀といふものは、實にいと堪へ難かるべき業なりけり、怪し
や、何とてかくも思ふらむ、と思ひ返し給へど、得も叶はず、六
條院にも、大將の近來の有様を聞召して、大將は、いと大人し
く、萬事を思ひ鎮め、世人の誇り所なく、見善くて過ぐし給ふ
を、我までも面立しく、我が昔時、少し洒落ばみ、仇なる名を
取りし面起しに、嬉しく思ひにたるを、此頃の有様を聞けば、氣

六條院憂
大將行跡

の毒に、何方にも心苦しきことのあるべきことよ、況して本妻雲井、雁は、差離れたる間柄にてさへあらで、父致仕、大臣なども、如何に思ひ給ふらむ、大將の、それほどの分別なき人にはあらず、宿世といふもの、遁れ詫びぬることなり、我より意見もせめとは思せども、かくも口入るべきことにもあらず、と、思す、女の爲ばかりこそ、雲井、雁のみにもあらず、また落葉宮に取られても、何方にも、いと氣の毒なれ、と愛なく聞召し歎く、紫、上の爲にも、來し方行く先の事を思し出でつゝ、院は落葉宮の、かやうの例を聞くにつけても、我が亡からむ後、紫、上の爲、後めたく思ひ申す様を言へば、紫、上は、御顔打赤めて、心憂く、さやうにまで此身を君に後らかすべきにやあらむ、と思したり、さて御心に、女ほと身を持って成す様も、所狭く哀なるべきものは

無言太子○
太子休魂經
に無言太子
婆羅國王之
太子、其名
休魂、容端
正、生而十
三年無言
とあり

夕霧大將參
六條院

なし、物の哀をも、面白きことをも、見知らぬ様に引き入り沈みなどすれば、何事につけてか、世に經る榮々しさも、常なき世の徒然をも、慰むべきぞ、さりとして、また大方物の情を知らず、言ふかひなきもの習慣ひたらむも、生育てけむ親も、いと口惜しかるべきものにはあらずや、心にはかり籠めて、無言太子とかいへるを、本尊にして、法師達の悲しき事にする無言の行の、昔の譬のやうに、悪しき事、善き事を、思ひ知りながら、世に理もれなむも、言ふかひなし、我が心ながらも、中庸ほとには、いかで此身を保つべきぞ、と、思し廻らすも、今は唯我が猶子女一宮明石女御の御腹の御爲なり、夕霧大將、序ありて、六條院に参りぬ、院は大將の思ひ給へらむ氣色も、ゆかしければ、

夕の露○白
氏文集に朝
露食三名利
とあり

○夕霧

(源) 小野の御息所の忌、終てぬらむな、御息所の入内も、昨日
今日と思ふ間に、はや三十年より彼方の事になる世にこそあ
れ、哀に味氣なしや、夕の露の懸る間の貪りよ、いかでこの
髪剃りて、此世のこと、萬事背き捨てむと思ふを、今日明日
と、さも長閑なるやうにても過ぐすかな、こはいと悪き業な
りや、

と言ふ、大將は、

(夕) 誠に此世に惜しげなき人にてさへ、各自厭離れ難く思ふ
世にこそ候ふめれ、

など申して、

(又) 御息所の四十九日の法事など、大和守某の朝臣、獨扱ひ
候ふ、いと哀なる業なりや、確乎しき便なき人は、生ける世

の限りにて、一旦身を終れば、かゝる世の果となるこそ、哀
しく候ひけれ、

と申し給ふ、院は、

(源) 山院よりも、吊問はせ給ふらむ、彼の皇女落葉宮女二に
は、如何に思ひ歎き給ふらむ、早う聞きしよりは、この近き
年頃、事に觸れて聞き見るに、彼の御息所こそ、口惜しから
ず見善き人の中なりけれ、大方の世につけても、彼の不幸は
惜しき業なりや、さても世に有りぬべき人の、かく亡せ行く
を、山院もいみじく驚き思したりけめ、彼の落葉宮こそ、此
所にもものし給ふ尼宮女三より、差次には、山院可愛きものに爲
給ひけれ、彼宮は、人様も善くおはすべし、
と言ふ、大將、

○夕霧

夕霧大將行
御息所法事

(夕) 彼の落葉宮の御心は、いかゞものし給ふらむ、能く知り申さず候へども、母御息所は、事もなかりし氣容、心ばせにぞ候ひし、親しく打解け給はざりしがど、果取なき事の序に見しに、自然人の用意は、質朴なるものにぞ候ふ、と申して、落葉宮の御事は、詞に懸けても申し給はず、院は却て此宮の事こそ、ゆかしく思し給へれ、さるを、大將のかく申し出てねば、いとつれなし、さて院は、御心に、これほど大將の健固心に、思ひ染めてむこと、諫めむに叶はじ、大將の採用ゐざらむものながら、我生賢に言ひ出でむも、愛なしと思して、中止ぬ、かくて御息所の御法事に、大將、萬事執り持ちて爲させ給ふ、事の評判、自然隠れなければ、致仕大臣などにも聞き給ひて、大將は、實直の人なれば、さやうの事あるべき筈なし、

致仕大臣子
息參三小野
法會

など、尙女方の、心淺きやうに思し成すぞ、わりなきや、さてこの御法事には、故權大納言の因縁あれば、弟の君達も、小野へ參りて、吊問ひ給ふ、誦經など、致仕大臣よりも、嚴重めしく爲させ給ふ、左大辨以下、是彼も、様々に劣らず爲給へれば、時を得たる人の御法事にも劣らずありける、落葉宮は、かくて此儘出家して、この小野の山莊に住み果てむ、と、思し立つことありけれど、人の此由を、御父、院に漏らし奏しければ、院は、(朱) 宮の出家など、は、いと有るまじきことなり、實に右衛門督、大將など、數多、右様左様に身を寄せ、持て成し給ふべきことにもあらねど、後見なきものぞ、却て尼などになりて、あるまじき名を立て、罪得がましき時、現世後世、共に中途に彷徨ふて、扨かしき咎負ふ業なる、我身も、かく世を

朱雀院諫
落葉宮出家

捨てたるに、三の宮宮女三の、同じ如く身を尼にあま簀し給へる、かく親子とも、出家して、未胤なきやうに、人の思ひ言ふも、捨てたる身には、更に思ひ悩むべきにはあらねど、是非とも、其方の同じ様に、出家を競争ひ給はむも、うたてあるべし、世の憂きにつけて、世を厭離ふは、却て人様悪き業なり、我が心と思ひ取る方ありて、菩提の道に發心するこそ、見善くあらめ、されば今少し思ひ鎮めて、心を澄ましてこそ、ともかくも爲給へ、

と、度々諫め申し給ひけり、さて山院には、落葉宮と、夕霧、大將との、浮きたる御名をぞ、聞召したるべき、されば、御心に、さやうの事の、案外なるにつけて、宮のこれが爲に、此世を倦じ給へる、と、世人に言はれ給はむことを思ひ、かくは目下の

夕霧大將使
落葉宮移
一條宮

出家を、諫止め給ふなりけり、さりとて、またこの二人が交情の、世に露顯れてものし給はむも、疎忽しく、氣に喰はぬことと思しなから、此事を、私の知り貌にもせは、宮の耻かしと思さむも、氣の毒なれば、何かは我まで聞き扱はむ、と、思してぞ、宮と大將との御中の筋は、詞に懸けても申し給はざりける、大將は、これまで、落葉宮の心から、靡き給ふやうにと、かく言ひ成しつるも、今は愛なし、彼の御心に許可し給はむことは、難げなるめり、されば、宮との關係は、凡て故御息所の心向けなりけり、と、人には知らせむか、はた如何はせむ、亡き人に少し心淺き咎負せて、何時有り初めしことぞともなく紛らはして、我が物にはせむ、今更改めて懸想だち、涙を盡し關係はむも、いと初々しかるべし、と、思ひ給ひて、落葉宮の、一條宮に

渡り給ふべき日、その日ばかりと定めて、大和守召して、移徙につけての作法を言ひ、一條の宮の内、掃除ひ修飾ひ、さこそ貴なる宮とはいへ、女同志は、掃除もせて、草茂く住み成し給へりしを、磨きたるやうに、修飾ひ成して、御心遣ひなどあるべき作法、愛甚く、壁代、屏風、几帳、御座などまで、思し寄りつゝ、大和守に言ひて、守の家にて、用意奉仕らせ給ふ、御移徙の日は、大將自身、一條宮におはし居て、御迎の御車、御前駟など奉り給ふ、落葉宮は、更に渡らじと思し言ふを、人々いみじく諫め申して、大和守も、

(大) 渡らじと言ふこと、某には、更に承引らじ、心細く悲しき、君の御有様を見奉り歎き、この間の宮仕は、我が力の堪へむ限り奉仕りぬ、今は某、國務の事も候ふて、大和へ退り

下りぬべし、宮の内の事務も、見譲り候ふ人も候はず、今より後の御後見なくては、いと怠々しく、如何にと見候ふを、かく大將殿の、萬事に思し營むを、實に殿の懸想の方に取りて思し給ふには、必しも靡き給ふべきにてはおはしまさぬ次第なれど、古にも、かやうに貞女の道ならで、君の御心に叶はぬ先例多く候へば、何も御身一所ばかり、世の誹謗を負せ給ふべきことにも候はず、されば今大將を厭ひ給ふは、いと幼稚くおはしますことなり、いかに氣高く思すとも、女の心一つに、我身を取り整め、省み給ふべきやうやあらむ、女は、尙男の崇め傳き給へらむに輔けられてこそ、深き御心の、賢き御掟も、それに係るべきものなれ、君のさやうに思し言ふも、全く近侍ふ女房達の、平生に申し知らせ奉らぬ罪なり、且は

然るまじき無用の御文ども取次ぎて、御心どもに、厭ひ仕ふ
まつり初め給ひてこそ、かくは思召すなれ、
と言ひ續けて、女房左近、同じく少將、君を責む、かく責められ
て、女房達集まりて、落葉、宮に、一條、宮へ御渡りあるべきこと、
申し構ふるに、宮は、いとわりなく、鮮なる御衣など、女房ど
も着替へさせ申すも、宮は我にもあらで、尙いと一向に殺ぎ捨
てまほしく思さる、御髪を、搔き出で見給へば、六尺ばかりに
て、様々の物思ひに、少し細りたれど、人は片輪にも見奉らず、
却て美しと見奉る、御自身の御心には、いみじの衰弱や、人に
見ゆべき有様にもあらず、様々に心憂き身を、と、思し續けて、ま
た打伏し給ひぬ、女房達は、時刻違ひぬ、夜も更けぬべし、と
皆騒ぐ、時雨いと心惚忙しく吹き迷ひ、萬事に物哀しければ、宮

上りにし云々
○母御息所
の後に慕ひて都には
出てまじとの意にて古
今集の須磨のあまの鹽
焼く烟風をいたみ思は
ぬ方にたなびきにけり
といふを引きかへたる
なり

は、

(落歌) 上りにし、峯の煙に、立交り、思はぬ方に、靡かずも
がな、

と言ひて、心一つには、強く思せど、その頃は、女房ども、宮の
御髪にても、殺ぎ給ふこともやあらむ、と、注意して、御鉈など
やうのものは、皆取り隠して、守り申しければ、宮は御心に、か
く人々の心遣ひして、持て騒がざらむにさへ、何の此世に惜し
げある我身にてかあらむ、されば今更愚痴がましく、若々しき
やうに、忍び隠れて、出家などはせむ、外聞も、うたておぞま
しかるべき業を、と、思せば、その本意の如くも、急ぎ出家を爲
給はず、女房達は、急ぎ立ちて、各、櫛、手箱、唐櫃、萬の物を、
確乎しからぬ袋やうの物に入れて、皆先立て、運びたれば、宮

落葉宮移
一條宮

戀しさの云々
○經函を形見としてよめるなり

浦島の子○
浦島子は丹後與謝郡の人なり雄略帝の時釣に出て龍宮

は獨留まり給ふべくもあらで、泣くく御車に乗り給ふものながら、傍のみ諦視れ給ひて、曩に此方へ渡り給ひし時、御息所の病苦しき心地にも、我が御髪搔き撫て修ひ、車より下し給ひしを、思し出るに、目も霧り塞りていみじ、御守刀に添へて、經函を副へたるが、常に御傍も離れねば、宮、

(落歌)

戀しさの、慰め難き、形見にて、涙に曇る、玉の匣かな、

喪中の調度なれど、墨塗もいまだ調へあへさせ給はず、こは彼の御息所の、手馴らし給へりし螺鈿の匣なりけり、誦經に施し給ふべき由ありしを、形見に留め給へるなりけり、浦島の子が心地ぞしける、かくて一條宮におはしまし着きたれば、宮の内、悲しげもなく、人氣多くて、昔にもあらぬ様なり、御車寄せて下

に至り三年
を経て玉の匣をもちひ歸り來りてその匣を開けば俄に老翁となりて既に三百年を経たる由丹後風土記に載せたり夕霧大將住一條宮東對

り給ふを、宮は更に故里とも思ほえず、疎ましくうたて思さるれば、頓にも下り給はず、女房達は、いと怪しく若々しき御様かな、と、見奉り煩ふ、大將は、東の對の南面を、我が御方に、假に修飾ひて、住み着き貌におはす、三條殿にては、大將の、かかる様を見て、北方雲井、雁を始め、女房達、殿には俄に淺ましくなり給ひぬるかな、何時の間にも有り初めしことぞ、と、驚きけり、大將は一體柔弱かに、好色はめることを好ましからず思す人なるを、かく不意なる艶事ぞ、打交り給ひける、されど大將には、是までかゝる艶事ありて、年經にけるを、音もなく氣色も漏らさで過ぐし給ひけるなり、とばかり女房達は、思ひ成して、かく落葉宮の御心の緩びなきこと、は、思ひ寄る人もなし、とにもかくにも宮の御爲こそ、いと氣の毒なれ、喪中なれば、御

大將迫女
房少將君

儀式饗應など、様變りて、婚禮の初、忌々しげなれど、物參らせなど、皆事鎮まりぬるに、大將は落葉、宮の御方に渡り給ひて、少將、君を、いみじく責め給ふ、少將は、

(少) 君の御志、眞に行末まで、長く宮を思されなば、今日明日を過ぐして申させ給へ、宮には故里に立歸り給ひて、却て物思し沈みて、恰も此世に亡き人のやうにてぞ臥せさせ給ひぬる、種々こしらへ申すをも、困難しとはかり思されたれば、何事も身の爲にこそ申し候へ、御心に違ひては、爲方なく候へば、いと面倒はしく申させにく、ぞ候ふ、

と申す、大將は、

(夕) そは、いと怪しく、推量り申し、には違ひて、幼稚く心得難き御心にこそありけれ、

とて、我が思ひ寄れる様、宮の御爲も、我が爲も、世の誹謗あるまじく、言ひ續くれば、少將は、

(少) いでや、宮には、只今はまた死亡人に見成し奉るべきにやあらむ、と、惚忙しき亂り心地に、萬事思ひ分かれ候はず、我君、とかく壓制ちて、一向なる御心な遣はせ給ひそ、と手を摺る、大將、

(夕) 我には、いとまた知らぬ世かな、憎く心外し、と、他人より勝りて思し貶すらむ、此身こそいみじけれ、我や無理、宮や道理、いかでこの曲直、人にも判断らせむ、とて、言はむ方なしと思して、言へば、少將、君、さすがに氣の毒にもありて、

(少) また知らぬは、即君が御所爲の、實に世に似ずあるまじ

少將君案
内大將

落葉宮籠
塗籠内

き御心構の故にこそは候へ、曲直の判断は、實に何方にかは
 寄る人候はむとすらむ、
 とて、少し打笑ひぬ、宮はかく心強けれど、大將は、今はせき
 とめられ給ふべきならねば、やがてこの少將、君を引立て、案
 内はえ知り給はねど、推測りに、宮の方へ入り給ふ、宮はいと
 心憂く、情なく、疎忽けき大將の心なりけり、と、残念く困難け
 れば、たとひ若々しきやうには言ひ騒がるとも、と、思ひて、塗
 籠の中に、御座一帖敷かせ給ひて、内より鎖して、御寝りにけ
 り、さて御心の中に、かやうにしても、何時までかはあらむ、亂
 れ立ちにたる女房の心どもは皆頼みなく、いと悲しう口惜しく
 思す、大將は心外しく辛苦しと思ひ申し給へど、こればかりに
 ては、何の思ひ離る、ことかはあらむ、と、長閑に思ひて、萬事

山鷄○山鷄
 は夜は雌雄
 一所に寝ぬ
 鳥なり河海
 抄に足引の
 山鳥の尾の
 したり尾の
 長々し夜を
 獨かも寝む
 また晝はき
 て夜は別る
 山鳥の影
 見る時ぞ物
 は悲しきと
 あり
 恨み詫び云
 々○君は塗
 籠の内に堅
 く鎖し籠り
 給へれば我
 は恨み詫び
 て胸も開か
 ずとなり

に思ひ明かし給ふ、山鷄の心地ぞし給ひける、辛うじて明け方
 になりぬ、大將は、かくてばかり居給ふも、直面なるべければ、
 出で給ふとて、宮には唯少許の隙なりとも、對面賜らまし、と
 いみじく詫びて申し給へど、宮には、いと難面し、大將、
 夕歌 恨み詫び、胸あきがたき、冬の夜に、また鎖し勝る、關
 の岩角、申さむ方なき御心なりけり、
 と、泣くく出で給ふ、かくて大將は、六條院にぞおはして、休
 息ひ給ふ、東上里、大將に、
 (花) 君には、小野なる落葉、宮をば、一條、宮に渡し奉り給へる
 ことと、彼の大殿致仕の邊などにも、その噂ぞ聞ゆる、一體
 いかなる御事にや、
 と、大様に言ふ、花散里には、御几帳添へたれど、側より微か

には、尙見え奉り給ふ、

(夕) さやうにも、尙世人の言ひ成しつべきことに候ふ、故御息所は、いと心強く、あるまじき様に言ひ放ち給ひしがど、御命も限りの様に、御心地の弱りけるに、彼の落葉宮を、また見讓る人のなきや悲しかりけむ、亡からむ後の後見にとやうなる、遺言の候ひしかば、我が元來の素志も候ひしことにて、かく思ひ成り候ひぬるを、様々いかに怪しき方に、宮をば扱ひ候はむ、さやうにもあるまじきことをも、世人こそ怪しう物言ひ悪きものにあれ、と打笑ひつゝ、

(又) 彼の宮本人ぞ、尙世に經じと、深く思ひ立ちて、尼になりなむとて、我に逢ふことも厭ひ結ばれたまふめれば、何か

は怪しきことのあらむ、又さては、此方雁雲井彼方落葉宮につけても、方々聞悪くも候ふべきを、たとひ彼の宮、出家して、さやうに嫌疑離れても、また彼の御息所の遺言は、違へず後見してむと思ひ候ふて、唯かく言ひ扱ひ候ふなり、院の渡らせ給へらむにも、事の序候はゞ、この通りに、學び申させ給へ、今日まで他心なく、ありくして、今更氣に喰はぬ心使ふよ、と院の思し言はむを、遠慮り候ひつれど、實にかやうの筋にてこそ、人の諫言をも聽かず、自分の心にも従はぬやうになるべく候ひけれ、

と忍びやかに申し給ふ、東上は、

(花) 人の偽り言ふにやあらむ、と、思ひ候ひつるを、今承れば、誠に然る様ある御氣色にこそは候ひけれ、男の女二所あるは、

皆尋常の事なれど、三條の姫君雁井の思さむことこそ、いと御氣の毒なれ、これまで、君には、姫君に、長閑やかに睦び馴らひ給ふて候ひしを、

と申し給へば、大將は、

(夕) 君は、彼女をば、姫君など、可愛げにも言ひ成すことかな、彼女は、いと鬼々しく候ふ不良物を、

とて、

(又) その鬼女とても、我は何とて疎略には待遇し候はむ、畏多けれど、院の方々の御有様どもにても推量らせ給へ、女は凡て平穩ならむばかりこそ、終生の取所には候ふめれ、本妻の、口悪く、嫉妬がましきも、暫時は生面倒しく、煩はしきやうには、遠慮ることあれど、男の本心として、終には、そ

れにしも従ひ果つまじき業なれば、事の亂れ出で來ぬる後、我も妻も、互に憎げに飽きたしや、尙南の御方上紫の御用意こそ、様々に有り難く、さてはこの東の御方花散里の、御心などこそは、愛甚きものには見奉り果て候ひぬれ、

など、微めき申し給へば、東上は、笑ひ給ひて、

(花) 某までも、物の例に引き出で給ふ程に、この身の人様悪き勢望こそ顯はれぬべけれ、さて可笑しきことは、院の御自分おんの御癖をば、人知らぬやうに差置きて、其方の、少許仇々しき御心遣ひをば、怠々しと思して、院の誠め申し給ふ、後言にも申し給ふめるこそ、恰も賢だつ人の、己が身の上の是非、知らぬやうに覺え候へ、

と言へば、大將は、

(夕) さやうにぞ、院には毎にこの好色の道をしも、誠め仰せらるゝ、然るは、賢き御教訓ならでも、いと能く心に收めて候ふを、

とて、實に可笑と思し給へり、かくて大將は、院の御前に参り給へれば、院は御心に、大將は、彼の落葉宮を、一條宮に渡し奉りしことは聞召したれど、何かは聞貌にも言はむ、と思して、大將の御姿を、打諦視り給へるに、いと愛甚く清らに、此頃こそ壯び勝り給へる御盛の容止なるめれ、然る容色の好色事を爲給ふとも、人の誹謗くべき様もし給はず、鬼神も罪許しつべく、鮮かに物清げに、若く盛りに匂を散し給へり、物思ひ知らぬ、若人の年齢にもまたおはせず、片帆なる所なく、分別盛に、壯び整ほり給へる、好色給ふも道理ぞかし、女の方にてても、なとか

大將參三六
條院

大將歸三三
條殿

愛てざらむ、自から鏡を見ても、なとか驕らざらむ、と、院は我が子ながらも思す、大將は、日高けて三條殿に歸り渡り給へり、家に入り給ふより、若君達、次々美しげにて、纏はれ遊び給ふ、北方雲井雁は、几帳の内に臥し給へり、大將は奥に入り給へれど、雲井雁は、目も見合せ給はず、大將は心の中に、彼はつきにこそはあるめれ、と、見給ふも道理なれど、遠慮貌にも待遇し給はず、御衣を引き遣り給へれば、北方は、

(雲) 君は、こゝを何處と思ふておはしつるぞ、我は早う死にき、平常に我をば鬼と言へば、同じくはその鬼に成り果てなむとて、かくは死ぬるなり、

と言ふ、大將は、
(夕) その御心こそ、鬼よりも勝りておはすれ、されど様子は

憎げもなければ、え疎み果つまじ、

と、何心もなく言ひ成し給ふも、北方は、心疾ましくて、

(雲) 愛甚き様に艶めき給へらむ、其方の邊に有り經へき我身にもあらねば、何地へなりとも、く、失せなむとす、尙様子は憎げもなければどなとさへも、な思し出てそ、愛なく年頃を經けるさへ、悔しきものを、

とて、起き上り給へる様は、いみじく愛敬づきて、匂ひやかに打赤め給へる顔、いと美しげなり、かく雲井雁の、心幼稚げに腹立ち成し給へればにや、それに目馴れたらむ大將は、

(夕) この鬼こそ、今は恐しくもあらず成りにたれ、神々しき氣を添へばや、と戯れに言ひ成し給へば、北方は、

(雲) 何事言ふぞとよ、尋常に死に給へね、我も死なむ、見れば憎し、聞けば愛敬なし、見捨て、死なむは、後めたし、と言ふに、大將は、いと可笑しき様のみ勝れば、濃やかに笑ひて、

(夕) 近くこそは、憎しとも見給はざらめ、餘所にては、なか愛敬なしとは聞き給はざらむ、それにつけても、偕老同穴の契、深かるなる間を、知らせむの御心なるなり、されど俄に、其方に打續くべかるなる冥途の用意は、さやうにこそは、後世までも契り申し、か、

と、いと無情く申して、何くれと作へ申し慰め給へば、北方は、いと若やかに、心美しく、可愛き心もまたおはする人なれば、大將の言ふことも、等閑言とは見給ひながら、自然と和みつゝも

のし給ふを、大將は心の中に、いと愛憐と思すものながら、心
 は空にて、彼の落葉、宮も、いと我が心を立て、強く物々しき
 人の氣容には見え給はねど、もし我に添ひ給ふことを、本意な
 らぬことにして、尼になども思ひ成り給ひなば、愚痴がましく
 もあるべきかなと、思ふに、此間ばかりは、暫時は問絶え置く
 まじく、惚忙しき心地して、暮れ行くまゝに、今日も一條、宮よ
 りは、御返事さへなきよと、思して、心に懸りて、いみじく詠
 めをし給ふ、北方雲井雁は、昨日今日、少しも物食召さざりけ
 るが、今は少許、食召しなどしておはす、大將は、
 (夕) 昔より其方の御爲に、志の疎略ならざりし様、御父致仕、
 大臣の、難面く待遇し給ひしに、其方より外に、心を遣らず
 して、世間の頑癡がましき名を取りしがど、堪へ難きを念じ

て、此方彼方より、進み氣色ばみし、多くの女の邊を、其方一
 人を守る爲に、數多聞き過ぐし、有様は、女こそ二夫に見
 えずとはいへ、それさへ我の如くはあらじとぞ、人も誹謗し、
 今思ふにも、いかでかは、さやうにはありけむ、我が心なが
 ら、仇々しきことなく、古さへ嚴重かりけりと思ひ知らる、
 を、其方は、今はかく我を憎み給ふとも、思し捨つまじき子
 供ども、いと所狭きまで數添ふめれば、御心一つに持て離れ
 給ふべくもあらず、またよし見給へよ、命こそ定めなき世な
 れど、その命さへあらむ間は、其方に心變らじ、
 とて打泣き給ふこともあり、雲井雁も、昔の事を思ひ出で給ふ
 に、哀にも有り難かりし御中の、恨めしとは思へども、さすが
 に契深かりけるかなと、思ひ出で給ふ、大將は柔びたる御衣ど

馴る、身を云々○年頃馴れたる中の君を今更恨みむよりは寧ろ尼になり方ましなりとなり
松島の云々○我身経りぬればとてもそれを厭ひて尼になりたりといふ名を立て

も脱き給ふて、美しき御衣の、心特別なるを取り重ねて、香をば焼き染め給ひ、愛甚く修飾ひ懸想じて出で給ふを、雲井、雁は、火影に見出して、忍び難く、涙の出で来れば、大將の脱き給へる単衣の袖を、引き寄せて、

(雲歌) 馴る、身を、恨みむよりは、松島の、蟹の衣に、たちやかへまし、尙現人にては、え過ぐすまじかりけり、

と獨言に言ふを、大將は立止りて、

(夕) さも心憂き御心かな、松島の、蟹の濡衣、なれぬとて、脱きかへつてふ、名を立てめやは、

大將は、打急ぎて、心も空なれば、御歌も、いと平凡しや、一條宮には、落葉、宮尙塗籠の内に籠り給へるを、女房達、

(女房) かく何時までも、籠りてばかり居給ひては、若々しく、

給ふべきことかばとな
大將訪一
條宮

怪しからぬ外聞も、候ひぬべきを、平生の御有様にて、大將に逢ひ給ふまじくば、その斷りをこそ申し給はめ、

など、萬事に諫め申しければ、宮は、然もあること、思しなから、今より後、餘所の外聞をも、我が御心の過ぎにし方をも、氣

に喰はず、御息所の亡せ給ひしも、恨めしかりける大將の因縁と思し知りて、その夜も、大將の參れるに、對面し給はず、大

將は、戯れ難く、珍奇なり、と、申し盡し給ふ、女房達も、御氣の毒と見奉る、落葉、宮は、女房少將、君して、大將に、

(少) 少許も人心地する折あらむに、忘れ給はずば、ともかくも御返答申さむ、故御息所のこの御一周忌の間は、一筋に思

ひ亂るゝことなくてなりとも、過ぐさむとぞ思ひ候ふ、かく深く思し言はするを、いと生憎にも、世間に知らぬ人なくな

りぬめるを、尙いみじう辛きものに申し給ふ、
と申す、大將は、

(夕) 我は思ふ心は、また世人と異様に、後安きものを、思はずなりける世かな、

と打歎きて、

(又) 宮には、かやうに差籠り給はで、平生のやうにておはしまさは、物越などにも、心に思ふことはかり申して、御貞心破るべきにもあらず、御服の間、數多の年月をも過ぐしてぞ、長閑に待ち奉るべく候ふ、

など、盡きもせず申し給へど、宮は、

(落) 尙かゝる喪中の亂れに添へて、無理き君の御心ぞ、いみじう辛き、世人の聞き思はむことも、萬事に斜ならざりける

我身の憂さをば、差置きて、故意に世を憚り給はぬ心、憂き御心構なり、

と、またも言ひ返し、恨み給ひつゝ、遙に遠くばかり待遇し給へり、大將は心に、然ありとて、かくばかりにては、中止べきやは、人の聞き漏さむことも道理と、不都合く、こゝに伺候ふ女房等の、人目も思し給へば、

(夕) 内々の心遣ひは、この言ふ様に從ひても、暫時は御貞心破るまじく、情はまむ、されど、我のこゝに有り着かぬ有様の、いとうたてあり、またかくありとて、搔き絶え此方に参らずば、君の御名、いかゞは御氣の毒にあるべき、單に物を思し沈みて、幼稚げなるこそ、いと御氣の毒なれ、
など言ひて、この少將、君を責め給へば、少將、君は、大將の御心

大將入ニ塗籠内

をも、實にとも思ひ、また宮の御様を見奉るも、今は心苦しく、辱く覺ゆる様なれば、少將君は、女房など通はし給ふ、塗籠の北の口より、案内して、大將を入れ奉りてげり、宮は御心に、いみじく淺ましく、辛しと思して、さてまた、伺候ふ女房どもも、實にかゝる世の人の心なれば、たとひ大將を厭ひても、またこれより勝る憂目をも、執り次ぎて見せつべかりけり、と、思して、今は頼もしき人もなくなり果て給ひぬる御身を、返すぐ悲しく思す、大將は、萬事に思し知るべき道理を申し知らせ、言の葉多く、愛憐にも面白くも申し尽し給へど、落葉、宮は、辛く氣に喰はずとばかり思したり、大將は、

(夕) いたかく言はむ方なきものに思されける身の分限は、比類なく耻かしければ、有るまじき心の着き始めけむも、我が

心ながら後悔しく覺え候へど、再び取返すものならぬ中に、かく立ち始めし御名は、今更何の高けき御名にかはあらむ、言ふかひなく思し弱れ、思ふに叶はぬ時は、身を投ぐる例も候ふなるを、唯我がかゝる志を、深き淵に思ひ擬へ給ひて、捨てつる身と思し成せ、

と申し給ふ、宮は單の御衣を引き被きて、心猛きこととはいへ、さすがに音を泣き給ふ様の、心深く氣の毒なれば、大將は心に、いとうたて、如何なれば、いたかく思すらむ、一生不犯など、いみじく固く思ふ人も、これほとになりぬれば、自然緩ぶ氣色もあるを、岩木よりも勝りて靡き難きは、前世の宿縁遠くて、憎しなど思ふやうあるなるを、宮は、さやうに思すらむ、と思ひ寄るに、厭ひ給ふことの餘りなれば、心憂くて、北方雲井、雁の

思ひ給ふらむこと、古も何心もなく相思ひ交したりし世の事、年頃今はと、裏心なき様に打撓み解け給へる様を、思ひ出るにも、我心の持成よりして、いと味氣なく思ひ續けらるゝことなれば、宮には強にも巨細に作へ申し給はずして、歎き明かし給ひつ、かくばかり愚癡がましく出入らむも、怪しければ、今日はこの塗籠の内に宿りて、心長閑におはす、かくさへ一向なる大將の心を、宮は浅ましと思して、いよく疎き御氣色の勝るを、大將は愚痴がましき御心かなと思すも、且は困難きものながら、哀なり、塗籠の内も、特に細なる物多くもあらで、香の御唐櫃、御厨子などばかり、或は此方彼方に搔き寄せて、氣近く修飾ひてぞおはしける、内は暗き心地すれど、朝日差出たる氣容、漏り來たるに、大將は、落葉、宮の引き被ぎおはする御衣引き遣り、

いとうたて亂れたる御髪、搔き遣りなどして、御顔微見奉り給ふ、いと貴に、女らしく、艶めきたる氣容し給へり、大將の御様は、盛装たち給へる時よりも、打解けてものし給ふは、限りもなく清げなり、宮は御心に、故權大納言の、特別なることなかりし御姿にてさへ、心の限り思ひ上りて、我が容貌美しくもあらずと、事の折に思へりし氣色を思し出つれば、況して今はかくいみじく衰へ窶れにたる有様を、大將の、暫時にても見忍び給ひなむやと思ふも、いみじく耻かし、されば打解けむも、いかゞと、右様左様に思ひ廻らしつゝ、我心を落ち着け給ふ、唯山ノ院や、致仕、大臣などの、聞き思さむことの、傍痛く、罪避らむ方なきに、折さへ喪中の事にて、いと心憂ければ、慰め難きなりけり、御手洗、御粥など、常の御座の方に参れり、喪中な

搔練云々○
搔練は薄紅
梅色にて濃
衣は紫色な
り

れば、色異なる御修飾も、忌々しきやうなれば、東面に、屏風
を建て、母屋の際に、香染の御几帳など、仰山しきやうに見
えぬ、沈の二階の違棚などやうの物を立て、喪中ながらも、い
さゝか婚儀の心はえを加へて修飾ひたり、これも大和守の爲業
なりけり、陪膳の女房達も、鮮ならぬ色の、山吹、搔練、濃衣、
青鈍などを着更へさせ、薄色のも、青朽葉色など、喪服をば、と
かく吉服のやうに紛らはして、御膳参る、此宮は、御息所の時
より、男交らぬ女所にて、あどけなく、萬の事それに馴れ來り
たる宮の内に、有様心留めて、僅少なる下人をも、言ひ整へて、
この大和守一人ばかりぞ、扱ひ行ふ、かく覺えざる尊き客人の
おはすると聞きて、元餘り勤務もせざりける家司など、率爾に
参りて、政所などいふ方に伺候ひて、事ども營みけり、落葉宮

雲井雁移
大殿

は、御心解け給はねど、大將は強ひて住み馴れ貌作り給ふ間、北
方雲井雁は、心に、大將のかく宮に心懸け給ふとも、よもや然
ほどにもあらじとこそ、且は頼みつれ、今は限りなるめり、眞
實人の心變るは、元に戻ることまた隨ひて難しとぞ、人の言
ひしを聞きしは、眞なりけり、と思ひければ、今はその人言を
試み果つる心地して、如何様にしても、この無禮を見じと思し
ければ、父大臣の方へ、方違せむとて、大殿の方へ渡り給ひに
けるを、恰も弘徽殿女御雲井雁の姉君の、御里邸におはする間にて、久
々にて對面し給ひて、少し物思も霽る、やうに思されて、例の
やうにも、急ぎ三條殿へ歸り渡り給はず、大將も聞き給ひて、心
に、さればよ、彼はいと急にもものし給ふ性質なり、彼の父大臣
も、また大人々しくはあれど、長閑めたる所なく、いと引切

大將歸三條殿

魂に、花やぎ給へる人にて、心外し、見じ聞かじなど、辟々しき事ども爲出で給ひつべし、と、驚かれ給ひて、三條殿に渡り給へれば、御子達も半分は留まり給へれば、母君雲井雁は、姫君達、さてはいと幼稚き御子達をぞ連れて、先方へおはしにける、殿に残れる男の御子達は、大將のおはしたるに、見付けて、喜び睦れ、或は母君を戀ひ慕ひ奉りて、憂へ泣き給ふを、父君大將は、心苦しと思す、大將よりは、北方へ、消息度々申して、迎に御使を奉り給へど、北方よりは、御返事さへもなし、大將は心に、かく頑固しく、軽々しの夫婦間よ、と、如何しく覺え給へど、舅大臣の見聞き給はむ所もあれば、日を暮らして、自身大殿へ参り給へり、さて雲井雁には、弘徽殿女御の御居間なる、寢殿にぞおはするとして、例の渡り給ふ、自分の御居間には、女

大將詣大殿

房達ばかり伺候ふ、若姫君達ぞ、乳母に添ひておはしける、大將は、

(夕) 今更に、若々しの御交際よ、かゝる幼稚き子供達を、此處彼處に捨て置き給ふ、寢殿の御交際は、何事ぞ、相應しからぬ御心の筋とは、年頃見知りたれど、然るべき前世の宿因にやあらむ、其方とは、昔より心に離れ難く思ひ申して、今はかくくたくしき子供達の、數々愛憐なるを、互に見捨つべきにあらず、と頼み申しけるを、今度果敢なき一條邊の一節に、かくは怪しく待遇し給ふべくやはある、
と、いみじく憎め恨み申し給へば、雲井雁は、
(雲) 何事も、今はと君の見飽き給ひにける此身なれば、今はまた元に直るべきにあらぬを、何かは今更仰に従ひ奉らむ、

とて、

(又) この子供達は、思し捨てずば、嬉しくこそはあらめ、と申し給へり、大將は、

(夕) 平穩の御返答よ、言ひもて行けば、誰が名か惜しき、其方の御名こそ立つべけれ、

とて、強ひて此方へ渡り給へ、ともなくて、その夜は獨臥し給へり、此方も彼方も、かゝる有様にて、怪しく中空なる頃かな、と、大將は思ひつゝ、御子達を前に臥させ給ひて、落葉宮には、また如何に思し亂らむ様を、思ひ遣り申して、安からぬ心盡しなれば、心に、如何なる人か、かやうの戀路といふものを、面白く覺ゆらむ、など、物懲しぬべく覺え給ふ、明けぬれば、大將は、

誰か名か惜しき○河海抄にいひいでば誰か名か惜しき信濃なる木曾路の橋のかげし絶えずばとあり

(夕) 人の見聞かむも若々しきを、其方の眞に限りと言ひ果て給ふならば、此方もさて試みむ、殿に残れる子供どもも、可愛げに戀ひ申すめりしを、其方の撰り残し給へるやうあらむとは見ながらも、何れも思ひ捨て難きを、ともかくも子供達は、皆我が方にて待遇し候ひなむ、されば残らず此方へ賜へ、と威嚇し申し給へば、雲井雁は、急速しき御心にて、大將はこの御子達までをや、彼の知らぬ一條宮に、將て渡し給ふらむ、と危く思す、大將は、雲井雁に、

(夕) 姫君をば、いざ賜へ、三條殿へ参らむ、我は姫君を見に、此方へ参り來ること、不都合ければ、常にも参り來じ、彼所にも残れる男君達の可愛きを、同じ所にてなりとも見奉らむ、

と申し給ふ、姫君達は、また幼稚く美しげにておはす、父大將は、いと愛憐と見奉り給ひて、姫君に、

(夕) 其方は、母君の御教にな叶ひ給ひそ、能く物を聞き定めて、思ひ取る方なき心あるは、いと心憂く、悪しき業なり、と言ひ知らせ奉り給ふ、致仕大臣は、かゝる事を聞き給ひて、人笑はれなるやうに思し歎く、さて雲井雁に、

(致) 暫時は然やうにも見給はで、大將の自然思ふ所ものせられて、何とか分別あらむものを、女のかく引切魂なるも、却りては軽々しく覺ゆる業なり、よしかく言ひ始めつとならば、何かは大將の折れて、ふとしも歸り給はむ、其内には、自然大將の氣色心ばえは見えなむ、

藏人少將使
一條宮

と言はせて、彼の一條の落葉宮に、御子の藏人少將を、御使に

て、御文奉り給ふ、

(致歌) 契りあれや、君を心に、留め置きて、哀と思ひ、恨めしと聞く、尙え思ひ放たじ、

契りあれや
云々○我が
子の權大納
言は亡せぬ
ぬど君をば
心の中に留
め置きて忘
れずとて哀
とは權大納
言のことに
いへ恨めし
とは夕霧大
將に靡ける
由をいへる
なり

とある御文を、藏人少將、持ておはして、唯入りに入り給ひぬ、南面の簀子に、圓座差出して、女房達物申しにくし、落葉宮は、況して詫びしと思す、この藏人少將は、兄弟の中にも、いと容貌よく、見善き様にて、長閑に見廻して、故兄君柏木右衛門督の、古を思ひ出る氣色なり、少將、

(藏) 某は參り馴れにたる心地して、初々しからぬに、さやうにも隔心で御覽じ許さずもやあらむ、

なとばかりぞ、微め申し給ふ、落葉宮は、御返事いと申しにくくて、

(落) 我は御返事、更にい書くまじ、
と言へば、女房達、

(女房) 御志も、うたて若々しきやうに、
宣旨書も、また申さ
すべきにあらず、

と集まりて申せば、宮はまづ打泣きて、
御心に、故御息所おは
せましかば、いかに氣に喰はずとは思
しながらも、我が爲に罪
あるやうには爲成し給はじ、と、思
ひ出で給ふに、涙の筆に先だ
つ心地して、書き遣り給はず、

(落歌) 何故か、世に數ならぬ、
身ひとつを、憂しとも思ひ、悲
しとも聞く、

とばかり思しけるまゝに、書きも
結め給はぬやうにて、表紙に
押包みて、出し給ひつ、少將は、
女房達と物語して、

何故か云々
○この數な
らぬ一身を
何故にさや
うに様々に
思さるゝか
とて憂しと
は前の恨め

しを承け悲
しは前の哀
とあるを承
けたり

(藏) 時々かく伺候ふに、かゝる御簾の
前に居るさせらるゝは、
便なき心地し候ふを、今よりは、寄所
ある心地して、常に參
るべし、御簾の内外なども、許されぬ
べき年頃の、心懸けし効
能顯はれ候ふ心地ぞし候ふ、

など、氣色はみ置きて、出で給ひぬ、
かくて落葉、宮は、致仕、大
臣の御文などに、いとゞしく心解け
難かるべき御氣色に、大將
はあくがれ惑ひ給ふ間に、北方へは、
音信も申さず、日頃經る
まゝに、雲井、雁は、思し歎くこと
繁し、大將の妾、藤典侍惟光の女、か
かる事を聞くに、北方は、世と共に
嫉妬して、我を許さぬもの
に言ふなるに、一條、宮の御事より
して、かく輕蔑りにくきこと
も出て來にけるよ、と、氣の毒に思
ひて、北方へ文など時々奉れば、
その序に、かく申したり、

藤典侍雲井
雁贈答

數ならば云々○我身物の數ならば我身の上にも濡らすべき袖なるを今は君の爲にぬらすと
なり
人の世の云々○我は人の上まで身に替へておはれとは思はざりしを君は我身の上まで思ひ入れ給ふこそかたじけなけれとな

(典歌) 數ならば、身に知られまじ、世の憂きを、人の爲にも、濡らす袖かな、

雲井雁は、生煩はしとは見給へど、物の哀なる間の徒然に、彼もいと尋常には覺えじと思す方に、心ぞ注ぎにける、

(雲歌) 人の世の、憂きをあはれと、見しがども、身に代へむとは、思はざりしを、

とばかりあるを、典侍は、心に、こは北方の思しけるまゝを、詠み給へるなるべし、と、哀に見る、昔大將と、この北方との御中絶えの間には、大將は、この典侍ばかりこそ、人知れぬものに思ひ留め給へりしがど、事更めて、大將と雲井雁との御中、直りし後は、大將は、典侍に對して、いと邂逅に、難面くなり勝り給ひつゝ、然はいへ、さすがに、この典侍の腹に、御子達は

數多出で來にけり、彼の本妻雲井雁の御腹には、男子は、太郎君、三郎君、四郎君、六郎君、女子には、大君、中の君、四の君、五の君、とおはす、典侍の腹には、女子は、三の君、六の君、男子には、次郎君、五郎君、といふぞ、おはしける、凡て十二人が中に、片輪なるはなく、いと美しげに、一人々々に生ひ出で給ひける、典侍腹の君達ぞ、容貌の美しく、心ばせ才ありて、皆勝れたりける、この典侍腹の中、女君、三の君、男君、二郎君の二人は、東上花散里の御方にぞ、取り別きて傳き奉り給ふ、六條院にも、この二孫を見馴れ給ひて、いと可愛くし給ふ、この大將の、落葉宮または雲井雁との御交情、行末いかならむ、言ひ遣る方なくて、筆も擱きぬとぞ、

第三十九帖 御法

此帖は源氏
五十一歳の
春より秋に
至る

紫上いた甚いたく煩わづらひ給たまひし御心みこころ地ち、いと危あつ篤つしく成なり給たまひて、何處どこと
なく惱なやみ渡わたり給たまふこと久ひさしくなりぬ、いと仰山おとろくしくはあらねど、
年とし月つき重かさなれば、頼たのもしげなく、いと虚弱あえかになり勝まさり給たまへるを、六
條院じょういんの、思おもほし歎なげくこと限かぎなし、院いんは、御心みこころに、暫時しばしにても紫、
上かみに後おのれ給たまはむことをば、いみじく悲かなしかるべく思おもし、また紫、
上かみの御心みこころ地ちには、此世このよに飽あかぬことなく、御子みこもおはさねば、後うしろ
めたき羈絆はばさへ交まじらぬ御心みこころなれば、強あながちに懸かけ留とどめまほしき御命おんいのち
とも思おもされぬを、我われもし先さきちなば、年頃としごろの院いんの御契おんちぎ、懸かけ離はなれ
思おもひ歎なげかせ奉たてまつらむことばかりぞ、人知ひとしれぬ御心みこころの中うちにも、物哀ものあはれ
に思おもされける、後世のちのよの爲ためにと、尊たよとき逆修さかどもを、多おほく爲せさせ給たま

ひつゝ、いかで尙本意の如く出家して、暫時も此世に關係はむ命の間は、行法をも紛れなくせむと、撓みなく思し言へど、院は更に許可し申し給はず、然るは、院の我が御心にも、さやうに出家の事も思し始めたる筋なれば、かく紫上の、懇切に思ひ給へる序に催促されて、同じ佛道にも入りなむと思せど、一度家を出て給ひなば、假にも現世を顧盼みむとは思し掟てず、後世には、同じ蓮の座を分けむと契り交し申し給ひて、頼みを懸け給ふ御交情なれど、此世ながらにて勤行め給はむ間は、たとひ同じ山に身を遁れ給ふとも、峯を隔て、相見奉らぬ栖居に、懸け離れなむことをばかり、思し儲けたるに、紫上の、かくいと頼もしげなき様に、惱み篤び給へば、いと御氣の毒なる御有様を、院の今はと世を遁れて行き離れむ刻には、さすがにこの女

君をば捨て難く、折角心を澄ませむと爲給ひても、却て山水の住居、濁りぬべく思し滞る間に、唯淺く慮りて、思のまゝの道心起す彼の臈尙侍、權齋院などには、此上なく後れ給ひぬべかるめり、紫上は、院の御許可なくて、吾が心一つに出家を思し立たむも、様悪しく本意なきやうなれば、此事によりてぞ、紫上も、院をば恨めしく思ひ申し給ひける。さて御心に、我身も罪業輕かるまじき故に、かく妨げあるにやあらむ、後めたく思されけり、年頃私の御願にて、書かせ奉り給ひける、法華經千部、急ぎて供養し給ふ、吾が殿と思す、二條院にてぞ爲給ひける、七僧の法服など、品々賜はず、衣の色、縫目より始めて、清らなること限なし、大方何事も、いと嚴重めしき業どもを爲られたり、六條院へは、紫上の御方より、仰山しき様にも申し給はざ

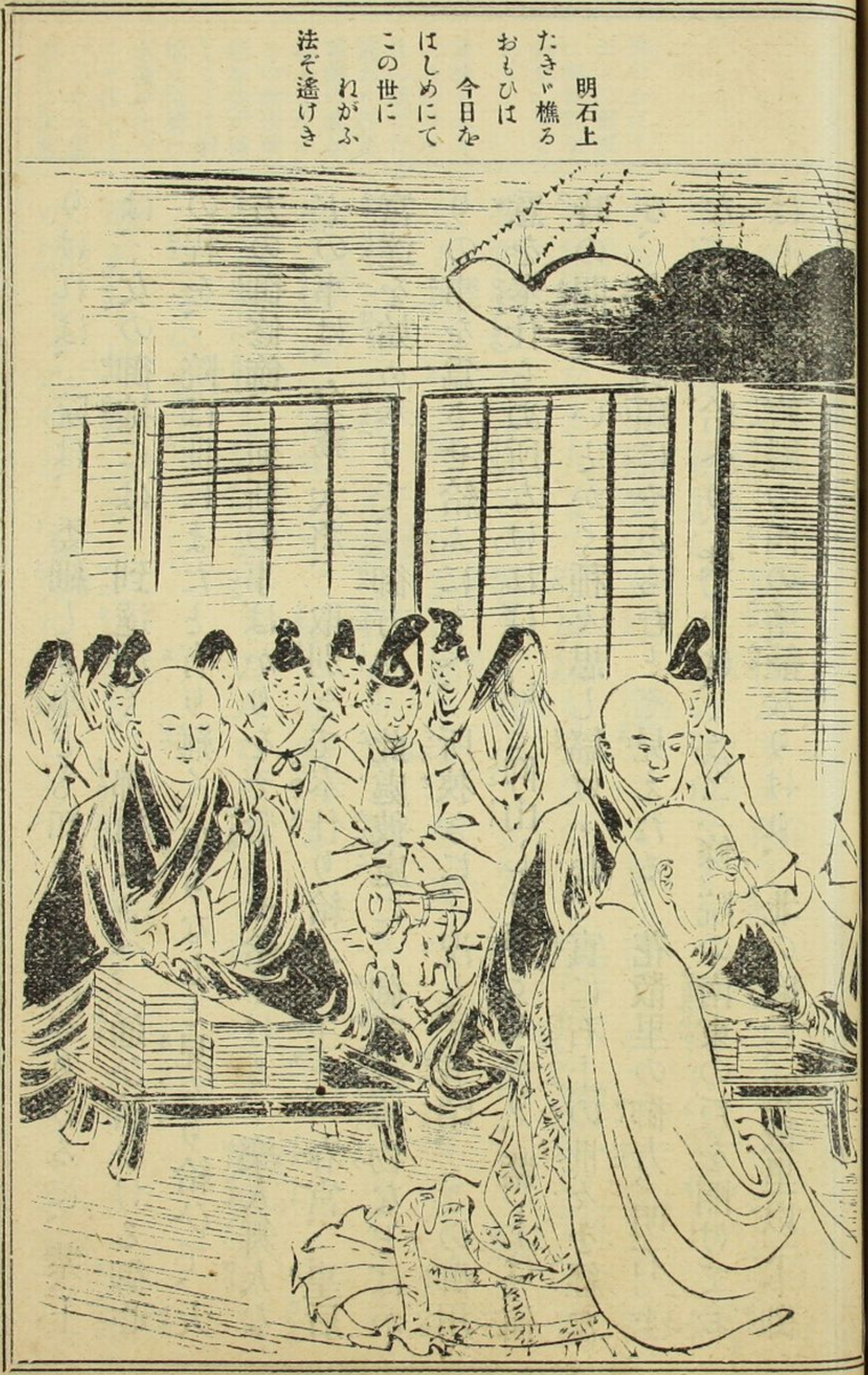
二條院法華
經供養圖

紫の上
惜しからぬ
この身
ながらも
かぎりとして
たき
盡きなむ
ことの悲さ



○御法

明石上
たき樵る
おもひは
今日を
はしめにて
この世に
れがふ
法ぞ遙けき



○御法

りければ、院は、委細しき事ども知らせ給はざりけるに、紫、上は、女の御掟には、到達深く、佛道にさへ、通ひ給ひける御心の程を、院は世にまたと有り難く、限りなしと見奉り給ひて、大方の御修飾、何斯の事はかりをぞ營ませ給ひける、樂人舞人などの事は、夕霧、大將、取別きて奉仕り給ふ、主上、春宮、皇后宮達を始め奉りて、御方々、此處彼處に、御誦經捧物などばかりの事を爲させ給ふにさへ、所狭きに、況して其頃、この御用意を奉仕らぬ所なければ、いと仰山しき事どもあり、紫、上は、何時の間に、いとかく種々思し儲け、む、實に石上の世々を経たる、古き御願にやあらむとぞ見えたる、花散里の御方、明石、上なども渡り給へり、紫、上は、この二條、院の南東の戸を開けておはします、寢殿の西の塗籠なりけり、北の廂に、花散里以下、御

佛のおほす云々○觀經に阿彌陀去此不遠とあり
薪樵る云々○八講の中日に薪の行道あり行基菩薩の歌を唱ふるなりその歌法華經を我が得しことは薪樵り菜摘み水汲み仕へてぞ得しといふなり提婆品に採薪

方々の御局どもは、障子ばかりを隔てつゝ爲たり、頃は三月の十日なれば、花盛にて、空の景色なども、麗和に、物面白く、佛のおはすなる極樂の有様、遠からず思ひ遣られて、特別なる深き結縁もなき人まで、罪業を失ひつべし、薪樵る讚歎の聲も、幾多群集ひたる人々の響き、仰山しきを、法事打休みて、鎮まりたる間さへ、紫、上は哀に思さるゝを、況して此頃となりては、何事につけても、心細くばかり思し知る、さて紫、上は、明石、上の御方に、三、宮宮句して、申させ給へる、

(紫歌) 惜しからぬ、このみながらも、限りとて、薪盡きなむ、ことの悲しさ、

明石、上は、御返歌、この際に、心細き筋を申さむはいかゞ、後の聞えも心後れたる業にやあらむ、とて、何處となく打紛らし

てぞあるめる、

(明歌) 薪樵る、思ひは今日を、始めにて、この世に願ふ、法

ぞはるけき、

及菓蔬隨時
恭敬與とあ
三宮○此時
五歳なり
惜しからぬ
云々○惜し
からぬ身な
れど命の盡
きむことさ
すがに悲し
とて此身に
菓をかけた
りこゝの薪
は採薪菓蔬
の意にはあ
らで如薪
盡火滅の
薪にいへる
なり
薪樵る云々
○提婆品の
于時奉侍
經に於千歳

終夜、尊き讀經などに、打合せたる鼓の聲、絶えず面白し、ほ
のくくと明け行く朝ぼらけ、霞の間より見えたる花の色々、紫、
上は、平生に春を愛で給へれば、尙これに心留まりぬべく匂ひ
渡りて、百千鳥の囀るも、笛の音に劣らぬ心地して、物の哀も、
面白さも、残らぬ間に、陵王の、舞ひて、急になる間の末つ方
の樂、花やかに賑しく聞ゆるに、舞人の、皆肩脱ぎ懸けたる衣の
色々なども、物の折からに、面白くばかり見ゆ、親王達、公卿
達の中にも、音樂の上手ども、その手を残さず樂遊び給ふ、上
下愉快げに、興ある氣色どもなるを見給ふにも、紫、上は、残り

の意にて今
日を始に千
歳奉事して
行末遠く法
を願ひ給は
らむと祝ひ
たるなり
紫上復病

少しと身を思したる御心の中には、萬の事、哀に覺え給ふ、
紫、上は、御法事に、昨日例ならず起居させ給へりし餘波にやあら
む、今日はいと苦惱しくて臥し給へるが、年來かゝる物の折毎
に參り集ひ樂遊び給ふ人々の、御容貌、有様、各自の詩歌ども、
琴笛の音をも、今日や聽き給ふべき終結ならむとはかり思さる
れば、平生はさやうにしも目留まるまじき人の顔ども、哀に
見渡され給ふ、況して夏冬の時につけたる遊び戯れにも、生挑
ましき嫉妬めきたる下の心は、自然立交りもすらめど、さはい
へさすがに情を交し給ふ明石、上、花散里の方々は、誰も久しく
留まるべき世にはあらざるなれど、まづ我一人先ちて、行方知
らずなりけむを思し續くるも、いみじく哀なり、この御法事も
終て、各自歸り給ひなむとするも、紫、上は、遠き別めきて惜

絶えぬべき
云々○今日
結縁すれば
我身世を去
りぬとも契
は絶ゆまじ
きとて身に
御法のみを
かけたり
結び置く云
云○餘命少
き身なれど
も結縁の契
は絶えまじ
となり
参住○修法
に取頼りた
る時は参住
とて更に行
ふことあり

まる、花散里の御方に、

(紫歌) 絶えぬべき、御法ながらぞ、頼まるゝ、世々にと結ぶ、

中の契を、

と申し遣り給へば、花散里、

(花歌) 結び置く、契は絶えじ、大方の、残り少き、御法なりと

も、

と御返歌申し給へり、やがて此序に、不斷の讀經、懺法など撓
みなく尊き事どもを爲させ給ふ、御修法は特別なる効驗も見え
ずして、程經ぬれば、例の参住になりて、事更に然るべき所々、
寺々にて、御修法せさせ給ひける、夏になりては、紫、上は、例
の暑氣にさへ、いと消え入り給ひぬべき折々多かり、その事
と仰山しからぬ御心地なれど、唯いと弱き様になり給へれば、難

明石中宮退
居二條院

名對面○中
宮の行啓に
供奉の公卿
名調をする
儀式北山抄
に見えたり

澁しげに所狭く惱み給ふこともなし、伺候ふ女房達も、如何に
おはしまさむとするにかあらむ、と思ひ寄るにも、まづ搔き昏ら
し、可惜しく悲しき御有様と見奉る、紫、上は、かやうにはかり
おはすれば、明石、中宮、この二條院に退出でさせ給ふ、中宮は、
東の對におはしますべければ、紫、上は、寢殿にて待ち申し給ふ、
儀式など例に變らねど、中宮の御子達など、また幼稚くおはし
ませば、紫、上は、此世の有様を、見果てずなりぬる、などばか
り思せば、萬事につけて、物哀なり、名對面を聞き給ふにも、そ
の人、かの人、など、耳留めて聽かれ給ふ、公卿など、いと多く
供奉し給へり、紫、上は、中宮と、久しき御對面の問絶を、珍ら
しく思して、御物語、委細に申し給ふ、六條院入り給ひて、
(源) 今夜は、巢離れたる心地して、無徳なりや、退り休み候

はむ、

とて、吾が御座所に渡り給ひぬ、さて院には、紫、上の起き居給へるを、嬉しと思したるも、いと果敢なき間の御慰なり、中宮は、

(中) かく東對と、寢殿と、方々におはしては、紫、上の、東對へ渡らせ給はむも、畏多し、我身の寢殿へ参らむことも、また難澁くなりて候へば、

とて、暫時は寢殿におはすれば、母君明石、上も、此方へ渡り給ひて、心深かげに鎮まりたる、御物語ども申し交し給ふ、紫、上は、御心の中に、死後の事など、思し廻すこと多かれど、賢しげに、亡からむ後、など、言ひ出ることもなし、唯凡ての世の常なき有様を、大様に、言寡なるものながら、淺はかにはあらず

言ひ成したる氣容なとぞ、詞に出したらむよりも、哀に物心細き御氣色は、著く見えける、紫、上は、中宮の御腹の宮達を見奉り給ひても、

(紫) 各の御行末を、ゆかしく思ひ申しけるこそ、かく果敢なかりける身を、惜しむ心の交りけるにやあらむ、

とて、涙催み給へる、御顔の餘韻、いみじく美しげなり、中宮は、御心に、紫、上には、何とてかくまで心弱くは思したらむ、と思すに、打泣き給ひぬ、紫、上は、忌々しげに、などは、申し成し給はで、話の序などにぞ、年來奉仕り馴れたる女房達の、特別なる寄邊なく、氣の毒げなるものは、中宮に、

(紫) この人、かの人どもは、我この世に候はずなりなむ後には、御心留めて尋ね思ほせ、

紫上遺言
中宮

などばかり申し給ひける、中宮は、御讀經などし給ふによりてぞ、例の吾が御方なる、東の對に渡り給ふ、三三宮宮は、數多の宮達の中にも、いと美しげにて、歩き給ふを、紫上は、御心の隙には、前に居る奉り給ひて、人の聞かぬ間に、

(紫) もしも、我が候はざらむに、其方は、我を思し出でなむや、

と申し給へば、三三宮は、

(三) いと戀しかりなむ、我は、内裡の主上よりも、母中宮よりも、祖母をこそ勝りて思ひ申すれ、祖母おはせずば、心地難澁しかりなむ、

とて、目を摺り紛らはし給へる様、美しければ、紫上は、含笑みながら、涙は落ちぬ、

(紫) 大人に成り給ひなば、此所に住み給ひて、この對の前なる、紅梅と絲櫻とは、花の折々に、心留めて翫弄び給へ、然るべからむ折は、佛にも奉り給へ、

と申し給へば、三三宮打領きて、紫上の御顔を熟視りて、涙の落つべかるめれば、起ちておはしぬ、紫上は、三三宮をば、取別きて養育て奉り給へれば、此宮と、女一宮とをぞ、御行末を見届け給はざらむこと、口惜しく哀に思されける、秋待ちつけて、世間少し涼しくなりては、御心地も少許爽快ぐやうなれど、尙ともすれば、御病かごとがまし、然るは、身に染むばかり思さるべき秋風ならねど、御涙に露けき折がちにて過ぐし給ふ、中宮は、内裡へ參り給ひなむとするを、紫上は、今暫時、我が生命の間をも御覽ぜよ、と、申さまほしく思せども、かくては賢しき

身に染むば
かり○細流
抄に秋吹は
いかなる色
の風なれば
身に染むば
かり人の戀
しきとあり

やうにもあり、また内裡の御使の隙なきも煩はしければ、さやうにも申し給はぬに、さりとして御病の身にて、中宮の御方へも、え渡り給はねば、中宮ぞ、紫、上の御方へ渡り給ひける、紫、上は、傍痛けれど、中宮をば、見奉らぬも、實にかひなしとて、吾方に御修飾を、特別に爲させ給ふ、さて紫、上は、此上く瘦せ細り給へど、かくてこそ貴に艶めかしきことの限なさも、勝りて愛甚かりけれど、來し方餘り風韵多く鮮々とおはせし盛は、此世の花の薫にも擬へられ給ひしを、病み給ひては、却て可愛げに美しげなる御様にて、此世に幾何もあるまじく、假始に世を思ひ給へる氣色、また他に似るものなく、御氣の毒に、不覺に物悲し、風凄く吹き出でたる夕暮に、紫、上は、前裁見給ふとて、脇息に倚り居給へるを、院渡りて、見奉り給ひて、

(源) 今日、いと能く起き居給ふめるは、中宮の御前にては、此上なく御心も晴々しげなるめりかし、

と申し給ふ、紫、上は、こればかりの病の隙あるをも、院のいと嬉しと思ひ申し給へる御氣色を見給ふも、御氣の毒にて、吾が身かくて終てなば、院はいかに思し騒がむと思ふに、哀なれば、

(紫歌) おくと見る、程ぞはかなき、ともすれば、風に亂るゝ、

萩の上露、と詠じ給ふ、實に折れ返り留まるべくもあらぬ萩花の、露も擬へられたる折さへ、忍び難きを、院は、

(源歌) やゝもせば、消えを争ふ、露の世に、後れ先つ、ほと

とて、御涙を拂ひあへ給はず、中宮は、

おくと見る
云々○病の
隙に起きて
は居れど實
にはかなき
身にて一風
あれば直に
消ゆべき命
ぞとて起に
置をかけた
り
やゝもせば
云々○我も

君に後れま
じ同くは共
に消えなむ
となり和泉
式部の歌に
やいもせば
消えぞしめ
べきとにか
くに思ひ亂
るゝ荳の
露とあり
秋風に云々
○はかなき
露の如き世
に君ばかり
ならず我身
も草の上に
置かねばか
りなとなり

○御法

(中歌) 秋風に、しばし留まらぬ、露の世を、誰か草葉の、上
とのみ見む、

と申し交し給ふ、中宮も、紫、上も、御容貌ども、あらまほしく、
見るかひあるにつけても、かくて千歳を過ぐす業もがなど思さ
るれど、心に叶はぬことなれば、紫、上の御命、懸け留めむ方な
きぞ、悲しかりける、紫、上は、中宮に、

(紫) 今はや還り渡らせ給ひね、亂り心地、いと苦しくなり
候ひぬ、いふかひなくなりける間といひながら、いと無禮
に候ふよ、

とて、御几帳引き寄せて、臥し給へる様の、平生よりもいと頼
もしげなく見え給へば、中宮は、いかに思さるゝにかあらむと
て、紫、上の御手を執へ奉りて、泣くく見奉り給ふに、誠に消

紫上逝去

え行く露の心地して、今は限りに見え給へば、御誦經の使ども、
數も知らず立ち騒ぎたり、先々も、かくて蘇生出で給ふ折に、人
人慣れ給ひて、御物怪と疑ひ給ひて、夜一夜、様々の祈禱ども
を爲盡させ給へど、かひもなく明け果つる間に、消え終て給ひ
ぬ、中宮も還り給はで、かくて御終焉を見奉り給へるを、嬉し
くも、また限りなく悲哀くも思す、誰もく、生者必滅の理の
別にて、比類ある事とも思されず、今更珍かに、いみじく、明
方の夢に惑ひ給ふ間も更なりや、會者定離の道を辨ふ、賢しき
人もおはせざりけり、伺候ふ女房なども、ある限り、更に物覺
えたるものもなし、院は況して思し鎮めむ方なければ、夕霧、大
將の、近く参り給へるを、御几帳の下に呼び寄せ給ひて、
(源) 紫、上も、今はかく限りの様なるめるを、年來出家の本意

○御法

冥途の○孟
津抄に冥き
よりくらき
道にぞ入り
ぬべき遙に
照らせ山の
端の月とあ
り

ありて思へること、かゝる刻に、その本意違ひて止みなむが、いと御氣の毒なるを、御加持に伺候ふ大徳達、讀經の僧なども、皆聲罷めて出でぬなるめるを、さりとも立止まりものすべきもあらむ、現世の祈禱の効驗は、空しき心地するを、佛の御靈驗、今は冥途の吊訪なりとも、頼み申すべきを、生前の本意の如く、飾落すべき由ものし給へ、然るべき僧、誰か留まりたる、
など言ふ御氣色、心強く思し成すべかるめれど、御顔の色も、平生にあらぬ様に、いみじく堪へ難げに、御涙の止まらぬを、大將は、道理に悲しく見奉り給ふ、
(夕) 御物怪などの、紫上の御心亂らむとて、出家の事を、思召し寄らすることやあらむ、然らば、とてもかくても御本

一日一夜○
觀經に一日
一夜受持
八戒齋一
日一日持
沙彌戒一
日一夜持
具足戒以
此功德廻
向願求生
極樂國と
あり

野分の朝○
大將の微に
紫上を見奉
りしこと野
分帖にあり
御聲を○河

意の事は、善しき事に候ふなり、一日一夜にても、受戒ことの効能こそ、空しからず候ふなれど、眞に言ふてもかひなく成り果てさせ給ひて後の、御髪ばかりを落させ給ひても、特別なる未來の御光ともならせ給はざらむものながら、目前の悲哀ばかり勝るやうにて、いかゞ候ふらむ、
と申し給ひて、御忌に籠り侍ふべき志ありて、退出でざる僧の、其人彼人など召して、紫上の、御落飾の事ども、然るべく、大將ぞ執り行ひ給ふ、さて大將は、御心の中に、年來自分は、紫上に對し奉りては、何やかやと負ふけなき心はなかりしがど、如何ならむ世に、彼の野分の朝、微かに見奉りしばかりも見奉らむ、微かにも御聲をなりとも聞かぬことよ、など、心にも離れず思ひ渡りつるものを、聲は終に聞かせ給はずなりぬるにこそ

海抄に聲を
だに聞か
別る云々
とあり

夕霧大將密
看紫上遺
骸

はあるめれ、空しき御骸にても、今一度見奉らむの志叶ふべき
折は、唯今より外には、いかでかあらむと思ふに、包みもあへ
ず泣かれて、女房のある限り騒ぎ惑ふを、大將は、

(夕) あな、喧、暫時、

と鎮め顔にて、御几帳の帷を、物言ふ紛れに、引き揚げて見給
へば、ほのくくと明け行く光も、覺束なければ、院は、御燈臺
近く挑げて見給ふに、亡き紫上の、飽かず美しげに、愛甚く清
らに見ゆる御顔の、可惜しさに、院はこの大將の、かく覗き給
ふを、見るく強に隠さむの御心も思されぬなるめり、
(源) かく何事も、また變らぬ氣色ながら、限りの様は、著か
りけるこそあへなけれ、
とて、御袖を顔に押當て給へる間、大將も涙に昏れて、目も見

え給はぬを、強ひて涙をまぼり上げて見奉るに、却て飽かず悲
しきこと比類なきに、眞に心惑ひも爲ぬべし、御髪の唯打遣ら
れ給へる程、澤山く清らにて、少しも亂れたる氣色なく、艶々
と美しげなる様ぞ限りなき、燈火の、いと明き、御顔の色は、い
と白く光るやうにて、とかく修飾ひ打紛らはすことありし、現
の御持成よりも、今かく言ふかひなき様に、何心なくて打臥し
給へる御有様の、飽かぬ所なしと言はむも更なりや、斜にさへ
もあらず、比類なく美しきを見奉るに、我が死にも入るべき魂
魄の、やがてこの御亡骸に留まらなむと思ほゆるも、是非なき
事なりや、これまで奉仕り馴れたる女房などの、この悲哀に、物
覺ゆるものもなければ、院ぞ何事も思し分かれず思さるゝ御心
地を、無理に鎮め給ひて、最後の御事ども爲給ふ、古も、夕顔、

火葬紫上
骸を見つゝ
○古今集に
空蟬はから
を見つゝも
慰めつ深草
の山烟だに
立てとあり

葵、上などの、悲しと思す最後の事ども、數多見給ひし御身なれど、いとかく今日の如く、身に掛け下り起ちては、また知り給はざりけることを、凡て來し方、行く末、比類なき心地し給ふやがてその日、とかく葬歛め奉る、これも限りありけることなれば、骸を見つゝも、え過ぐし給ふまじかりけるぞ、心憂き世の中なりける、遙々と廣き野の所もなく、人々立込みて、限なく嚴重めしき作法なれど、いと果敢なき火葬の烟にて、程なく昇り給ひぬる、例の事なれど、あへなくいみじ、院は物も覺え給はず、空を歩む心地して、侍人の肩に懸りてぞおはしましけるを、見奉る人も、あれほど嚴貴しき御身にて、御徒歩にてましくけるよ、と、物の心知らぬ下衆さへ、泣かぬものはなかりけり、御葬送の女房どもは、況して夢路に惑ふ心地して、車よ

りも轉び落ちぬべきをぞ、人々持て扱ひける、院は御心に、昔大將の御母君、葵、上、失せ給へりし時の、曉を思ひ出るにも、彼の時は、尙物覺えけるにやあらむ、月の顔の明かに覺えしを、今夜は唯昏れ惑ひ給へるばかりなり、さて紫、上は、十四日に失せ給ひて、この御葬送は、十五日の曉なりけり、歸途には、日はいと花やかに差上りて、野邊の露も隠れたる隈なくて、院は世の中思し續くるに、いと厭はしくいみじければ、かく紫、上に後るとても、尙幾世かは經べき、かゝる悲哀さの紛れに、昔よりの出家の御本意も遂げまほしく思ほせど、紫、上ゆるるに、出家したりと、心弱き後の誹謗を思せば、此間を過ぐして、出家せむと爲給ふに、胸のせきあぐるぞ堪へ難かりける、大將も、この紫上の御忌に籠り給ひて、寸間にも退出で給はず、朝夕近く伺候

ひて、御氣の毒にいみじき院の御氣色を、道理に悲しく見奉り給ひて、萬事に慰め申し給ふ、風野分たちて吹く夕暮に、大將は、昔の野分の折の事、思し出で、微かに見奉りしものを、と戀しく覺え給ふに、また終焉の折、亡骸を見奉りしことの、夢の心地せし、など、人知れず思ひ續け給ふに、堪へ難く悲しければ、人目には、さやうにも見られじ、と、包みて、阿彌陀佛阿彌陀佛と、引き給ふ珠數の數に紛らはしてぞ、涙の玉は持て消し給ひける、

古の云々○昔の野分の佛の戀しきに最後の夢の如き佛いよく戀しく悲しとなり

(夕歌) 古の、秋の夕の、戀しきに、今はと見えし、明闇の夢、ぞ名残さへ憂かりける、尊き僧ども伺候はせ給ひて、七々日の定まりたる念佛をばそれとして、法華經など、讀誦せさせ給ふ方々、いと哀なり、院は臥しても起きても、涙の乾る世なく、霧

塞りて、明かし暮らし給ふ、さて御心に、古よりの御身の有様、思し續くるに、鏡に見ゆる影を始めて、人には特別に勝れたりける身ながら、幼稚さ程より、父母に別れ奉りて、悲しく常なき世を思ひ知るべく、佛などの勧め給ひける身を、心強く過くして、終に來し方、行く先も、例あらじと覺ゆる、悲哀さをば見つるかな、今ははや此世に後めたき事残らぬことになりぬ、一途に佛道に赴きなむに、障り所あるまじきを、いとかく鎮めむ方なき心惑にては、願はむ道にも入り難くや、と、心疾ましきを、この思ひ少し斜に忘れさせ給へ、と、阿彌陀佛を念じ奉り給ふ、所所の御吊問、内裡を始め奉りて、例の作法ばかりにはあらず、様様にいと繁く御吊問申し給ふ、院には今度の事、思し染めたる心の外には、何事も目にも耳にも留まらず、心に係り給ふこと

内裡以下吊問紫上

あるまじけれど、人には毫々しき様には見られじ、今更に我世の末に、頑固しく、紫、上ゆるゑに、心弱き惑ひにて、世の中ぞ出家きにける、と、流れ留まらむ名を思し包むにぞ、身をば心に任せぬ歎息をさへ、打添へ給ひける、致仕、大臣、哀をも折過ぐし給はぬ御心にて、かく世に比類なくものし給ふ紫、上の、果敢なく失せ給ひぬことを、口惜しく哀に思して、いと屢吊ひ申し給ふ、さて大臣は、心に、昔大將の御母葵、上の大臣の妹失せ給へりしも、この頃の事ぞかし、と、思し出るに、いと物悲しく、その折、彼の葵、上を惜み申し給ひし父母も、今は亡くなり給ひて、其他、多くも失せ給ひにけるかな、後れ先つ間なき世なりけりや、など蕭條なる夕暮に、詠め給ふ空の景色も、尋常ならねば、御子の藏人、少將して、御文奉り給ふ、哀なる事、詳細に申し給ひて、そ

の端に、

(致歌) 古の、秋さへ今の、心地して、濡れにし袖に、露ぞ置き添ふ、

とあり、院は御覽じて、御心に、折からに萬の舊事、思し出られて、何となく葵、上の亡くなりし秋の事、戀しく搔き集め、溢るる涙を拂ひもあへ給はぬ紛れに、御返歌、

(源歌) 露けさは、昔今とも、思ほえず、大方秋の、よこそつらけれ、

院は、かく物のみ悲哀しき御心のまゝならば、尙細々と書き成し給ひて、大臣の待ち取り見給ひては、心弱くも思されむ程に、目留め給ひつべき大臣の御心様なれば、大方に、宜き程に用捨して、

古の云々○
葵上の逝去
さへ此頃の
心地して袖
を濡せしに
今又紫上の
逝去に涙を
添ふとなり

露けさは云
云○愁傷は
昔も今も思
ひ別かねど
唯秋が悲し
きとなり

薄墨○葵上の逝去に源氏輕服着け給ふ時の歌に限りあれば薄墨衣あさけれど涙ぞ袖を淵となしける葵帖に出づ

(源文) 度々の、等閑ならぬ御吊問の、重りぬることよ、と悦び申し給ふ、薄墨と言ひしよりは、今少し濃色に書きて奉れり、さて世の中に、幸福ありて、愛甚き人も、愛なく大方の世に妬まれ、善きにつけても、心の限り驕りて、人の爲、迷惑しき人もあるを、紫、上は、怪しきまで、疎漫なる人にも承引かれ、果敢なく爲出で給ふことも、何事につけても、世に褒められ、奥ゆかしく、折節につけて、藤々じく、世にまたと有り難かりし人の御心ばえなりかし、さやうにも縁あるまじき、大凡の人さへ、その當時は、風の音、虫の聲につけて、涙を落さぬはなし、況して一回なりとも、微かに見奉りし人は、さてもくと思ひ慰むべき世なし、特に年來睦しく奉仕り馴れたる女房達は、後れ奉りては、暫時も残れる命恨めしきことを、歎

枯れ果つる云々○この秋に逝去し給へれば紫上の秋を愛で給はざりしも道理と今更知りたりと詞にかけて言ひなしたり紫上は春を愛で中宮は秋を好み給ふこと前にありのぼりにし云々○后位

きつゝ、尼になり、此世の外、山住などに、思ひ立つもありけり、冷泉院の後の宮、秋好、中宮よりも、哀なる御消息絶えず、盡せぬことども申し給ひて、
(秋歌) 枯れ果つる、野邊を憂しとや、亡き人の、秋に心を、留めざりけむ、今ぞ道理知られ候ひぬる、とありけるを、院は、物覚えぬ御心にも、打返し差置き難く、手に取りて見給ふ、言ふかひありて面白からむ方の慰めには、この中宮ばかりこそおはしけれ、と、院は少許物紛るゝやうに、思し續くるにも、涙の溢るゝを、袖の暇なく、え搔き遣り給はず、
(源歌) のぼりにし、雲るながらも、顧みよ、我あきはてぬ、常ならぬ世に、
御返事、表紙に押包み給ひても、暫時打詠めておはす、さて院

に昇り給ひし御身も我が飽き果てたる無常の世を哀み顧み給へとて飽に秋をかけたり

今日や〇河海抄に詫びつゝもきのふばかりは過ぐしてき今日や我世の限りなるらむとあり

は、物心剛直にも思されず、我ながら、殊の外に毫々しく思し知らるゝ事、多かる紛らはしに、女方にぞおはします、佛の御前に、人繁からず持成して、長閑に行法ひ給ふ、千歳を諸共にと思し、がど、限ある別ぞ、いと口惜しき業なりける、今は蓮の露も、他事に紛るまじく、後世の勤行をと、一途に思し立つことと撓みなし、されど今俄に出家しては、と、外聞を遠慮り給ふぞ、味氣なかりける、御追善の事ども、此頃の愁傷に、院は、確乎しくも言ひ置きつることなかりければ、夕霧、大將ぞ、執り持ちて奉仕り給ひける、院は、今日やとばかり、我身も心遣ひせられ給ふ折多かるを、果敢なくて、年の暮れけるも、夢の心地ばかりす、明石、中宮なども、思し忘るゝ時の間なく、紫、上をば戀ひ申し給ふ、

第四十帖 幻

此帖は源氏五十二歳の春より冬至る
春の光〇古今集に百千鳥轉つる春は物毎に改まれども我ぞふりゆく
とあり

螢兵部卿宮訪三六條院

我が宿は云云〇我宿は春を愛し花を弄びし紫上も亡くなりしに何とてその春を尋ね來給ひ

六條院は、春の光を見給ふにつけても、いと昏れ惑ひたるやうにはばかり、御心一つは、悲しさの改まるべくもあらぬに、外には例のやうに、人々御年始とて、参り給ひなどすれど、院は御心地惱ましき様に持成し給ひて、御簾の内にはかりおはします、螢兵部卿、宮渡り給へるにぞ、唯打解けたる方にて、對面し給はむとて、御消息申し給ふ、

(源歌) 我が宿は、花もてはやす、人もなし、なに、か春の、尋ね來つらむ、

兵部卿宮、打涙催み給ひて、
(螢歌) 香をとめて、來つるかひなく、大方の、花の便りと、言

しとなり
香をとめて
云々〇大方
の花を見む
とて来るや
うに思召す
が實は君の
心を慰めむ
とて來りた
るなりとな
り

六條院哀
悼紫上

ひやなすべき、
と返歌し給ひて、紅梅の下に、歩み出で給へる御様の、いと懐
かしきにぞ、院はこれより外に、我が宿の花を見はやすべき人
なくやある、と見給へる、花は微かに咲き懸りつゝ、面白き程
の香なり、春の始なれど、御樂遊もなく、例に變りたること多
かり、女房なども、年輩經にけるは、墨染の服色濃かにて着つ
つ、悲しさも、喪服の色と共に改め難く、思ひ醒ますべき世な
く、紫上を戀ひ申すに、院は絶えて御方々にも渡り給はず、さ
れば女房どもは、紛れなく見奉るを、慰めにて奉仕る、年來眞
實に、御心留めてなどはあらざりしがど、時々は見放ためやう
に思したりつる女房ども、今は却てかゝる寂しき院の御獨寢に
なりては、いと大様に待遇し給ひて、夜の御宿直などにも、此

彼と數多の女房ども、御座所の邊引避けつゝ、伺候はせ給ふ、徒
然なるまゝに、院は古の物語など爲給ふ折々もあり、名残なき
御聖心の深く成り行くにつけても、彼の臙、尙侍、女二宮などの
事につけ、さやうに末遂けてとは思さざることなれど、紫上の、
中頃物恨めしく思したる氣色の、時々見え給ひしなどを思し出
るに、何とて尙侍の戯れにても、また女二宮の眞實に氣の毒な
ることにつけても、さやうなる心を見せ奉りけむ、何事にも、紫
上の臙々じくおはせし御心ばえなりしかば、人の深き心も、い
と能く見知り給ひながら、怨じ果て給ふことはなかりしがど、僅
齋院、臙、尙侍などの事につけて、紫上の、一應づゝは、如何な
らむとすらむと思したりしに、少しにても心を亂り給ひけむこ
との、いと氣の毒に、後悔しく覺え給ふ様、院は胸よりも餘る

女三宮の云
云○女三宮
始めて六條
院へ渡り給
ひしこと若
菜帖の上に
あり

夢にも○細
流抄に逢ふ
ことも今は
なきれの夢
ならでいつ
かは君をま
たは見るべ
きとあり

心地し給ふ、その折の事情をも知りて、今も近く奉仕る女房どもは、ほのく申し出るもあり、女三宮の、六條院へ渡り始め給へりし間、その折は、紫、上は更に顔色にも出し給はざりしが、事、事に觸れつゝ、味氣な業よと思ひ給へりし氣色の、哀なりし中にも、雪降りたりし曉に、立ち休らひて、院の御身も冷え入るやうに覺えて、空の景色烈しかりしに、紫、上の、いと懐かしく、大様なるものながら、袖の甚く泣き濡らし給へりけるを、引匿して、強ひて紛らはし給へりし間の用意などを、終夜、夢にも、または如何ならむ世にかは見む、と、思し續けらる曙にしも、曹司に下るゝ女房なるべし、

(女房) いみじうも積りにける雪かな、
と言ふを、聞き付け給へる、院は唯當時の心地するに、御傍の

浮世には云
々○其際に
も我は身を
捨てむと思
ひしも人目
を憚りて打
過ぎぬとて
行に雪をか
けたり

六條院縁居
談ニ女房

袖の柵○細
流抄に飛鳥

寂しきも、言ふ方なく悲し、

(源歌) 浮世には、ゆき消えなむと、思ひつゝ、思ひの外に、尙ぞ程經る、

例の御傍寂しき紛らはしには、御手洗召して行法ひ給ふ、埋みたる火起し出で、御火桶參らす女房中納言君、中將君など、御前近く御物語申す、院は御心に、獨寢、平生よりも寂しかりつる夜の様な、遁世して、かく獨住にても、いと能く澄ましつべかりける世を、果敢なくも關係ひけるかな、と打詠め給ふ、我まで打捨てなば、この女房達の、いと、歎き詫びむことの、哀に氣の毒なるべき、など、見渡し給ふ、かくて院は、忍びやかに行法ひつゝ、經など讀み給へる御聲を、女房達は、等閑に思はむことにてさへ、涙止まるまじきを、況して袖の柵せきあへぬ

川心の内に
流るれば袖
の柵いつか
よどまむと
あり

まで、哀に朝夕見奉る心地、盡せず思ひ申す、院は、
(源) 此世につけては、飽かず思ふべきこと、専あるまじく、我
貴き身には生れながら、また人よりも、特別に口惜しき契に
もありけるかな、と、思ふこと絶えず、世の常なく憂きことを
知らすべく、佛などの掟て給へるこの身なるべし、それを強
ひて知らぬ顔に長生ふれば、かく臨終の夕近き末に、紫、上の、
いみじき憂き終焉を見つるに、宿因の程も、自分の心の悲哀
の限りも、残りなく見果て、出家せむも心安きに、今ぞ露
ばかりの羈絆もなくなりたるを、此彼、かくて以前より
も勝りて見馴らす女房達の、今はとて、いよく行き別れむ
間こそ、今一段の心亂れぬべけれ、いと果敢なし、悪かりけ
る心の程かな、

とて、御目押拭ひ匿し給ふに、紛れずやがて溢る、御涙を、見
奉る女房達、まして我が涙せきとめむ方なし、さて院の御出家
に、打捨てられ奉りなむが、憂はしきを、各詞に打出てまほし
けれど、然もえ申さず、嗚咽かへりて止みぬ、かくばかり歎き
明かし給へる曙、詠め昏らし給へる夕暮などの、蕭條なる折々
は、彼の普通には思したらざりし女房中納言君、中將君を、御
前近くて、かやうの御物語などし給ふ、中將君は、また小くよ
り見馴れ給ひしを、いと忍びつゝ、見過ぐし給はずやありけむ、中
將君は、いと傍痛きことに思ひて、馴れも申さざりけるを、紫、
上亡せ給ひて後は、却て好色の方は離れて、御心に、この中將
君は、紫、上の、他人より特別に可愛きものに、心留め思したり
しものを、思し出るにつけて、彼の紫、上の御形見の筋をぞ、愛

馬鬣松○文
選に馬鬣松
と書きてう
なひまつと
訓めり馬の
鬣の如く築
きたる塚の
上に生ひた
る松にて亡
き人の形見
の意なり

憐れと思したる、中將、君は、心ばせ容貌なども見善くて、馬鬣松
に覺えたる氣容、尋常ならむよりは藤々しと思す、さて院は、疎
き人には、更に見え給はず、公卿なども、睦しき限り、または
御兄弟の親王達など、常に参り給へれど、對面し給ふこと專な
し、御心に、人に對面せむ問ばかりは、賢しく思ひ鎮め、心收
めむと思ふとも、月頃に耄にたらむ身の有様、頑固しき辟言交
りて、末の世の人にも、持て惱まれむ後の名さへ、うたてある
べし、思ひ耄れてぞ、人にも見えざるなる、と言はれむも、同
じ事なれど、尙音に聞きて、思ひ遣ることの片輪なるよりも、見
苦しき事の目に見るは、此上く際勝りて愚痴なりと思せば、御
子の大将などにさへ、御簾を隔て、ぞ、對面し給ひける、かく
院は、心變りし給へるやうに、人の言ひ傳ふべき頃ほひをなり

涙の雨○細
流抄に墨染
の君が袂は
雲なれや絶
えず涙の雨
とのみふる
とあり

明石中宮参
内裡

六條院感
四季風物
追悼紫上

とも、思ひ閑めてこそは、出家もせめ、と、念じ過ぐし給ひつ、
浮世をもえ背き遣り給はず、御方々に、稀にも打微めき給ふに
つけては、先いとせき難き、涙の雨のみ降り勝れば、いと是非
なくて、何方にも覺束なき様にて過ぐし給ふ、明石中宮は、内
裡に参らせ給ひて、二宮宮をぞ、院の物寂しき徒然の御慰めに
は、連れておはしませ給ひける、三宮は、
(三) 祖母の言ひしかば、
とて、二條院の、對の御前の紅梅、取別きて後見歩き給へるを、
院は、いと愛憐と見奉り給ふ、
二月になれば、梅の木どもの盛りになるも、未しきも、梢面白
しく霞渡れるに、彼の御形見の紅梅に、鶯の花やかに啼き出で
たれば、院は立ち出で、御覽ず、

植ゑて見し
云々〇花植
ゑし人は亡
き宿にも驚
は時を忘れ
す來居るに
つけてその
亡き人を思
ひ出るとな
り
鳥の音も〇
河海抄に飛
ぶ鳥の聲も
聞えぬ奥山
の深き心を
人は知らな
むとあり

（源歌） 植ゑて見し、花のあるじも、なき宿に、知らず貌にて、
來居る鶯、

と、嘯き歩かせ給ふ、春深く成り行くまゝに、六條院の、春殿
の御前の有様、古に變らぬを、愛で給ふ方にはあらねど、靜心
なく、何事につけても、胸痛く思さるれば、大方の世の外はや
うに思されて、鳥の音も、聞えざらむ山の末、いとゆかしくば
かり、成り勝り給ふ、山吹などの、快よげに咲き亂れたるも、率
爾に露けくばかり見成され給ふ、他の花は、一重散りて、八重
咲く花櫻、盛り過ぎて、朱櫻は開け、藤は後れて色着きなどこ
そはするめるを、その遅き速き、花の心を、能く別きて、色々
を盡して、紫上の植ゑ置き給ひしかば、時を忘れず匂ひ満ちた
るに、三宮、

覆ふばかり
の〇細流抄
に大空にお
ほふばかり
の袖もがな
春咲く花を
風にまかせ
じとあり

（三） 我が櫻は咲きにけり、いかで久しく散らさじ、木の廻に
几帳を建て、帷を上げずば、風もえ吹き寄らじ、
と賢く思ひ得たりと思ひて言ふ顔の、いと美しきにも、院は打
笑まれ給ひぬ、
（源） 覆ふばかりの袖求めむ人よりは、いと賢く思し寄り給
へりかし、
など、院はこの宮ばかりをぞ、翫弄に見奉り給ふ、
（又） 君に馴れ申さむことも、残り少しや、命といふもの、今
暫時關係ふべくも、對面は得あらじかし、
とて、例の涙催み給へれば、三宮は、
（三） 祖母の言ひしやうに、残り少くと、院も曲々しう言ふこ
とよ、

無紋〇平絹の直衣なり

今はとて云々〇紫上の心留めて花木を植ゑし所を我出家しなば荒し果てむとなり
六條院訪
女三尼宮

とて、伏目になりて、御衣の袖を引き爪探りなどしつゝ、紛らはしおはす、院は角の間の勾欄に押懸りて、御前の庭をも、御簾の内をも、見渡して詠め給ふ、女房なども、紫上の御形見の喪服かへぬもあり、また除服せるもあれど、綾など花やかなるは着ず、院の御直衣も、色は尋常なれど、故意に窶して、無紋を着給へり、御居間の御修飾なども、いと疎略に事省きて、寂しく物心細げに、蕭條なれば、院、

(源歌) 今はとて、荒らしやはてむ、亡き人の、心留めし、春の垣根を、

と言ひて、人遣りならず悲しく思さる、いと徒然なれば、尼宮女三の御方に渡り給ふに、三宮宮も、人に抱かれておはしまし、此方の若君君と、走り遊び、花惜しみ給ふ心ばえども、深

からず、いと幼稚し、尼宮は佛の御前にて、經をぞ讀み給ひける、何ばかり深く思し取れる御道心にもあらざりしがど、此世に恨めしく御心亂るゝこともおはせず、長閑なるまゝに、紛れなく行法ひ給ひて、一方に思ひ離れ給へるも、いと羨まし、院は、かく淺き女の御志にさへ、後れぬることと、口惜しく思さる、閑伽の花の夕榮して、いと面白く見ゆれば、春に心寄せたりし、紫上もましまさで、花の色不用じくばかり見成さるゝを、院は、

(源) かゝる花は、佛の御節にてこそ見るべかりけれ、と言ひて、

(又) 南の對の山吹こそ、猶世に見えぬ花の様なれ、房の大ききなどよ、品高くななどは掟てざりける花にやあらむ、花やか

植ゑし人〇
細流抄に色
も香も昔の
ごとに匂へ
ども植ゑけ
ん人の影ぞ
戀しきとあ
り

谷には春も
〇細流抄に
光なき谷に
は春もよそ
なれば咲き
てとく散る
物思ひもな
しとあり

に賑はしき方は、いと面白きものにぞありける、植ゑし人な
き、春をも知らず貌にて、常よりも匂重ねたるこそ哀に候へ、
と言ふ、尼宮は、

(三) 谷には春も、

と何心もなく申し給ふを、院は事もこそあれ、物思もなしとは、
心憂くも言ふことかな、と、思さるゝにつけては、その事の然ら
でもありなむかし、と、思ふに、故紫、上は、かゝる果敢なきこと
につけても、違ふ節なくとも終にしがな、と、幼稚かりし程より
の御有様を、いで違ふ節は何事ぞやありし、と、思し出るに、ま
つその折、かの折、才々しく藤々しく、餘情多かりし心様、持
成し、言の葉、一通ならざりし事ばかり、思ひ續けられ給ふに、
例の涙の脆さは、ふと溢れ出でぬるも、いと困し、

六條院訪
明石上

夕暮の霞、たとへしく、面白き程なれば、院はやがて明石、上
の御方に渡り給へり、久しく差覗き給はぬに、明石、上は、覺え
なき折なれば、打驚かるれど、様能く、氣容奥ゆかしく持てつ
けたれば、院は、猶こそ人には勝りたれ、と、見給ふにつけては、
また紫、上の、かう様にはあらでこそ、由緒をも持成したまへり
しか、と、思し比較べらるゝにも、その面影に、戀しく悲しさの
み勝れば、人の、善きを見るにつけ、悪しきを見るにつけても、
如何にして慰むべき我が心ぞ、と、いと比較べ困し、さて明石、上
の御方にては、長閑に昔物語などし給ふ、院、

(源) 人を愛憐と心留めむは、いと悪かるべきことゝ、古より
思ひ得て、凡て如何なる方にも、此世に執心留まるべきこと
なくて、心遣ひをせしに、大方の世につけて、身の徒に落魄

命をも〇河
海抄に身は
捨てつ心を
だにもほふ
らさじ終に
はいかな
ると知るべ
くとあり

れぬべかりし、彼の須磨の謫居の頃など、右様左様に思ひ廻
らし、に、命をも自ら捨つべく、野山の末に零落らかさむに、
別段なる障害あるまじくぞ思ひ成りしを、末の世に、今は終
焉の間近き身にて、あるまじき羈絆多く關係ひて、今まで、
かくて過ぐしてけるが、心弱く待遠しきことよ、
など、さして紫、上の事の、一筋の悲しさにはかりは言はねど、そ
の心に思したる様の、道理に心苦しきを、明石、上は、御氣の毒
に見奉りて、

(明) 大方の人目よりしても、何程の惜しげなき人さへも、心
の内の羈絆、自然多く候ふなるを、況して君には、いかでか
は心安くも、此世を思し捨て給はむ、さやうに淺き御道心
ては、却て輕々しき誹謗さなども、立ち出で、却て不都合

きことなど候ふなるを、今俄に御出家を思し立つことは、御
心の鈍きやうに候ふらむよ、また遂に世間を澄み果てさせ給
ふ方深く候ふらむと、思ひ遣られ候ふてこそ、始めて御出家
も爲給はめ、古の例などを聞き候ふにつけても、思ふ人以後
れて、心に驚かれ、思ふ事に違ふ節あり、世を厭ふ序に、人
は出家するとかいへど、それらは末遂げぬこと多くて、尙悪
きこと、こそ聞き候へ、尙暫時思し閑めさせ給ひて、今上の
皇子皇女達なども、大人びさせ給ひ、明石、中宮の御腹の皇子、
位に備はりて、眞に動きなかるべき御有様に見奉り成させ給
はむまでは、亂れなく候はむこそ、心安くも嬉しくも候ふべ
けれ、
など、いと大人びて申したる氣色、いと見善かり、院は、

心あらば○古今集に深草の野邊の櫻し心あらば今年ばかりは墨染にさげさあり

(源) さやうにまで、思ひ閑めむ心深さこそ、浅く思ひ起したる道心には、劣りぬべけれ、
など、言ひて、昔より物を思ふことなど、語り出で給ふ中に、
(又) 故薄雲、女院の、崩御れ給へりし春ぞ、花の色を見ても、誠に心あらばと覚えし、それは大方の世につけて、美しかりし御有様を、幼稚くより見奉り染みて、然る終焉の悲しさも、人より特別に覚えしなり、自ら取別く志にも、物の哀は、夫婦の中などにも依らぬ業なり、久しく相添ひし紫、上に後れて、心收めむ方なく、忘れ難きも、唯かゝる夫婦の中の悲しさばかりにはあらず、幼少き程より、養育てし有様、諸共に老いぬる末の世に、かく打捨てられて、吾が身も人の身も、思ひ續けらるゝ悲しさの、堪へ難きにぞ、凡て物の哀も、由緒あ

泣くくも云々の何處も假の世なれば無常を感じて泣くく歸りにして假に雁をかけ床

ることをも、面白き筋も、廣く思ひ廻らす方々打添ふこと、浅からずなるにぞありける、
など、夜更くるまで、今昔の物語に、かくてこのまゝ、此方にて明かしつべき夜を、と、思しながら、還り給ふを、明石、上も、物哀に思ふべし、院の、我が御心にも、怪しくもなりにけるかな、と思し知る、それにつけても、院は、また例の御行法に、夜中になりてぞ、晝の御座所に、いと假初に、物に倚り臥し給ふ、翌朝明石、上の御方へ、御文奉り給ふ、その端に、
(源歌) 泣くくも、歸りにしかな、かりの世は、いづくも終の、とこよならぬに、
とあり、明石、上は、心に、昨夜院の宿り給はで、還り給ひし御有様は、恨めしげなりしがど、いとかく昔にもあらぬ様に、思

に常世をか
けたり
雁が居し云
々○紫上の
亡くなり給
ひしより我
方へは少し
もおほしま
さぬとなり

し耄れたる御氣色の、御氣の毒さに、吾が身の事は、差置かれ
て、涙催まれ給ふ、御返歌、

(明歌) 雁が居し、苗代水の、絶えしより、移りし花の、蔭を
だに見ず、

と申し給へり、院は御心に、明石上の、經り難く由緒ある書様
にも、紫上は、最初は生心外しきものに思したりしを、末の世
に、明石、中宮の御腹を養ひ給ひてよりは、紫上は、明石上と、
互に心ばせを見知る同志にて、後安き方には、打頼むべく思ひ
交し給ひながら、またさりとて、一向にはまた打解けず、由緒
ありて待遇し給へりし心掟を、我が外には、人はさやうにも見
知らざりきかし、など思し出づ、さて院は、迫めて物寂しき時
は、明石上には、かやうに唯、大方に打微めき給ふ折々もあり、

花散里調
進更衣装束

夏衣云々○
夏衣に裁ち
更へて涼し
きに事よせ
ていつまで
御思ひの休
まらずとも
今日ばかり
は御思を休
め給へとて
思ひに火を
かけたなり
羽衣の云々
○夏衣に更
るにつけて
は空しき世
の益々悲し
きとて大方
につけてい
へり

昔の御有様のやうに、宿り給ふことは、餘波なくなりたるべ
し、夏の御方花散里より、御更衣の御装束、調進り給ふとて、

(花歌) 夏衣、たちかへてける、今日ばかり、古き思ひも、す
すみやはせぬ、

と申し給ふ、院、御返歌、
(源歌) 羽衣の、薄きに更る、今日よりは、空蟬の世ぞ、いと
ど悲しき、

とあり、
葵祭の日、院は、いと徒然にて、今日は物見るとて、人々心地

快げならむかし、とて、賀茂の御社の有様など、思し遣る、

(源) 女房など、いかに物寂しからむ、里家に忍び出で、祭
見よかし、

さもこそは云々○よるべの水とは神の託り給ふ瓮の水と

など言ふ、女房中將、君、東面に假睡したるを、院は歩みおはして見給へれば、いと細小に、美しき様して、起き上りたり、面つき花やかに、紅み匂ひたる顔、持て隠して、少し脹だみたる髪かみの懸りなど、いと美しげなり、紅くれないの黄きばみたる氣け添そひたる袴はかま萱草色くわんそうじの單ひとへ、いと濃こき鈍色にびいろに黒くろきなど、端正うらなしからず重かさなりて、裳も唐衣からぎぬも、脱ぬぎ滑すべらしたりけるを、とかく引懸ひきかけなどするに、葵あひひを傍かたはらに置おきたりけるを、院は御手おんてに取り給ひて、

(源) 何とかやいひけむ、この名こそ忘れにけれ、と言へば、中將、君、

(中歌) さもこそは、よるべの水に、水草居め、今日の挿頭よ、名さへ忘るゝ、と耻らひて申す、院は實にと、いとほしくて、

いふ義にて我は紫上おはせずして便りを失ひたるに君は名さへ忘れ給ふは餘りなる御事よとなり
大方は云々
○大抵は思ひ捨てたれど其方一人には逢ふといふ名をも罪犯さるべしとて葵に逢罪に摘をかけたなり
千世を云々
○細流抄に色かへぬ花橋にほとぎす千世を

(源歌) 大方は、思ひ捨て、し、世なれども、あふひは名をや、つみおかすべき、

など、一人ばかりは思し放たぬ氣色なり、五月雨は、いと、詠め暮らし給ふより外の事なく、物寂しきに、十餘日の月、花やかに差出でたる、雲間の珍らしきに、夕霧、大將、御前に伺候ひ給ふ、花橋の月影に、いと際やかに見ゆる薰りも、追風懐かしければ、千世を鳴らせる聲も爲なむ、と、時鳥待たる、間に、俄に起ち出る、叢雲の景色、いと生憎にて、仰山しく降り來る雨に添ひて、さと吹く風に、燈籠も吹き惑はして、空闇き心地するに、院は、

(源) 窓を打つ聲、など、珍らしからぬ古言を、打誦し給へるも、折からにやあら

鳴らせる聲
きこゆなり
とあり
窓を打つ○
長恨歌に歌
々殘燈背
壁影蕭々暗
雨打窓聲
とあり
妹か垣根○
細流抄にひ
とりして聞
くは悲しき
時鳥妹か垣
根に音なほ
せばやとあ
り
空を詠め○
古今集に大
空は戀しき
人の鏡かは
物思ふごと
に詠めらる
らむとあり

む、妹が垣根に、音なほせまほしき御聲なり、

(源) 獨住は、別段に變ることなけれど、怪しく物寂しくこそ
ありけれ、深き山住せむにも、かくて身を習慣したらむは、此
上なく心澄みぬべき業なりけり、

など言ひて、

又 女房よ、大將のおはすに、此所に菓子など參らせよ、家
司ども召さむも、仰山しき程なり、

など言ふものゝ、御心には、空を詠め給ふ御氣色の、盡せず御
氣の毒なれば、大將は心に、かくばかり思し紛れずば、御行法
にも、御心澄まし給はむこと、難くやあらむ、と、見奉り給ふ、ま
た心に、故紫、上は、我は微かに見し御面影さへ、忘れ難きを、況
して、院の、かく戀ひ思し給ふも、道理ぞかし、と、思ひ居たり、

(夕) 昨日今日と思ひ候ふ間に、故紫、上の御一周忌も、漸々近
くなり候ひにけり、いかやうにか掟て思召すらむ、

と申し給へば、院は、

(源) 何ばかり尋常に越ゆることはものせむ、彼の紫、上の志し
置かれたる、極樂の曼陀羅など、此度ぞ供養すべき、經など
も數多爲置かれたるがありけるを、某の僧都、皆その心委細
しく聞き置きたるなれば、またこれに加へて爲べき事どもは、
彼の僧都の言はむに従ひてぞものすべき、

など言ふ、大將、

(夕) かやうの事ども、紫、上には、元より取立で、思し掟てけ
るは、後安き業なれど、現世には、假始の御契なりけりと見
給ふには、形見といふばかり、此世に留め申し給へる御子さ

へものし給はぬこそ、口惜しく候ひけれ、
と申し給へば、院、

(源) それは紫、上ばかりに限らず、命長き人々にも、さやうなる子といふものぞ、大方少かりける、これも全く吾身の宿因の口惜しさにこそあれ、其方にこそは、御子數多ものして、門は廣げ給はめ、

など言ふ、院は何事につけても、紫、上ばかり戀しく思ひ出でられて、忍び難き御心弱さの慎ましくて、過ぎにし事、甚くも言ひ出でぬに、待たれつる時鳥の、微かに打啼きたるも、いかに知りてかと、聞く人尋常ならず、院は、

(源歌) 亡き人を、忍ぶるよひの、村雨に、濡れてや來つる、
山時鳥、

いかに知りてか○細流抄に古の事語らへば時鳥いかに知りてかふる聲になくとあり

亡き人を云々○亡き紫上を戀ひ慕ふて來し時鳥かとなり時鳥云々○時鳥よ故郷の花橋は今が盛なりと紫上に言傳せよとなり

とて、いとゞ空を詠め給ふ、大將は、
(夕歌) 時鳥、君につてなむ、故郷の、花橋は、今ぞ盛りと、と申す、女房なども、多く言ひ集めたれど、こゝには止めてえ書かず、大將は、やがて御宿直に伺候ひ給ふ、院の寂しき御獨寢の、御氣の毒なれば、時々かやうに伺候ひ給ふを、紫、上のおはせし世は、いと氣遠かりし院の御座所の邊の、今は甚くも離れぬなどにつけて、大將は心に思ひ出でらるゝことゞも多かり、いと暑き頃、院は涼しき方にて、詠め給ふに、池の蓮の盛りなるを見給ふに、いかに多かるなど、まづ思し出でらるゝに、毫々しくて、つくぐとおはする間に、日も暮れにけり、蜩の聲、花やかなるに、御前の瞿麥の夕榮を、獨ばかり見給ふには、實にぞかひなかりける、

いかに多かる○河海抄に悲しきぞ勝りにまさる人の身にいかに多かる涙なるらむとあり

瞿麥○細流抄に我のみや哀と思はむきりくす鳴く夕蔭の大和撫子とあり
つれなくと云々○我が泣く夏の日を鯛もまた怨みがましく打添ひて啼くことよとなり
夕殿に○長恨歌に夕殿螢飛思悄然孤燈挑盡未成睡とあり
夜を知る云々○螢の火

(源歌) つれなくと、我が泣き暮らす、夏の日を、かごとがましき、虫の聲かな、
螢のいと多く飛び違ふも、夕殿に螢飛でと、例の古言も、かゝる筋にはばかり、口馴れ給へり、
(又歌) 夜を知る、螢を見ても、悲しきは、時ぞともなき、おもひなりけり、

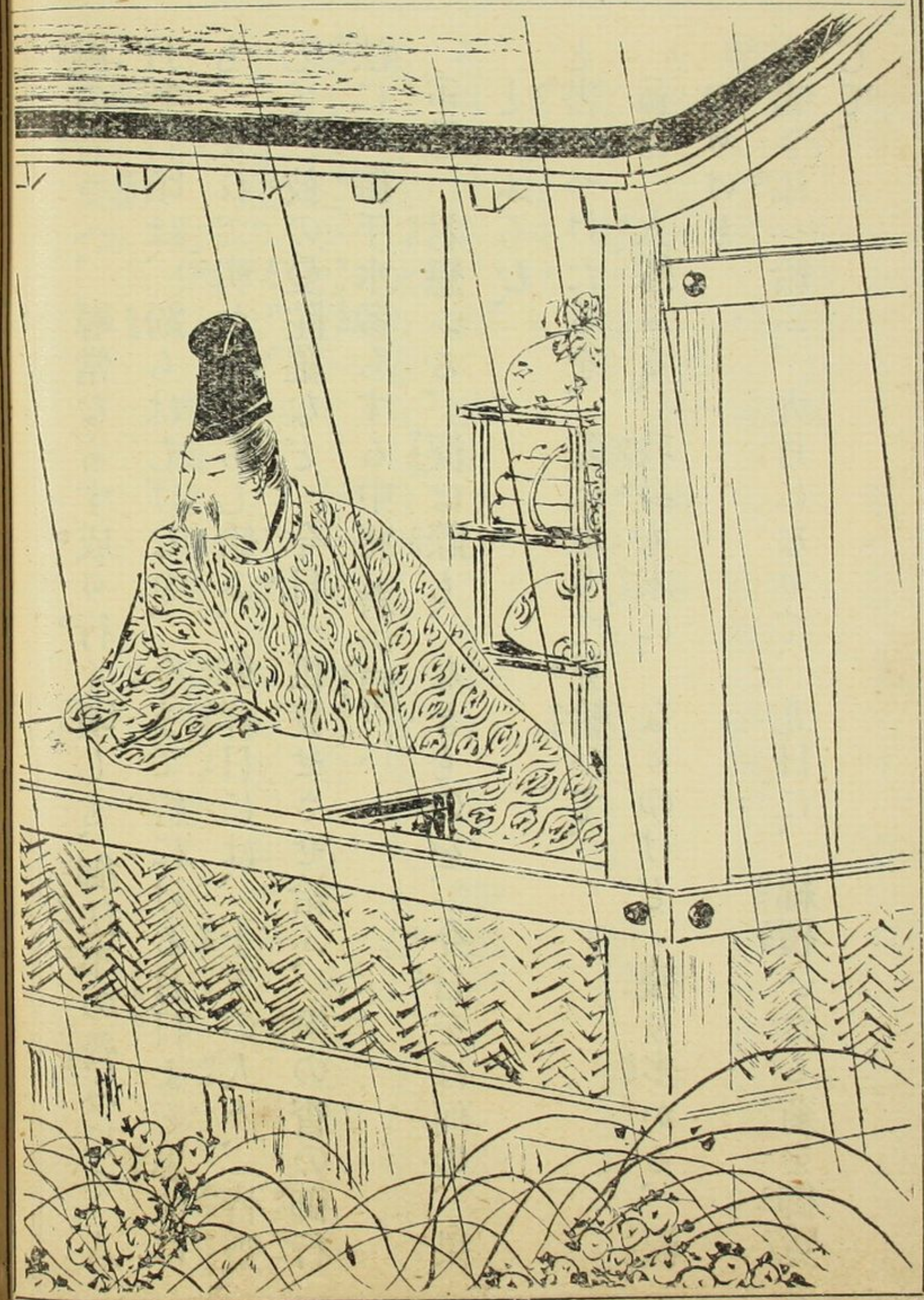
七月七日も、例に變りたること多く、院は御樂遊なども爲給はず、徒然に詠め暮らし給ひて、星合見る人もなし、また夜深く、院は獨起き居給ひて、妻戸押し開け給へるに、前栽の露いと繁く、渡殿の戸より透りて見渡さるれば、出で給ひて、
(又歌) 七夕の、逢瀬は雲の、餘所に見て、別れの庭に、露ぞ置き添ふ、

は夜のみ知れど我が思は書夜の差別なきが悲しきとて思に火をかけたり
七夕の云々
○今年は紫上の長別によりて星合の空をも見す唯星の別れの今朝の庭に我泣く涙の露をぞ置き添へたるとなり
風の音さへ○瞬花抄に秋はなほ夕まぐれこそたいなられ云々とあり

風の音さへ、尋常ならず成り行く頃しも、御法事の営みにて、八月朔日頃は、紛らはしげなり、今まで經にける月日よと思すにも、呆れて明かし暮らし給ふ、御祥日には、上下の人々、皆齋して、彼の曼陀羅など、今日ぞ供養せさせ給ふ、例の宵の御行法に、御手水參らする中將、君の扇に、
(中歌) 君戀ふる、涙は際も、なきものを、今日をば何の、果といふらむ、
と書きつけたるを、院は取りて見給ひて、
(源歌) 人戀ふる、我身も末に、なりゆけど、残り多かる、涙なりけり、
と書き添へ給ふ、九月になりて、九日に、綿覆ひたる菊を御覽じて、

六條院哀悼
紫上圖

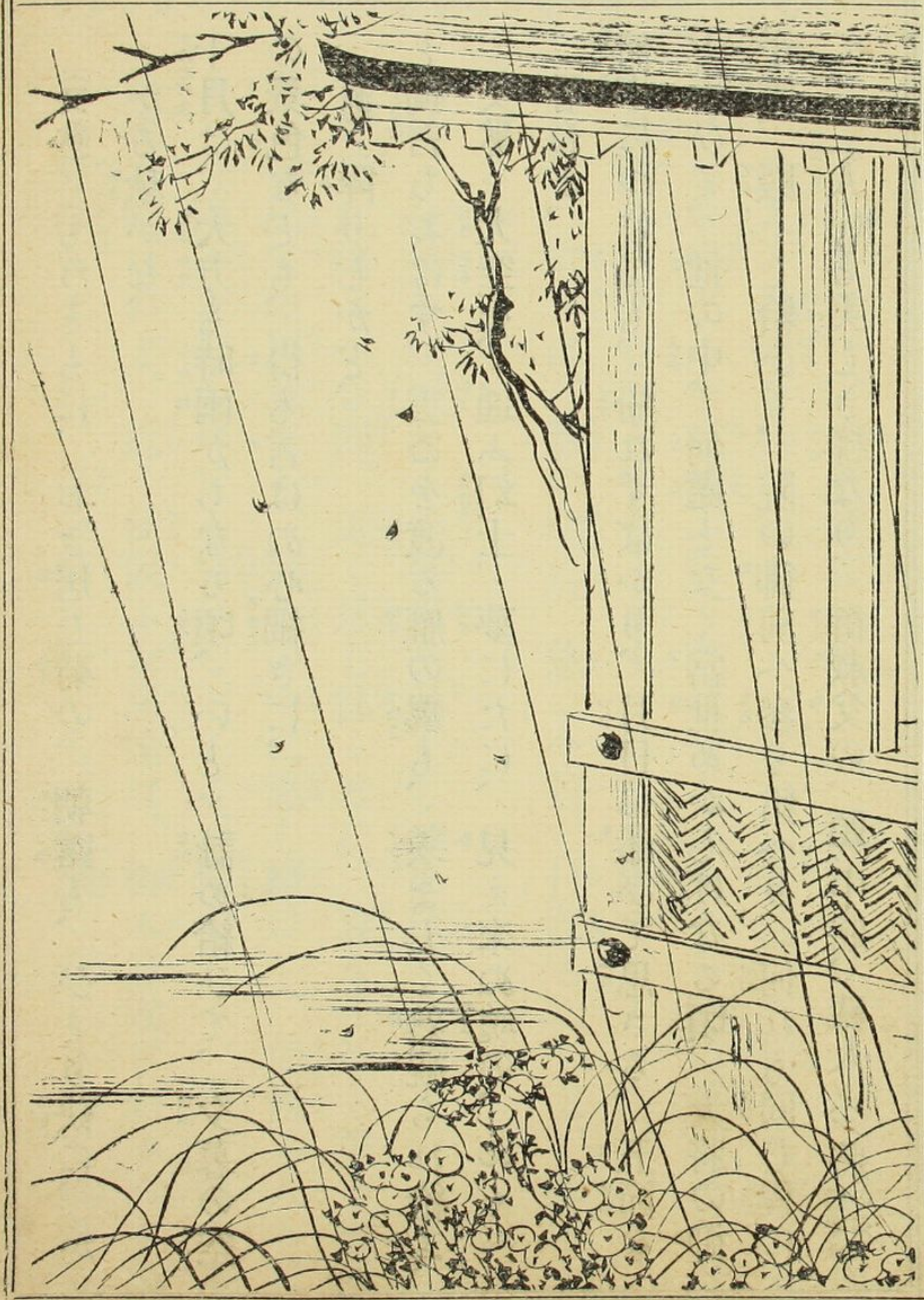
○幻



三百三十一

大空を
かよふ
まぼろ
し夢に
だに見
えこぬ
魂のゆ
くへた
つれよ

○幻



三百三十一

今まで○細
流抄に人の
身も習はじ
もの今ま
でにたくて
も経ぬる世
にこそあり
けれとあり
君戀ふる云
々○紫上を
戀ふる涙は
際限もなき
を今日の一
周忌も何の
果といふべ
きぞとな
り
人戀ふる云
々○我身は
未になりて
残り少きを
涙は益々多
くなるとな
り

又歌 もろともに、おき居し菊の、朝露も、ひとり袂に、か
かる秋かな、
十月は、大方も時雨がちなる頃、いと詠め給ひて、夕暮の空
の景色なども、得も言はぬ心細さに、

(源) 降りしがど、
と獨言ちおはす、雲を渡る雁の翼も、羨ましく熟視られ給ふ、
(又歌) 大空を、通ふ幻士、夢にだに、見え來ぬ魂の、ゆくへ
尋ねよ、

何事につけても、紛れずばかり、月日に添ひて思さる、五節な
どいひて、世の中、何處となく當世めかしげなる頃、大將の御
子達、殿上し給ひて、院の御前へ參り給へり、何れも同じ程に
て、二人いと美しき様なり、御叔父の、頭中將、藏人、少將、雲井雁

もろともに
云々○紫上
と諸共に見
し菊の露も
今年は我一
人の袂にか
かるとてお
きは起に置
をかけた後
後撰集にも
るともにお
き居し菊の
露ばかりか
からむもの
と思ひ懸け
きやとある
によれり
降りしかと
○細流抄に
神無月いつ
も時雨は降
りしかとか
く袖ひつる
折はなかり

など、小忌にて、山藍摺衣の姿ども、清げに見善くて、皆打續
き、二人の君達を持て傳きつゝ、諸共に參り給ふ、何れも思ふ事
なげなる様どもを見給ふに、院は怪しかりし日蔭の折、五節、君
に文遣り給ひしことなど、さすがに思し出でらるべし、
(源歌) 宮人は、豊の明に、急ぐ今日、日蔭も知らで、暮らし
つるかな、

院は、今年をば、かくて堪忍び過ぐしつれば、今はといよく
世を遁れ給ふべき間、近く思し儲くるに、哀なること盡きせず、
漸々御出家の用意ども、御心の中に思し續けて、伺候ふ人々に
も、分限々々につけても言ひなどして、仰山しく、今ぞ限りと
爲成し給はねど、近く伺候ふ女房達は、御本意遂げ給ふべき氣
色と見奉るまゝに、年の暮れ行くも、心細く悲しきこと限りな

きとあり
 大空を云々
 ○雁の空を
 渡るを見て
 彼の楊貴妃
 が魂の在り
 所を尋ね逢
 ひたりし幻
 術士の事を
 思ひてよみ
 たるにて雁
 も幻術士の
 如く大空を
 飛行して紫
 上の魂の在
 所を尋ね來
 よとなり長
 恨歌に魂魄
 曾來夢不入
 とあり
 五節○毎年
 十一月に舞
 姫を奉る節
 會なり委し
 く乙女帖に

し、院は、落留まりて、片輪なるべき女の御文ども、破れば惜しと思されけるにや、物の序に、御覽じつけて、破らせ給ひなどするに、彼の須磨の落魄に、所々より奉りける文のある中にも、紫上の御手跡なる文は、特別に結び合せてぞありける、院の自身爲置き給ひけることなれど、久しく成りにける世の事と思すに、唯今のやうなる墨着など、實に千歳の形見に爲つべかりけるを、出家しなば、見ずなりぬべきよ、と思せば、かひなくて、疎からぬ女房二三人ばかり、御前にて破らせ給ふ、いとこれほとならぬ事にてさへ、過ぎにし人の手跡と見るは、哀なるを、況して院は、いと、搔き昏らし、それとも見別れぬまで降り落つる御涙の、筆に流れ添ふを、女房ども、餘り心弱しと見奉るべきが、傍痛く不都合ければ、押遣り給ひて、

あり
 小中の卯の
 月新嘗會辰
 の日豊明節
 會にて搦れ
 衣を着るな
 り
 五節君云々
 ○此事も乙
 女帖にあり
 ○公卿とも
 は豊明節會
 に我は紫上
 の思に月日
 の行くも
 知らずとて
 日影に日蔭
 の憂へたり
 破れは惜し
 ○細流抄に
 やられば惜
 し見えぬべ
 しに泣くべ
 りと返す勝

(源歌) 死出の山、越えにし人を、慕ふとて、跡を見つゝも、

猶惑ふかな、

伺候ふ女房達も、正面にはえ擴げねど、紫上の御手跡と、ほのぼのの見えるに、心惑ひども一通ならず、此世ながら、遠からぬ須磨の御別離の間を、いみじと思しけるまゝに、書き給へる言の葉、實にその折よりも、今は涙にせきあへぬ悲しさ、遣らむ方なし、いとうたて、今一段の御心惑ひも、女々しく、人様悪くなりぬべければ、院は能くも見給はで、詳細に書き給へる傍に、(又歌) かきつめて、見るもかひなし、藻鹽草、同じ雲の、

烟とをなれ、

と書き附けさせ給ひて、その御文ども、皆焚かせ給ひつ、御佛名も、もはや今年ばかりにこそはあれ、と思せばにやあらむ、例

千歳の形見
かひな抄に
思ひな跡
そ千の形
見ありける
とあり云々
御白樂天々
少君集序元
涕與吟黃壤
悲且吟我白
誰知我白
頭獨念君
唯將老君
人一文とあ
死出の山云
々々死去り
し人な墓
筆跡を見そ
尚悲み惑ふ
かきつめ
云々つめ
人の文は亡
くるにわか
こめくも同
じばつな

○幻

年よりも特別に、錫杖の聲々など、哀に思さる、世を遁るゝも
間近になりぬるに、導師の、院の行末長きことを請ひ願ふも、佛
の聴き給はむこと、傍痛し、雪甚く降りて、且消えもせず、眞
實に積りにけり、導師の退出るを、御前に召して、勸盃など、例
年の作法よりも差別かせ給ひて、特別に祿など賜はず、年頃久
しく参り、朝廷にも奉仕りて、冷泉院にも御覽じ馴れたる御導
師の、頭は漸々色變りて、伺候ふも哀に思さる、例の親王達、公
卿等など、數多参り給へり、梅の花の纒に氣色はみ始めて、雪
に持て囃されたる程、面白きを、紫、上の一週忌も過ぎぬれば、御
樂遊などもありぬべけれど、尙今年までは、樂の音も咽びぬべき
心地し給へば、時節によりたる朗詠、打誦しなどはかりぞ爲さ
せ給ふ、まこと導師の勸盃の序に、

三百三十六

と火葬の烟
見ひみ松と
かひに貝を
かけたり毎
御十二月に
行なはる佛
會に錫杖亦
錫杖の影
名に錫杖也
顯聖智也
とあり佛名
鳴らすな
り○佛名
勸盃の夜
會の第二名
に柏梨の勤
孟とて左近
府にて導は
るに盃を賜
る○來ての
で○命も今
は雪の中に
遊ぶよとして

○幻

（源歌）春までの、命も知らず、雪の中に、色づく梅を、今日
挿頭してむ、
と言ふを、導師、御返歌、
（導歌）千世の春、見るべき花と、祈り置きて、我身ぞ雪と、共
にふりぬる、
と申しぬ、人々も多く詠み置きたれど、漏らしつ、院はこれま
で、内にはかり籠り居給ひしを、その日ぞ始めて外に出で給へ
る、御容貌、昔の御光にもまた多く添ひて、世にまたと有り難く
愛甚く見え給ふを、この經りぬる齡の僧は、あへなく感涙もえ
留めざりけり、院は年も暮れぬと思すも心細きに、追儼はむ
音高かるべき事を、若宮宮の、何業を爲させむと思ひて、走り
歩き給ふも、面白しく美しき御有様を、これも出家せば、見ざ

三百三十七

し源氏君の隠れ給へる悲しさを書かむとせば、誰が上の悲しみには書くべき、源氏君ならぬ人の心の悲しみにては、深きあはれは盡し難かるべし、これはた源氏君の隠れ給へることを書かざる故の一つなり、

古き抄ども、此卷の論、當らぬこと、また用なきこと多し、あるは古人の終りを知らざる例、また唐土の國の逸詩といふ物を、例に引かれたるなど、當らぬことなり、あるは佛の道の、天台の法門を、ことごとくしく引き出てられたるなど、特に由もなき非事にて、更に用なきことなり、また仁義禮智信を專にして、人の教たりといひ、人に佛道を勧めむ爲なりなどある、凡て物語といふもの、意をば、尋ねむともせず、ひたすら唐書佛典にのみ詔ひて、強にその趣に叶へむとて、由もなき事どもを引き當てられたる、返すく味氣なく、言痛くうるさき業にぞありける、とあり、

第四十二帖 匂宮

此帖は薰君
十四歳の春
より二十歳
の春に至る

匂宮薰君繼
六條院後影

匂宮薰君系
統

六條院雲隠れ給ひにし後、彼の御影に立續き給ふべき人、幾多の御子孫の中にも、有り難かりけり、冷泉院をば、御後に擬へ懸け奉らむも、これは隱密の御子なれば、畏多し、當代の三の宮匂宮、院と、六條院にて生ひ出で給ひし宮の若君薰君との、この二の宮の外孫、一人々々に清らなる御名取り給ひて、實にいと普通ならぬ御有様なるめれど、いと目眩き分際にはおはせざるべし、唯尋常の人様に、愛甚く貴に艶めかしくおはするを根本として、三の宮は、御父は今帝、御母は中宮明若君は、御母は皇女宮三、御父は太上皇六條院なる上に、冷泉院の御養子にさへおはせば、然る御間柄に、人の思ひ申したる待遇、有様も、古の源氏君の御評判

氣容よりも、や、立勝り給へる勢望がらそ、幾分は此上なく厳重しかりける、三の宮は、故紫、上の御心寄せ、格別に養育み申し給ひし故に、二條院におはします、今上の一の宮春宮明石中宮御腹をば、然る尊き位に置き奉り給ひて、さて三の宮をば、今上、中宮、いみじく慈愛しく爲奉り傳き申させ給ひければ、内裡住を爲させ奉り給へど、三の宮は、尙心安き故里の、二條院に住み善く爲給ふなりけり、三の宮は御元腹し給ひては、兵部卿、宮と申す、女一、宮明石中宮御腹は、故紫、上の住み給ひし六條院の南の町の東の對を、當時の修飾を更めずおはしまして、朝夕に紫、上をば戀ひ忍び申し給ふ、二の宮春宮の同母弟も、同じ六條院の寢殿を、時々おんやすみどころの御休所に爲給ひて、夕霧、右大臣左大將の中姫君雲井雁の御腹を、妃に爲給へり、さて二の宮は、次の東宮候補にて、いと勢望特別に、重

匂宮住二
條院稱二兵
部卿宮一

夕霧大將女
子

重しく、人品も剛直にぞものし給ひける、夕霧、右大臣の御女は、いと數多ものし給ふ、大姫君同上は、春宮に參り給て、また競争ふ人もなき様にて侍ひ給ふ、中姫君は、右にもものせし如く、二の宮に參り給ひ、その次は順序のまゝに、三の宮にこそはと、世の人も思ひ申し、明石、中宮も、さやうに言はすれど、この三の宮兵部卿、宮匂宮は、さやうに順序のまゝに、右大臣の御女を得むとも思したらず、一體この宮は、我が心より起らざる、他人より勧めむ女などは、不用じくも思しぬべき、浮氣なる御氣色なるめり、夕霧、右大臣も、心に、何かは同じ様に、次々さやうにばかり聳には取り奉らむ、と思し鎮め給へど、また兵部卿、宮の、然る御氣色あらむをば、強ち持て離れてもあるまじく、面向けて、いと甚く傳き申し給ふ、御女六の君藤典侍の腹ぞ、その頃、少し我は

花散里移ニ
住ニ條院東
院
女三尼宮移ニ
住ニ條宮一

と思ひ上り給へる親王達公卿等の、競争ひ懸想じて、御心盡す種類にもものし給ひける、六條院崩御れ給ひて後、院の内に様々集ひ給へりし御方々、何れも皆泣くく、終におはすべき住所どもに、各移轉ひ給ひしに、花散里は、二條院の東院をぞ、御處分の所にて渡り給ひにける、尼宮女三は朱雀院より御處分の三條院におはします、明石中宮は、内裡にばかり伺候ひ給へば、六條院の内は、寂しく人寡になりけるを、夕霧右大臣、心の中に、他人の上にて、古の例を見聞くにも、生ける限りの世に、心を留めて作り占めたる人の家居の、名残なく打捨てられて、世の習慣も無常に見ゆるは、いと哀に果敢なき知らるゝを、我が世にあらむ限りなりとも、この六條院は荒さず、近邊の大路など、人影離れ果つまじく、と、思し言はせて、花散里の住み給ひ

落葉宮移ニ
住ニ條院良
町
二條院云々
○二條院に
は明石中宮
の御腹なる
三の宮六條
院には同腹
の女一宮女
二宮など住
み給へり

し、良の局町に、彼の一條宮なる、落葉宮を渡し奉らせ給ひてぞ、三條殿雲井雁と、夜毎に十五日づつ、正直しく通ひ住み給ひける、さて二條院として作り磨き、六條院の春殿として、世に言ひ騒ぎし玉の臺も、唯明石上一人の御末孫の、住み給ふ爲なりけりと見えて、明石上は、數多の皇子皇女達の御後見を爲つゝ、扱ひ申し給へり、夕霧右大臣は、何方の御事をも、父院の時の、昔の御心掟のまゝに、改め變ることなく、普き親心に奉仕り給ふにも、故紫上の、かやうにて今に存生へ給へらましかば、如何ばかり心を盡して、奉仕り見え奉らまし、遂に少許も取別きて、我が心寄と見知り給ふべき節もなくて過ぎ給ひにしことを、口惜しく、飽かず悲しく思ひ出て申し給ふ、さて天下の人、六條院を戀ひ申さぬはなく、右に左につけて、世間は唯火を消した

諸人追慕
六條院紫上

薰君爲三冷泉院猶子
薰君敘從四位任侍從兼右近衛中將

るやうに、何事も光榮なき歎きをせぬ折なかりけり、況して二條、六條、兩院の内の人々、明石、上、花散里、秋好、中宮、明石、中宮などは、更にも申さず、限なき故院の御事をば、それとしても、また彼の紫、上の御有様を、心に染めつゝ、萬の事につけて、思ひ出で申し給はぬ時の間なし、たとへば春の花の盛りは、實に長からぬによりて、その勢力勝るものにぞありける、二品あつみみや尼宮宮女三の若君わかぎみ薰は、故院の申し付け給へりしまゝに、冷泉院取別きて思し傅かじつき、秋好、中宮も、皇子達などおはせず、心細く思さるゝ所に、此度この若君わかぎみ薰を、御猶子として、嬉しき御後見に、眞實に頼み申し給へり、さて若君は、元腹なども、冷泉院にて爲させ給ふ、十四歳にて、二月に侍從になり給ふ、秋、右近、中將になりて、院院冷泉より御給りの加階などをさへ、何の待遠もな

きに、急ぎ四位を加階へて、大人びさせ給ふ、院のおはします御殿近き對を、中將中將君の曹司さうしに修飾しゅうしひなどして、院、自身、親しく御覽ごらんじ入れて、奉公人ほうこうにんには、若き人も、童、下使しもつかひまで、勝れたるを撰り整へて、女宮にんなみやを傅かじつき給ふよりも、目眩まはゆく整頓ととのへさせ給へり、院にも、中宮中宮秋にも、伺候さぶらふ女房にうちの中に、容貌かたちよ美しく、貴やかに見善みやよきものは、皆中將の方へ移し渡し給ひつゝ、院の内を、中將の心につけて、住みよく在りよく、思ふべくとばかり、故意わざとがましき御扱ごんあつかひ種ぐさに思され給へり、さて冷泉院には、故致仕、太政大臣の御女、弘徽殿、女御と申し、御腹おんはらに、皇女唯一ひめみよたがひと所り女におはしけるをぞ、限なく傅かじつき給ふ、その御有様に劣らず中將をば傅かじつき給ふ、さて秋好、中宮は、中將を吾が御子の如く爲給へれば、中將のかく傅かじつかれ給ふも、全く中宮の御寵愛ごんおほえの、年月

蓮の露○古今集に蓮葉の濁りに染まぬ心もて何かは露を玉とあざむくとあり五の障○提婆女品に女人身猶有五障一者不得作梵天二者帝釋三者魔王四者轉輪聖王五者佛身云々とあり

氣色を知らする人のなきなるめり、と思ふ、母宮には、明暮勤行め給ふやうなるめれど、果敢なく大様子給へる女の御悟道の程に、蓮の露も明白に、玉と磨き給はむことも難かるべし、五の障も、尙後めたきを、我この御心を助成けて、同じくは後世なりとも、安く思はせ奉らむと思ふ、彼の過ぎ給ひにけむ右衛門督も、安からぬ思に結ばれてやおはさむ、など推量るに、世を更へても、對面せまほしき心着きて、元服は物憂がり給ひけれど、辭退ひ果てず、自然世間に持成されて、目眩きまで花やかなる御身の飾も、心に着かずばかり思ひ鎮まり給へり、今上にはまた春宮におはし、折、故朱雀院より仰せ置かれし筋もありて、母宮の御方様の御心寄せ、深くおはしければ、中將に對しても、いと哀なるものに思され、明石、中宮もまた、元より一

つ御殿の六條院にて、その御腹の皇子達と、諸共に生ひ出で遊び給ひし御待遇、今も專改め給はず、六條院の末の世に生れ給ひて、故院の心苦しく、大人しくもえ見置かぬことよ、と、院の思し宣ひしを、中宮の思ひ出で申し給ひつ、疎畧ならず思ひ申し給へり、夕霧、右大臣も、我が御子どもの君達よりも、この中將君をば、濃かに尊く待遇し傳き奉り給ふ、昔光君六條と申し、は、然る世に二人となき御勢望ながら、弘徽殿太后を始め、妬み給ふ人打添ひ、外戚の御後見なくなどありしに、光君は、御心様も、物深く世の中を思し宥らめし間に、世に雙びなき御光をば、目眩からず持て鎮め給ふ、遂に須磨の左遷のやうなる、然るいみじき世の亂れも出で來ぬべかりしをも、別段に事なく過ぐし給ひて、嵯峨の院に隱居し給ひては、後世の御勤行も後ら

香の馨ばし
さぞ云々○
聖徳太子は
一たび太子
を抱げば數
月香を懐く
とありてま
た宋の太祖
は洛陽の夾
馬宮といふ

かし給はず、萬事然りげなくて、久しく長閑けき御心控にこそ
ありしか、この中將君は、また御年も若きに、世の勢望いと尋常
に過ぎて、思ひ上りたること、此上なくなどものし給ふ、實に
然る因縁ありて、いと現世の人とは作り出でざりける、佛の假
に托胎れる化身かとも見ゆること、添ひ給へり、容貌もそこは
かと、何處ぞ勝れたる、あな清らと見ゆる所もなきが、唯いと
艶めかしく、耻かしげに、心の奥多かりげなる氣貌の、世人に
似ぬなりけり、香の馨ばしさぞ、此世の匂ひならず、怪しきま
で打振舞ひ給へる、邊遠く隔てたる間の追風も、眞に百歩の外
に薰りぬべき心地しける、誰もそれほど高き品になりぬる人の、
御有様の、いと窶ればみ、唯有りのまゝなるはあらじ、様々に、
我他人に勝らむと修飾ひ、用意すべかるめるを、この中將は、片

所に生れし
に其所異香
ありければ
世人これを
香孩兒宮と
いひしこと
あり
袖懸け給ふ
○古今集に
色よりも香
こそあはれ
と思はゆれ
誰か袖ふれ
し宿の梅ぞ
もとあり
栗にも濡れ
○伊勢集に
匂ふ香の君
思ほゆる花
なれば折れ
る栗に我ぞ
濡れぬると
あり

輪なるまで、打忍び立寄りむも、物の隈著き、動靜の隠れある
まじきに、面倒がりて、專ま薰香など取りも着け給はねど、數多
の御唐櫃に埋没れたる香の匂ども、この中將に對しては、匂
を失ひて、この君のは、言ふ由もなき匂を加へ、御前の花の木
も、何心なく袖懸け給ふ梅の香は、春雨の雫にも濡れ、身に染
むる人多く、秋の野に主なき蘭も、本の薰りは隠れて、懐かし
き追風、他に異に、中將の折成からぞ勝りける、かく奇怪しき
まで、人の咎むる香に染み給へるを、兵部卿宮宮ぞ、他事よりも、
この薰香の事挑ましく思ひ、宮は故意と、萬の薰物の勝れた
る、荷葉、梅花などの、薰物を焼き染め給ひ、朝夕の事業に、調
合せ營み、御前の前裁にも、春は梅の花園を詠め給ふ、秋は世
の人の愛づる、女郎花、小男鹿の妻にするめる萩の露にも、專

主なき蘭も
 ○古今集に
 主知らぬ香
 こそ匂へれ
 秋の野に誰
 がぬきかけ
 し藤袴でも
 とあり
 人の咎むる
 ○古今集に
 梅の花立寄
 るばかりあ
 しよりひと
 の咎むる香
 にぞ染みけ
 るとあり
 老を忘る、
 ○河海抄に
 皆人の老を
 忘るといふ
 菊は百年を
 ふる花にぞ
 ありけると

御心移し給はず、老を忘る、菊に、衰へ行く蘭、物げなき地榆
 などは、いと不用じき霜枯の頃ほひまで、思し捨てずなどして、
 故意とめきて、香に愛づる思ひをぞ立て、好ましくおはしけ
 る、かゝる間に、兵部卿宮は、少し柔び和き過ぎて、好色たる
 方に引かれ給へりと、世人は思ひ申したり、昔の源氏六條は、凡
 て何事も、かく故意と人目に立つやうにばかり染み給へる方ぞ
 なかりしかし、さて源中將君は、この兵部卿宮句には、常に参り
 つゝ、樂遊などにも、競争ふ樂の音を吹き立て、實に挑ましく
 も、若き同志、忍び交し給ひつべき人の様にぞありける、例の
 世人は、句兵部卿、薰中將と、聞きにく、言ひ續けて、當時、美
 き女おはする尊き所々にては、何れも智に取らむなど、心動搖
 きに申し言ちななど爲給ふもあれば、句兵部卿宮は、様々に面白

あり又白氏
 文集に前頭
 更有蕭條物
 老菊衰蘭三
 兩叢とあり
 句宮薰君艶
 福雙絶

くもありぬべき邊をば、言ひ寄りて、女君の御氣容、有様をも、
 氣色取り給ふ、さて此宮の、故意と御心に懸けて思す方は、別
 段になかりけり、冷泉院の女一宮をぞ、さやうの本妻にしても
 見奉らばや、功能ありなむかし、と、思したるは、御母弘徽殿女
 御致仕大臣の女も、いと重く奥ゆかしくものし給ふ邊にて、姫宮女一の御
 氣容、實に世に有り難く、餘所の評判も勝れておはしますに、況
 して少し近くも侍ひ馴れたる女房などの、詳細しき御有様の、事
 に觸れて申し傳ふるなどもあるに、句宮は、御心に、いと、忍
 び難く思すべかるめり、薰中將は、世間を深く味氣なきものに
 思ひ澄ましたる心なれば、却て心留めて行き離れ難き思や残る
 らむ、など、思ふに、面倒はしき思あらむ女の邊に關係はむは、慎
 ましくなど思ひ捨て給ふ、當分差當りて、心に染むべき女なき

源薰敘從
三位任參
議中將如
故

間、賢しだつにやありけむ、人の許可なからむ所などは、況して思ひ寄るべくもあらず、かくてこの薰君は、十九に成り給ふ年、三位の宰相にて、尙中將も離れ給はず、冷泉院、秋好、中宮の御待遇に、臣下にては、憚なき愛甚き勢望にてもなし給へど、心の中には、身の由來を思ひ知る方ありて、物哀になどもありければ、心に任せて、速進なる好色事も、専好み給はず、萬の事に持て鎮めつゝ、自然成長げたる心様を、世人にも知られ給へり、さて中將は句宮の、年に添へて心を碎き給ふめる、女一宮の御邊を見るにも、女一宮とは冷泉院なる一つ院の内に、明暮立馴れ給へば、事に觸れても、その有様を聞き見奉るに、實にいと普通ならず、奥ゆかしく、由緒々々しき御持成、限りなきを、中將は心の中に、同じくは、實にかやうならむ女を、我

が物として見むにこそ、此世に生ける限りの、心行くべき端なれ、と、思ひながら、冷泉院は、中將に對し、大方こそ隔つることなく思したれ、姫君の御方様の隔ては、此上なく氣遠く習慣はさせ給ふも、道理に面倒しければ、女一宮の方へは、強にも交ひ寄らず、もし我心より外の戀心も着かば、我も宮もいと悪しかるべきことゝ、思ひ知りて、物馴れ寄ることもなかりけり、中將は、我がかく人に愛でられむと成り給へる有様なれば、果敢なく等閑の詞を散らし給ふ邊も、此上なく持て離るゝ心なく、靡き易なる程に、自然等閑の通ひ所も、數多になるを、女の爲、仰山しくなども持成さず、いと能く紛らはし、何處となく情なからぬ間の中將の持成に、その女どもは、却て心疾ましきを、中將に思ひ寄れる女達は、我が心の引く方に誘はれつゝ、母宮の

おはします三條宮に、宮仕にと参り集るもの數多あり、その女
 達、中將の難面きを見るも、困しげなる業なるめれど、一向に
 中絶えなむよりは、かくても見なむと、心細きに思ひ詫びて、宮
 仕すまじき分際の人々も、身を屈し参りものして、果散なき契
 りに頼みを懸けたる多かり、さて難面きとはいへ、さすがにい
 と懐かしく、見所ある中將の御有様なれば、見る人かひなき事
 とは思ひながらも、皆我ながら、我が心に謀らるゝやうにて、見
 過ぐさる、中將は、心に、母宮のかくておはしまさむ世の限り
 は、朝夕に御目離れず御覽せられ、見奉らむをなりとも、せめ
 ての孝養にせむと、思ひ給へば、夕霧、右大臣も、數多ものし給
 ふ御女達を、一人は匂宮へ、一人は中將へ、と、志し給ひながら、
 詞にもえ出し給はず、中將は母こそ異なれ、實は兄弟の間にて、

さすがにゆかしげなき交情なるを、とは、思ひ成せど、匂宮や、こ
 の中將達を、差置きて、他にはまた我が智として、擬へ成すべ
 き人を求め出づべき世かは、と、思し煩ふ、尊き本妻、雲井、雁の
 御腹よりも、藤典侍惟光の腹なる、六の君は、いと勝れて美しげ
 に、心ばえなども、十分ひて生ひ出で給ふ、御庶腹なれば、世
 の勢望の貶しめ様なるべきも、かく可惜しきを、父右大臣、心
 苦しく思ひ、落葉、宮の御子もなく、然る扱ひ種、持ち給はね
 ば、物寂しきに、六の君をば迎へ取りて、養ひ奉り給へり、右
 大臣は、この六の君をば、故意とはなくて、匂宮や、中將など
 に、見せ始めては、必この二人どもの、この六の君に心留め給
 ひてむ、世人の有様をも見知る人は、この六の君を見ては、必
 世人とは特別にこそあるべけれ、など、思ひ、六の君をば、い

夕霧大將行
賭射還饗於
六條院
賭射〇毎年
正月に天子
弓場殿に御
して射藝を
御覽するな
り四衛府の
舍人これを
務め左右近
衛の大將こ
れを監し勝
ち方の大將
これを里亭
に饗すこれ
を還饗とい
ふ清和天皇
貞觀二年正
月十八日こ
れを始めき

と嚴重しくは待遇し給はず、當世風しく、美しきやうに、琴歌
好みせさせて、男の心着けむ便多く作り成し給ふ、
右大臣兼左近衛大將夕霧君は、賭射の還饗の設を、六條院にて、
いと心特別に爲給ひて、親王をもおはしませむの心遣ひし給
へり、賭射の日は、親王達、大人におはするは、皆内裡の弓場
殿に伺候ひ給ふ、明石、中宮の御腹なる皇子は、何れともなく、氣
高く清げにおはします中にも、この匂宮部卿宮は、實にいと勝
れて、此上なく見え給ふ、今上の四の皇子、常陸宮と申すは、更
衣腹におはして、思ひ成しにやあらむ、氣容此上なく劣り給へ
り、例の左列、強に勝ちぬ、例よりは早く事終て、夕霧、左大
將、退出で給ふ、即ち匂宮部卿宮、常陸宮、明石、中宮の御腹
なる五の宮中務と、一つ車に招ぎ載せ奉りて、退出で給ふ、參議

垣下〇垣下
の座とて相
伴掛の人を
いふ
求子〇風俗
八乙女の曲
にやをとめ
は我がやを
とめぞ立つ
やをとめ立

右近衛、中將源薫は、右列にて、負け方は、還饗には加はらざる
例なれば、音なく潜々と退出で給ひにけるを、左大將、
(夕)親王達おはします、御送りに、參り給ふまじや、
と、車押止めさせて、御子の右衛門督、權中納言、右大辨など、
また然あらぬ公卿、數多この車、かの車に乗り交り、中將を誘
ひ立て、六條院へおはす、道のや、程遠きに、雪少許散りて、
艶なる黄昏時分なり、音樂の聲面白き程に、吹き立て遊びて入
り給ふを、實に此院を差置きて、如何ならむ佛國にかは、かや
うの折節の心遣り所を求めむ、とぞ見えたる、寢殿の南の廂に、
常の如く、南向に、中少將着座渡り、北向に向ひて、垣下の親
王達、公卿の御座あり、御蓋など始まりて、音樂愉快くなり行
くに、將監以下、求子舞ひて、搔翻れる袖どもの、打返す羽風

つやをとめ
神のますこ
の御社にと
あり
闇夜は〇古
今集に春の
夜のやみは
あやなし梅
の花香をた
つれてぞ知
るべかりけ
るとあり
香にこそ〇
細流抄に降
る雪に色は
まがひぬ梅
の花香にこ
そ似たるも
のなかりけ
れとあり
神のます〇
求子の二段
の詞なり

に、御前近き梅の、いと甚く綻び溢れたる薰香の、さと打散り
渡れるに、例の薰中將の御薰りの、いと、しく持て囃されて、言
ひ知らず艶めかし、御簾の中より、纔に覗く女房なども、闇夜
はあやなく、心もとなき程なれども、香にこそ實に似たるもの
なかりけれ、と、愛賞あへり、左大將も、この中將をば、愛甚し
と見給ふ、さて中將は、容貌用意も、平生より勝りて、負方ゆ
ゑ、一層亂れぬ様に、修めたるを見て、左大將は、
(夕) 右中將君も、聲加へよ、甚う客人めきたるよ、
と言へば、中將は、憎からぬ程に、
(薰) 神のます、
など謠ひ給へり、

第四十三帖 紅梅

此帖は薰君
廿四歳の春
より冬に至
る
紅梅右大臣
有二三妻三
女

眞木柱離れ
難く〇まき
の柱は我を
忘するなの
歌眞木柱帖
にあり

その頃按察大納言左大辨、紅梅右大臣と申すは、故致仕、大臣の次郎なり、亡
せ給ひにし柏木右衛門、督の、差次の弟、童より藤々じく花やか
なる心ばえものし給ひし人にて、當官まで昇進り給ふ、年月に
添へて、況していと世にある功能あり、あらまほしく持成御勢
望、いと尊かりけり、北方二人ものし給ひしを、元よりの北方
は、亡くなり給ひて、今ものし給ふ北方は、後、太政大臣鬚黒、
君の御女、眞木柱離れ難く爲給ひし、眞木柱、上を、その外祖
父式部卿宮紫上にて、故螢兵部卿、宮に娶せ奉り給へりしを、螢宮
薨せ給ひて後、按察大納言、忍びつゝ、通ひ給ひしがど、年月経
れば、え然やうにしも遠慮り給はぬなるめり、御子は故北方の

南住大君
西住中君
東住宮姫君

御腹に、二人の女君中君ばかりぞおはしければ、物寂しとて、神佛に祈りて、今の眞木柱上の御腹にぞ、男君大一人儲け給へる、さて眞木柱上は、故螢兵部卿宮の御形見に、女君一所おはす、大納言は隔て別かず、何れをも同じ如く思ひ申し交し給へるを、各御子の御方々に附たる女房などは、親睦しくもあらぬ心ばえ打交り、生曲々しきことも出で來る時々あれど、眞木柱上は、いと晴々しく當世風たる人にて、罪なく執り成し、我が御方様に、苦しかるべきことをも、平穩に聞成し、思ひ直し給へば、聞にくからで、見善かりけり、姫君達は、三人とも、次々に成長び給ひぬれば、御裳など着させ給ふ、七間の寢殿、廣く大きに造りて、南面に、大納言の姫君大君、西に中君、東に螢宮の姫君を住ませ奉り給へり、宮の姫君は、大方打思ふ程は、父宮のお

夕霧右大臣
任左大臣

大君參春
宮稱麗景
殿女御

はせぬが御氣の毒のやうなれど、父宮、祖父宮より、御讓與の御寶物、多くなどありて、内々の儀式有様など、奥ゆかしく、氣高くなど持成して、氣容あらまほしくおはす、大納言は、例の御女、かく多く傳き給ふ評判ありて、次々に従ひつゝ、望み申し給ふ人多く、今上、春宮より、御氣色あれど、内裡には明石、中宮おはしませば、如何ばかりの女かは、彼の御氣容に雙び申さむ、然りとて我が女思ひ劣り卑下せむも、かひなかるべし、春宮には、夕霧左大臣の御女女御雲井雁、雙ふ人なげに侍ひ給ふは、競争ひにくけれど、さやうにはかり遠慮り言ふべきにあらず、他人に勝らむと思ふ女子を、宮仕に思ひ絶えては、何の本意かはあらむ、と思し立ちて、大君をば、春宮へ參らせ奉り給ふ、十七八歳の程にて、美しく、匂ひ多かる心地し給へり、中君も、打

紅梅右府欲
嫁中君於
匂宮

續き貴に、艶めかしく住みたる様は、勝りて美しくおはすれば、
臣下に娶するは、可惜しく見せま憂き御様を、匂兵部卿宮の、さ
やうにも思し寄らば、嬉しからまし、なとぞ思したる、この眞木
柱、上の御腹なる若君夫大を、匂宮、内裡にてなど見付け給ふ時は、
召し纏はし、戯敵にし給ふ、この若君、心ばえありて、後來の
生ひ立、推測らるゝ目つき、額つきなり、匂宮は、

(匂) 其方をばかり見ては、え止まじ、姉君こそゆかしけれ、と
父大納言に申せよ、

など言ひ懸くるを、若君やがて、父君に、

(若) 宮の、かく言ひぬ、

と申せば、大納言は打笑みて、心の中に、いとかひありと思し
たり、

春日の神云
々○春日明
神は藤原氏
の氏神にて
外戚を守護
する神なり

繼母眞木柱
上添大君
侍春宮

(紅) 他人に劣らむ宮仕をさするよりは、美しからむ女子は、こ
の匂宮にこそは見せ奉らまほしけれ、心の行くに任せて、傳
きて見奉らむに、命延びぬべき宮の御様なり、
と言ひながら、まづ大君の、春宮入内の御事を急ぎ給ひて、今
回は、春日の神の御断定も、我が世にや、もし出で来て、亡父
故致仕、大臣の、冷泉院の女御、弘徽殿女御の、秋好、中宮源氏に引
き越されし事を、胸痛く思して止みにし、慰めの事もありなむ、
と心中に祈禱りて、大君をば、春宮に進せ奉りつ、後に麗景殿
女御と申す、いと被寵き給ふ由、人々申す、かゝる内裡住の御
交際の、馴れ給はぬ間はとて、北方眞木柱上、添ひて侍ひ給ふ
は、繼母ながら、實母にも勝りて、眞に限りもなく思ひ傳き、後
見申し給ふ、かゝれば殿の内、徒然なる心地して、西の御方中の

は、これまで南の御方君大と、一つに馴れ給ひしかば、いと物寂しく詠め給ふ、東の姫君御盛宮の御女も、御胤こそ別なれ、互に疎々しくも待遇し給はで、夜々は、一所に御殿籠りして、萬の事習ひ給ひ、果敢なき御遊事をも、中の君を師のやうに思ひ申してぞ、誰も習ひ遊び給ひける、さて東の姫君は、物羞を、尋常ならず爲給ひて、母北方真木柱上にさへ、分明には専差向ひ奉り給はず、片輪なるまで持成し給ふものながら、心ばえ氣容の、埋沈れたる様ならず、愛敬づき給へることも、また人より勝れ給へり、大納言は、心に、かく入内や、何にやかやと、我が實子の方ばかりを思ひ急ぐやうなるも、氣の毒に、など、思して、北方に、

(紅) 東の姫君をば、然るべからむ縁を思し定めて、宜しき様に計らひ言へ、我は實子と同じ事とこそは、奉仕らめ、

東姫君容姿

と申し給ひけれど、母君真木柱上は、

(真) 姫君は、更にさやうの世づきたる様は、思ひ立つべきにもあらぬ氣色なれば、生強の縁は、却て心苦しかるべし、御宿因に任せて、吾が世に有らむ限りは、かくて見奉らむ、亡からむ後ぞ、哀に後めたけれど、その時は、姫君の世を背くにしても、自然人笑ひに、疎忽きことなく、過ぐし給はなむ、

など、打泣きて、御心はせの、思ふやうなることをぞ申し給ふ、大納言は、實子繼子の差別なく、何れも同じ様に親がり給へば、東の姫君の御容貌の、ゆかしく思すに、強に隠れ給ふこそ心憂けれ、と、恨みて、人知れず見え給ひぬべしや、と、覗き歩き給へど、姫君は、物羞して、絶えて片端をさへ見せ奉り給はず、大

紅梅右府訪
東姫君

納言は、姫君に、

(紅) 母上のおはせぬ間は、其方は、母上に立ち代りて参り來べきを、疎々しく、繼父實母を思し別くる御氣色なれば、心憂くこそあれ、

など申して、姫君の御簾の前に居給へば、姫君は、御返答など、微かに申し給ふ、御聲氣容など、貴に、様、容貌、美しく思ひ遣られて、愛憐に覺ゆる御有様なり、我が女達_{大君中君}を、他人に劣らじと思ひ驕れど、この姫君に、えも勝らずやあらむ、かゝれば世間_{なかひろ}廣き中は、吾が女に勝る人もありけるこそ面倒しけれ、比類なく妬ましと思ふにつけては、彼の春宮へ進らせし大君_{麗景殿も女御}も、夕霧、右大臣の長女女御の、以前に参り給へれば、其方の勝る方も、自然ありぬべかるめり、など、いと、不審しく思ひ申し給

ふ、大納言は、姫君に、

(紅) 月頃、何となく物騒がしき間に、御琴の音をさへ承はらで、久しくなり候ひにけり、西の方に候ふ女_{君中}は、琵琶を心に入れ弾き候ふ、さやうにも學び取りつべくや覺え候ふらむ、琵琶は半熟にしたるには、聴きにくき樂の音がらなり、同じくは御心留めて教へさせ給へ、翁は、音樂はこれと取立て、習ふもの候はざりしがど、その以前盛なりし時代に、樂遊び候ひし力にやあらむ、樂の音聴き知る程の辨識は、何樂器にも、いと相應なくは候はざりしを、其方は、打解けても遊ばさねど、時々承はる御琵琶の音ぞ、昔覺え候ふ故六條院の御相傳にて、夕霧、左大臣ぞ、この頃世に残り給へる、源中納言_君、匂兵部卿宮、何事にも、昔の人に劣るまじく、此世の宿

參議右中將
源薰任中
納言

契、いと特別にもやし給ふ人々にて、樂遊の方は、取別けて
 心留め給へるを、手遣ひ少し柔びたる撥音ぞ、二人の君達は、
 左大臣霧夕に及び給はずと思ひ候ふを、其方の琵琶の音こそ、い
 と能く左大臣に似給へれ、押手静やかなるを、善きにするも
 のなるに、柱差す間、撥音の様變りて、艶めかしく聞えたる
 ぞ、女の弾き方としては、却て面白かりける、いで遊ばさむ
 や、女房よ、御琵琶、姫君の御前へ進れ、
 と言ふ、女房などは、隠れ奉るも、専なし、いと若き上臈だつ
 女房の、姫君を見せ奉らじと思ふは、心に任せて、そのまゝ
 居たれば、大納言は、

直衣姿○殿
 上童は束帯

(紅) 伺候ふ女房まで、かく隠し持て成すが、安からぬ、
 と腹立ち給ふ、若君夫、内裡へ参らむと、直衣姿にて参り給へ

の時は總角
 すこれをみ
 づらといふ
 直衣姿の時
 は髪を唯解
 き懸るなり

るが、故意と端麗しき御鬢よりも、いと面白く見えて、いみじ
 く美しと、父君は思したり、かくて大納言は、東宮の女御、麗
 景殿、女御に、御傳言申し給ふ、

(紅) 今宵も、北方に譲り申して、我はえ参るまじく、惱まし
 くぞ候ふと申せよ、

と言ひて、

(又) 笛少し奉仕れ、ともすれば、御前の御樂遊に、召し出で
 らるゝぞ、またいと未熟き笛を、傍痛しや、

と打笑みて、雙調吹かせ給ふ、若君は、いと面白く吹き給へば、
 大納言は、

(紅) 怪しはあらず成り行くは、この姫君の邊にて、自然音樂
 に合奏する故にこそあれ、姫君よ、尙搔き合奏せ給へ、

と、姫君を責め申し給へば、姫君は、困しと思したる氣色ながら、爪弾に、いと能く調子を合せて、唯少し掻き鳴らし給ふ、大納言は、嘯ふつゝかに老練たる聲して、調子に合せ吹き給ひつゝ、この東の端に、軒近き紅梅の、いと面白く匂ひたるを見給ひて、若君に、

(紅) 姫君の御前の花、心ばえありて見ゆめり、兵部卿宮内、裡におはす間なり、一枝折りて參れ、知る人ぞ知る、

とて、

(又) あはれ光源氏六條院の、いはゆる御盛りの大將などにおはせし頃、我はまた童にて、かやうにて交らひ馴れ申し、こそ、世と共に戀しく候へ、今上の皇子達六條院の外孫を、世の人も、いと特別に思ひ申し、實に人に愛賞られむと、成り給へる御有様なれ

知る人ぞ知る
○古今集
に君ならで
誰にか見せ
む梅の花色
をも香をも
知る人ぞ知
るとあり
童にて云々
○紅梅大納
言童の時高
砂謡ひしこ

と棟帖に見
えたり

ども、昔の光君の御盛りに比べては、端が端にも及び給はぬは、尙源氏の御光り、比類あらじと思ひ申し、心の思ひ成しにやありけむ、吾々如き、大方につけて思ひ出で奉るにも、胸開く世なく、悲しきを、況して光君に、氣近く侍りし人の、後れ奉りて、今に生き廻らふは、一通ならぬ命づれなき人ぞか

しとこそ覺え候へ、
など申し出で給ひて、物哀に、凄然く思ひ廻らし、萎れ給ふ、光源氏を思ひ出し給ふ序の、忍び難きにやあらむ、若君して、花折らせ、匂宮へと、急ぎ内裡へ參らせ給ふ、今の宮達は、光君の端が端にも及ばずとも、如何はせむ、昔の戀しき光源氏の御形見には、この匂宮ばかりこそは、佛の寂滅れ給ひにけむ御名残には、阿難が光放ちけむを、佛の再出で給へるかと思ふ、賢

紅梅右府使
若君獻紅
梅於匂宮

阿難○大論
に釋迦佛入

涅槃之後、阿難登高座、結集諸經之時、其形如佛、仍衆會疑佛再出給阿難未證四果之人也、仍阿羅漢等不用之、其時阿難自然現瑞とあり

しき阿難のありけるを、光君を慕ふ、心の闇に惑ふ思をば、この句宮を、阿難として、晴け所に申し冒さむかし、と思して、
(紅歌) 心ありて、風の句はす、園の梅に、まづ鶯の、訪はず

やあるべき、と紅の紙に若やかに書きて、この若君の懐紙に取り交ぜ、押疊みて出し立て給ふを、若君は、幼稚き心に、句宮に、いと馴れ申さまほしと思へば、急ぎ参り給ひぬ、句宮は、明石中宮の、上の御局より、吾が御宿直所に出で給ふ間なり、殿上人、數多御送りに参る中に、句宮は、若君を見つけ給ひて、

(句) 昨日は、何とていと早くは退出でにし、今日は何時参りつるぞ、など言ふ、若君は、

るなり

(若) 昨日早く退出で給ひにし後悔さに、宮にはまた内裡におはしますと、人の申しつれば、今急ぎ参りつるよ、

と、幼稚げなるものながら、馴れて申す、宮は、
(句) 内裡ならで、二條院などの、心安き所にも、時々は遊びに來よかし、彼の院は、若き人どもの、そこはかとなき集る所ぞ、

と言ふ、かくて宮は、この若君を、吾が宿直所に召し放ちて、語らひ給へば、御送りの人々は、近くも参らず、退出で散りなどして、閑靜になりぬれば、宮は、

(句) 其方は、春宮には、暇少し許されにたるめりな、これまで、いと繁く思ほし纏はすめりしを、姉君麗景殿に、寵取られて、人目悪かるめり、

と戯れて言へば、若君

(若) 春宮には、これまで纏はさせ給へりしこそ、困しかりしか、宮の御前には、

と、申し中止して、居たれば、

(句) 其方の父大納言は、我をば、人氣なしと思ひ放たれたるとな、それも道理なり、されども心安からずこそ覺ゆれ、其方の異父姉、東の姫君と聞ゆるは、我とは珍しからぬ、同じ皇族の筋にて、相思ひ給ひてむやと、忍びて語らひ申せよ、と、言ふ序に、若君は、かの紅梅の花と歌とを奉れば、句、宮は、打笑みて、
(句) 恨みて後に、かゝる歌をも贈られなば、面白くもやあらまし、

紅の色に○
後撰集に紅
の色にとら
れて梅の花
香ぞことご
とに匂はざ
りけるとあ
り

とて、打も置かず、御覽ず、枝の様、花房、色も香も、尋常ならず、

(又) 園に匂へる、紅の色に奪られて、香ぞ白き梅には劣れる、といふめるを、いと賢く、色も香も取り並べても、咲きけるかな、

とて、梅は、宮の御心留め給へる花なれば、奉りしかひありて、宮は、頻に持て囃し給ふ、

(又) 今夜は、我は内裡に宿直するなるめり、されば其方も、此方に宿れよ、

と召し籠めつれば、若君は、麗景殿、女御へ、父君より御傳言ありしを、春宮にも参らず、宮の御袖の香も、耻かしく思ひぬべく、馨しくて、氣近く臥させ給へるを、若君は、若き心地には、

比類なく嬉しく、懐かしく思ひ申す、宮は、

(句) この花の主人東の姫君は、など春宮には移ろひ靡き給はざりし、
と言へば、若君、

(若) その理由は知り候はず、唯心知れらむ人に、などこそ、聞き候ひしかな、

など語り申す、大納言の心ばえは、我が實子西の君中をこそ、宮に娶せ奉らむめ、と、思ふべかるめれ、と、宮は聞き合せ給へど、宮は思ふ心は別にて、東の姫君に染みぬれば、この返歌、分明にも言ひ遣らず、翌朝この若君の退出づるに、心に染みもせず、等閑なるやうにて、

(句歌) 花の香に、誘はれぬべき、身なりせば、風の便を、過ぐさましやは、

心知れらむ
○細流抄に
あたら夜の
月と花とを
同しくは心
知れらむ人
に見せばや
とあり宮を
さしていへ
るなり
句宮心在
東姫君

とありて、

(句) さて尙今は、父君どもに、賢うさせずして、忍びやかに
東の姫君へ言へ、

と、返すぐ言ひて、この若君は、東の姫君と、同胞の兄弟なれば、尊く睦しく思ひ申したり、異腹の姉君達は、却て能く見え給ひなどして、例の同胞兄弟の様なれど、童心地には、東の姫君の、重りかに奥ゆかしく、あらまほしくおはする心ばえを、句宮の言ふも、かひある様にて見奉らばや、と、思ひ歩くに、春宮は、麗景殿、女御を、いと花やかに待遇し給ふにつけて、同じく姉君におはせば、同じ事とは思ひながら、尙東の姉君を参らせぬことの、いと飽かず口惜しければ、この句、宮をなりとも、東の姫君に、氣近く引き寄せて、見奉らばやと思ひ歩くに、今度

れ難しとて
我が志別方
にあればか
く言へり

は嬉しき花の序なり、この御文は、昨日の宮の御返歌なれば、父大納言に見せ奉る、大納言は、打見て、

(紅) 妬げにも言へるかな、宮は餘り好色たる方に進み給へるを、許し申さずと聞き給ひて、夕霧、左大臣や、我等が見奉るには、宮には、いと眞實に、御心修治め給ふこそ面白けれ、彼の宮は、仇人にせむに、満足ひ給へる御様を、強ひて眞實だち給はむも、見所少くやならまし、

など、後言ちて、今日も若君の内裡へ參るに託けて、大納言は、
またも御文奉り給ふ、

(紅歌) 本つ香の、匂へる君が、袖なれば、花もえならぬ、名をや散らさむ、と、好色々々しきや、あなかしこ、と、眞實に申し給へり、匂宮は、御心に、彼の大納言の、兩度

本つ香の云々○君來なば我宿の梅も一層匂をますべしとて中君を奉

まで、かく言ひ越すは、眞に我をば、言ひ馴さむと思ふ所あるにやあらむ、と思して、さすがに、御心動搖し給ひて、
(句歌) 花の香を、匂はす宿に、とめゆかば、色に愛つとや、人の咎めむ、
など、尙心解けず、返答へ給へるを、大納言は、心疾ましと思ひ居給へり、

北方眞木柱、上は、春宮より退出で給ひて、禁中邊の事言ふ序に、
(極) 若君の、一夜内裡に宿直して、退出でたりし薫香の、いと面白かりしを、人は尙若君の、自然の人香と思ひしを、春宮には、いと思ほし寄りて、こは兵部卿宮宮に、近づき申しにけり、宜若君は、我をば餘所に荒めたり、など、氣色取り怨じ給ひしこそ、面白かりしか、それにつけても、君には、匂

る由を含めたり兼輔集に本つ香のあるだにあるを梅の花いと匂の添はりぬるかなとあるによれり
花の香を云々○花の邊りは尋れまほしけれど人の咎めやあらむと中君を何となく避けて言へるなり
眞木柱上退
出春宮

宮に、御消息ありしか、然やうにも見えざりしを、
と言へば、大納言は、

(紅) 全く然ることありし、彼の宮は、梅の花愛で給ふ君なれば、彼方の軒の端の紅梅、いと盛なりしを、一通ならで、折りて奉りしなり、移香は、實にこそ心特別なれ、花交らひし給はむ女などは、さやうにはえ染めぬかな、源中納言君は、かく様に、好ましくは、焼き匂はせずして、人香こそ、世に似るものなけれ、中納言の、自然の薰香は、怪しく前世の宿契、如何なりけむ應報にかあらむと、欲知しきことにこそあれ、同じ匂のある名なれど、梅は生ひ出でけむ根こそ、愛憐なれ、彼の匂宮などの、愛で給ふは、然ることぞかし、
など、大納言は、中君を參らせむの心あれば、花に擬へても、ま

づこの匂宮をば、詞に懸け申し給ふ、

螢宮の姫君、東の御方は、物思し知る年齢に、成長まさり給へれば、何事も見知り聞き咎め給はぬにはあらねど、男に見え世づきたらむ有様は、更にと思し離れたり、世の人は、時勢による心ありてにやあらむ、父のある大納言の女の方には、心を盡し申し詫びて、當世風しきこと多かれど、東の姫君は、實父の宮ましまさばれば、萬事につけ、物蕭條に引き入り給へるを、匂宮は、御身に相應しき方に聞き傳へ給ひて、いかで我が物にと、深く思ほし成りにけり、若君を、常に纏はし寄せ給ひつゝ、若君して、忍びやかに、姫君の方へ、御文あれど、大納言は、我が實女中、君をと、深く心懸け申し給ひて、匂宮の、中君に、然も思ひ立ちて言ふことあらば、と、氣色取り、心儲けし給ふを見

るに、北方は、氣の毒に引き違ひて、姫君も、かく匂宮に思ひ
 寄るべくもあらぬ方にしも、匂宮は無げの言の葉を盡し給ふが、
 かひなげなることよ、と、北方は、勿論、東の御方君まで、思し
 言ふ、かくて東の御方よりは、果敢なき御返事などもなければ、
 匂宮は、負けじの御心添ひて、尚々思し止むべくもあらず、北
 方眞木柱上は、心に、匂宮の御有様、などか此儘にても見奉ら
 まほしく、生ひ先遠くなどは、見えさせ給ふに、何かは否み奉
 るべくもあらむ、など、思し寄る時々あれど、姫君は、宮の、甚
 く色めき給ひて、忍び通ひ給ふ所多く、宇治八宮桐壺帝第八の皇子の姫君
 にも、御志淺からで、いと繁く通ひ歩き給ふ、頼もしげなき御心
 の、仇々しきなども、いと、慎ましければ、姫君は、匂宮へは、
 眞實に思し絶えたるを、匂宮よりは、辱き程まで、懇に申し給

ふを、母君眞木柱上ぞ、忍びて邂逅に、御返事をば、賢がり申し
 給ふ、

○紅梅

新編紫史卷七終

三百八十八

